

新青渡遺跡

第2次発掘調査報告書

1 9 8 4

山形県教育委員会

にいあおど
新青渡遺跡

第2次発掘調査報告書

昭和59年3月

山形県教育委員会

序

本報告書は、山形県教育委員会が昭和58年度に実施した新青渡遺跡第2次発掘調査の成果をまとめたものであります。

北に出羽富士「鳥海山」を望み、肥沃な庄内平野を舞台とする酒田市東部の水田地帯は、古くから各時代の遺跡に恵まれ、豊かな自然環境とともに、価値ある歴史環境をかたちづくってまいりました。国指定の史跡となっている、古代出羽国の国府に疑定される「城輪柵跡」、古代の建築部材を埋設している「堂の前遺跡」は、最近の発掘調査によって明らかにされた所産であります。

これまでいわゆる中央に比べて文献史料の少なかった当地域にも、発掘調査などによって多くの資料が蓄積されるようになり、地方史の見直しが必要になっております。本遺跡でも、祭祀に用いられたと思われる斎串や墨書き土器など、平安時代の村落の貴重な発掘資料を得ることができました。

人間が地上に生活している以上、土地とは切り離せない歴史があります。土地に埋蔵された文化財は比較的その痕跡をとどめ、千年以上を経た今日、われわれに当時の生活のあり方を呼びかけてくれます。

近年、埋蔵文化財と農林事業との係わりは増加の傾向にありますが、文化財を国民共有の財産として積極的に保護し、現時点で知り得た祖先の歴史を子孫へ伝達していくことが、われわれ現代人の責務と申せましょう。本書が埋蔵文化財に対する保護思想の普及もかねて、皆さまの御理解の一助となれば幸いと存じます。

最後になりましたが、調査にあたって多くの御協力をいただきました地元の方々をはじめ関係各位に、心から感謝を申し上げます。

昭和59年3月

山形県教育委員会

教育長 大竹正治

例　　言

1. 本書は、山形県教育委員会が山形県農林水産部の委託を受け、昭和58年度に実施した県営ほ場整備事業（北平田第1地区）に係わる、新青渡遺跡（山形県遺跡地図番号2024）の緊急発掘調査報告書である。

2. 発掘調査は、昭和58年7月4日から同年9月30日までの延56日間行なった。

3. 調査体制は下記の通りである。

調査主体 山形県教育委員会

調査担当 山形県埋蔵文化財緊急調査団

調査担当者 主任調査員 佐藤庄一（庄内教育事務所 埋蔵文化財調査係長）

　　現場主任 安部 実（同 技師）

　　調査員 野尻 侃（同 技師）

事務局 庄内事務所長 池田泰正（同 所長）

　　所長補佐

　　総務担当 藤塚真一（同 次長）

　　山田 登（同 次長）

　　庶務担当 金内光彦（同 総務課長）

　　業務担当 成田恒夫（同 社会教育課長）

　　事務局員 藤原正俊（同 総務主査）

4. 調査にあたっては、山形県庄内支庁経済部最上川右岸土地改良事務所、日向川土地改良区、並びに酒田市教育委員会、新青渡・漆曾根部落など諸関係機関の協力を得た。ここに記して感謝を申し上げる。

5. 本調査に先立つ昭和57年8月2日から同年9月10日まで、今年度調査区の北側を県営ほ場整備事業に係わり緊急発掘調査を行なっている。調査結果は『山形県埋蔵文化財調査報告書第67集「新青渡遺跡第1次発掘調査報告書」1983年』として既報されている。

6. 本書の作成は安部 実、佐藤庄一が担当執筆した。実測図・トレース・拓本等の作成は、吉村加代子、鈴木繁子、小野真由美、坪池悦子、池田玲伊子が、庄内地方出土の墨書き土器集成は庄司功がこれにあたった。遺物写真撮影は安部が、編集を野尻が、全体を佐藤が総括した。

7. 木製品・種子等の種別判定では、山形大学農学部荻山紘一教授・大谷博彌助教授の御協力が得られた。ここに記して感謝申し上げる。

8. 木簡の墨書解読に際しては、東北歴史資料館の赤外線テレビセットを使用させていただくことが出来た。ここに感謝申し上げる。

凡　例

1. 本書で使用した遺構の分類記号は次のとおりである。

S A……柱列 S B……建物 S D……溝 S E……井戸 S G……河川
S K……土壤 S Q……製鉄遺構 S X……その他 E B……柱掘り方

2. 遺構番号は、1次調査のものが1～129番まで使用したので、2次調査のものは130番以降として表記した。

3. 報告書執筆の基準は次のとおりである。

- (1) 遺構実測図中の方位記号は真北を示している。なおグリッドの南北軸線は真北から東へ25度31分傾いている。
- (2) 遺構実測図は原則として $\frac{1}{40}$ ・ $\frac{1}{60}$ ・ $\frac{1}{100}$ の縮尺で採録し、各々にスケールを付した。
- (3) 遺物実測図は原則として $\frac{1}{10}$ ・ $\frac{1}{10}$ で採録し、各々にスケールを付した。
- (4) 土器実測図および拓影図の断面は、白ヌキが土師器・赤焼土器、黒ベタが須恵器を現わしている。土器内面又は外面に網点が施されているものは、炭素吸着又は施釉陶器、砂目点の時は灰かぶりを現わしている。
- (5) 遺物観察表中にある計測値()内の数値は図上復元による推定値で、< >内の数値は残存長である。「底部切り離し」の「回糸」は回転糸切り離しを、「ヘラ切」は回転ヘラ切り離しを現わす略記である。出土地点・層位中のFは覆土中出土を、Yは底部出土を現わす。
- (6) 遺物写真は、遺物実測図縮尺に合うように $\frac{1}{10}$ を原則としたが、外れるものは各々縮尺を註記した。なお、畜串・木製品類については $\frac{1}{10}$ とした。
- (7) 遺物実測図・遺物写真・遺物観察表中にある遺物番号は共通のものである。

目 次

I 遺跡の立地と環境	
1. 地理的環境	1
2. 歴史的環境	1
II 調査経緯	
1. 調査に至る経過	5
2. 調査の経過	6
III 調査結果	
1. 調査の方法	7
2. 層 位	9
3. A区検出遺構	12
4. B・B'区検出遺構	12
5. C区検出遺構	27
6. 出土遺物	29
7. 墨書き土器	57
IV ま と め	
1. 遺構の配置と変遷	64
2. 庄内地方出土の墨書き土器	67

挿 図

第1図 遺跡位置図	2	第11図 S K311土壤	18
第2図 地形分類図	3	第12図 S K251・252・235・455土壤	20
第3図 グリット配置図	4	第13図 S K248・249・234土壤	21
第4図 試掘場位置図	6	第14図 S K255・179土壤	22
第5図 試掘場地山III層柱状図	8	第15図 S Q208製鉄遺構	23
第6図 B・B'・C区平面図(S = 1/100)	10	第16図 建物跡南北軸方位	25
第7図 A区平面図(S = 1/100)	11	第17図 出土遺物(1)S E 250井戸跡(2)	35
第8図 B・B'区平面図(S = 1/100)	13	第18図 出土遺物(2)S E 250井戸跡(1)	36
第9図 C区平面図(S = 1/100)	15	第19図 出土遺物(3)S E 250・260井戸跡, S K311土壤(1)	37
第10図 S E 250・260井戸跡	16		

第20図	出土遺物(4) S K311土壤(2)	38	第29図	出土遺物03 S K255土壤	47
第21図	山土遺物(5) S K311土壤(3)	39	第30図	出土遺物04 S K179・237・288土壤	48
第22図	出土遺物(6) S K311土壤(4)	40	第31図	出土遺物05 S Q208	49
第23図	出土遺物(7) S K311土壤(5)	41	第32図	木製品(1)	51
第24図	出土遺物(8) S K311土壤(6)	42	第33図	木製品(2)	52
第25図	出土遺物(9) S K234土壤	43	第34図	木製品(3)	54
第26図	出土遺物00 S K235・249・257・ 258土壤 S D345溝状遺構	44	第35図	墨書土器分布図	58
第27図	出土遺物01 S K252土壤(1)	45	第36図	墨書土器出土点数グラフ	63
第28図	出土遺物02 S K252土壤(2)	46	第37図	庄内地方出土墨書土器(1)	66
			第38図	庄内地方出土墨書土器(2)	67

図 版

図版 1	遺跡周辺航空写真、遺跡近景	図版12	B区 S E250上層、S K260遺物 出土状況
図版 2	南北パイプ埋設箇所試掘状況、東 西排水路試掘状況	図版13	B区 S E250土層、S K311遺物 出土状況
図版 3	A区 調査状況、遺構検出状況	図版14	B区 S K311ひょうたん出土状 況、S K255・258上層遺物出土状 況
図版 4	A区 S B132・142・150建物跡、 S X130落込み、S B150遺物跡	図版15	B区 S K255上層東側遺物出土 状況、S K255・256土層
図版 5	A区 S B132・142建物跡、S B 142建物跡	図版16	B区 S K255上層西側遺物出土 状況、S K255土層堆積状況
図版 6	A区 S B132建物跡	図版17	B区 S K255下層遺物出土状況、 S K255完掘状況
図版 7	B区 南側遺構検出状況、北側遺 構検出状況	図版18	B区 S K255完掘状況、S K311 土壤土層
図版 8	B区 西側遺構検出状況、B'区 S G460河川跡	図版19	B区 S K311土層近景、S K235 土壤
図版 9	B区 東側遺構検出状況、B'区・ C区近影	図版20	B区 S K249土壤、S K251土壤
図版10	B区 柱根残存柱穴		
図版11	B区 S E250・260上層遺物出土 状況、S E260井戸跡		

- 図版21 B区 S K252土壤, 同遺物出土状況
- 図版22 B区 S D433漆器出土状況, B'区遺構検出状況
- 図版23 B'区 溝状遺構検出状況, 西側完掘状況
- 図版24 B'区 東側完掘状況, 調査状況
- 図版25 B'区 S G460・溝状遺構, C区遺構検出状況
- 図版26 C区 完掘状況全景, 同西側
- 図版27 C区 S K237遺物出土状況, 完掘状況東側
- 図版28 C区 S K237遺物出土状況, S K179遺物出土状況
- 図版29 C区 S K179土層, S Q208南側
- 図版30 C区 S Q208製鉄跡, 同土層
- 図版31 C区 S Q208完掘状況, 同左
- 図版32 出土遺物(1)S E250井戸跡
- 図版33 出土遺物(2)S E250井戸跡
- 図版34 出土遺物(3)S E250・260井戸跡, S K311土壤(1)
- 図版35 出土遺物(4)S K311土壤(2)
- 図版36 出土遺物(5)S K311土壤(3)
- 図版37 出土遺物(6)S K3I1土壤(4)
- 図版38 出土遺物(7)S K311土壤(5)
- 図版39 出土遺物(8)S K311土壤(6)
- 図版40 出土遺物(9)S K234土壤
- 図版41 出土遺物(10)S K235・249・257・258土壤 S D345溝状遺構
- 図版42 出土遺物(11)S K252土壤(1)
- 図版43 出土遺物(12)S K252土壤(2)
- 図版44 出土遺物(13)S K255土壤
- 図版45 出土遺物(14)S K179・237・238土壤
- 図版46 出土遺物(15)S Q208
- 図版47 出土遺物(16)畜串
- 図版48 出土遺物(17)木製品
- 図版49 出土遺物(18)木製品・木簡
- 図版50 出土遺物(19)
- 図版51 S E250井戸跡出土種子
- 図版52 S K311土壤出土種子
- 図版53 墨書き土器(1)
- 図版54 墨書き土器(2)
- 図版55 墨書き土器(3)
- 図版56 墨書き土器(4)
- 図版57 墨書き土器(5)
- 図版58 墨書き土器(6)
- 図版59 墨書き土器(7)
- 図版60 墨書き土器(8)
- 図版61 墨書き土器(9)
- 図版62 墨書き土器(10)
- 図版63 墨書き土器(11)

I 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

新青渡遺跡は、県北西部庄内平野の北半部中央（いわゆる飽海平野）に位置する。酒田市街より北東約4km、酒田市大字新青渡字家際を中心とした水田中にある。標高は約4mを測る。飽海平野では酒田北部三角洲に立地する数少ない平安時代の遺跡である。

庄内平野は県内最大の平坦地で、南北約50km、東西約6～16km、面積約530km²（砂丘部を除く）を測る。日本海と接する西縁には日本海側有数の庄内砂丘があり、北端は吹浦川河口から南端は湯野浜付近まで、約34kmに渡って延びている。標高は中央部で約64mを測る。

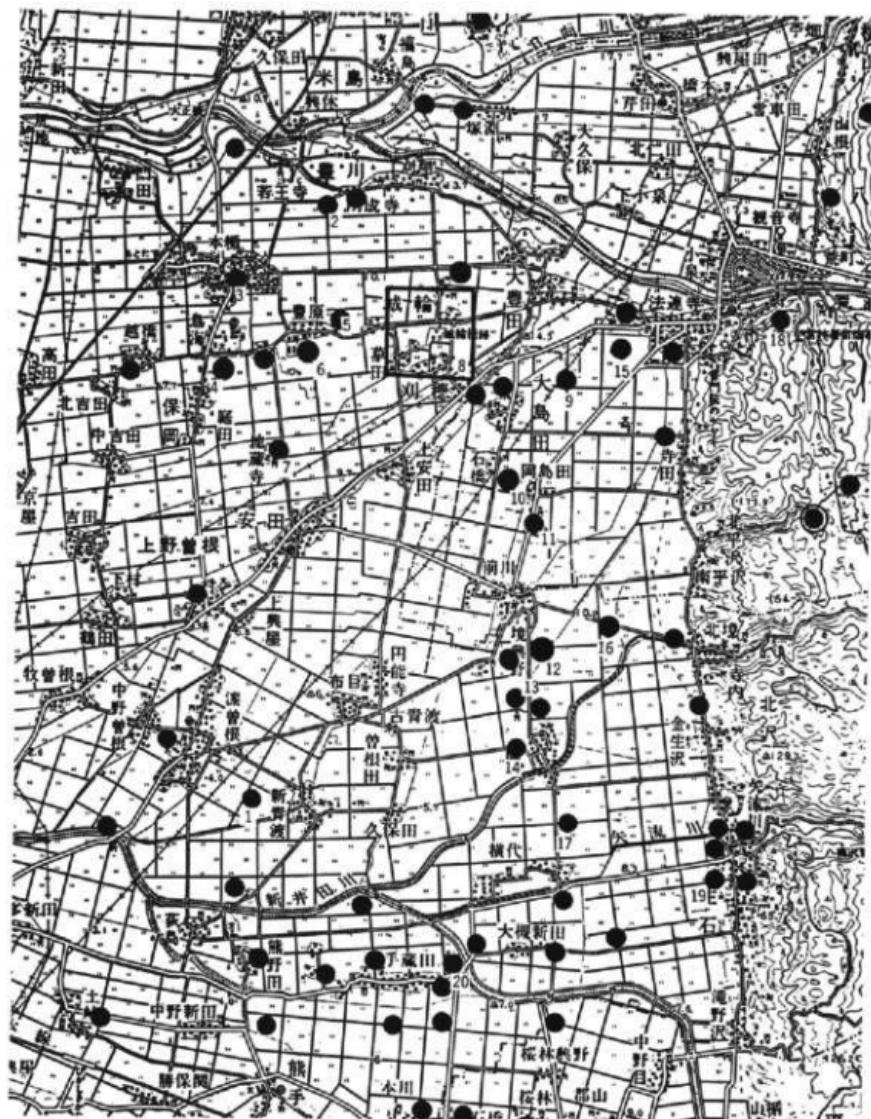
平野部の中央を最上川（県最南端から中央部を経て日本海に注ぐ延長224kmの一級河川）が貫流しており、庄内平野で広い氾濫源を形成しながら諸川と合流し日本海に入っている。遺跡の立地する飽海地方の地形は、東側の出羽丘陵地域と西側の庄内北部砂丘の3つにさらに区分される。平野部は東から庄内北部河間低地、酒田北部三角洲、庄内北部砂丘の3つにさらに細分されている河間低地には、自然堤防・後背湿地・狭義の河間低地を含んでいる。自然堤防は日向川・荒瀬川沿いにみられるほか、安田・漆曾根・布目などにあり、観音寺から南西に放射状に存在する。これらは高度があまりなく、不明瞭な場合が多い。

第2図は、地形分類図に古代の遺跡を註記したものである。これを観るに、新青渡遺跡を除いた古代の遺跡の大半は狭義の河間低地上に立地している事が理解される。自然堤防上には、城輪柵跡と大規模新田遺跡の二箇所が確認されるが、この他にも未発見の遺跡が存在する可能性が考えられる。三角洲や後背湿地にほとんど遺跡が確認されていないことは、当時においては湿地状態で居住には不適当であったことが伺われる。平安期における古代集落・官衙の存在は出羽丘陵に沿う河間低地に集中していたものと考えられる。

2. 歴史的環境

新青渡遺跡の北北東4kmに、平安期の出羽国府と擬定されている国指定史跡「城輪柵跡」がある。

城輪柵跡は昭和6年に発見された後、近年に至る発掘調査によりその姿が明らかにされきていている。一辺720m方形の築地で固まれた外郭部と、その中心部には一辺120m方形の内郭部（政庁域）が認められている。政庁域は四辺中央に門が開いており、外郭の東西および南北にある八脚門と、幅6～9mの道路状遺構で結ばれている。ここには、正殿・東西脇殿他の主要殿舎が整然と「匂」字形に配置されて確認されており、3時期（9世紀前半～11世紀）に区分されている。

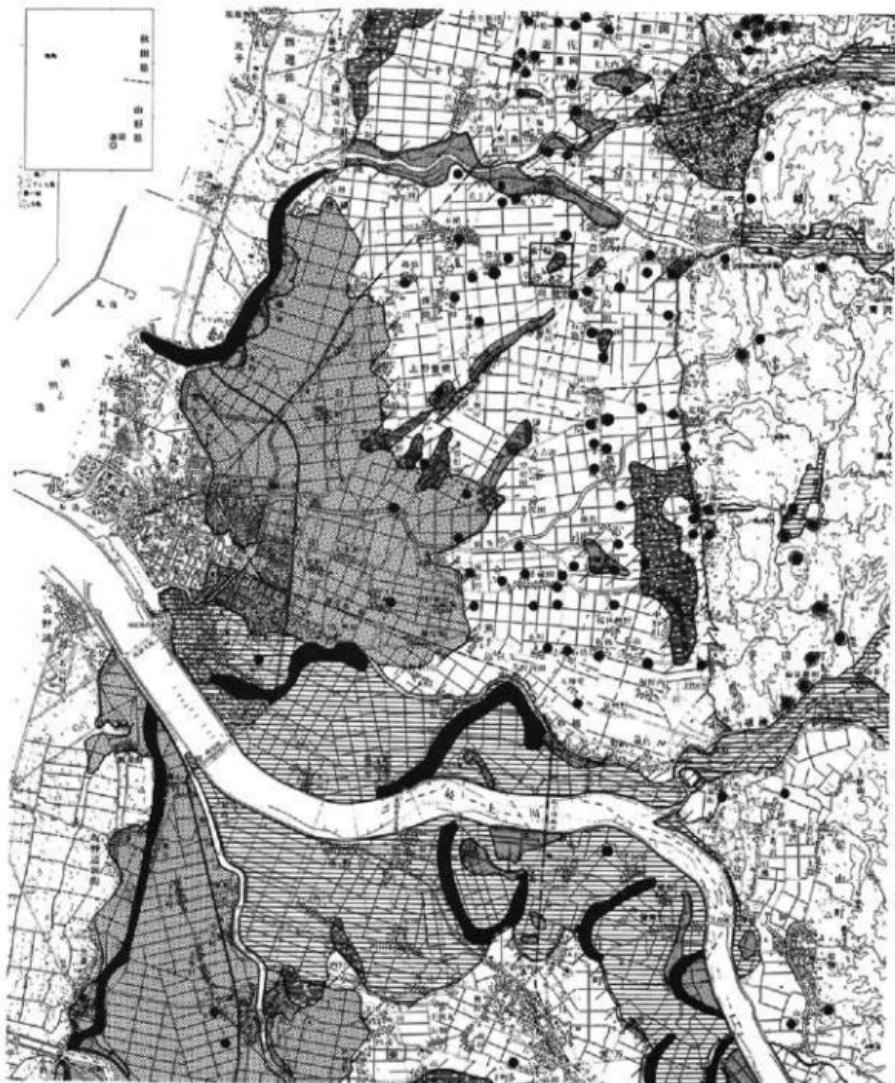


第1図 遺跡位置図

1:50,000 酒田

1000m 0 1000 2000 3000m

- | | | | | |
|-----------|------------|------------|-----------|--------------|
| 1. 新青渡遺跡 | 2. 新田目B遺跡 | 3. 新田目城跡 | 4. 庭田遺跡 | 5. 豊原遺跡 |
| 6. 豊原B遺跡 | 7. 安田遺跡 | 8. 史跡・域輪櫛跡 | 9. 後田遺跡 | 10. 沼田遺跡 |
| 11. 俊田遺跡 | 12. 境野遺跡 | 13. 北田遺跡 | 14. 間B遺跡 | 15. 史跡・室の前遺跡 |
| 16. 上ノ田遺跡 | 17. 高阿弥田遺跡 | 18. 八森遺跡 | 19. 生石2遺跡 | 20. 手藏田12遺跡 |



谷底平野および
氾濫原

扇状地

自然堤防

後背湿地

三角洲

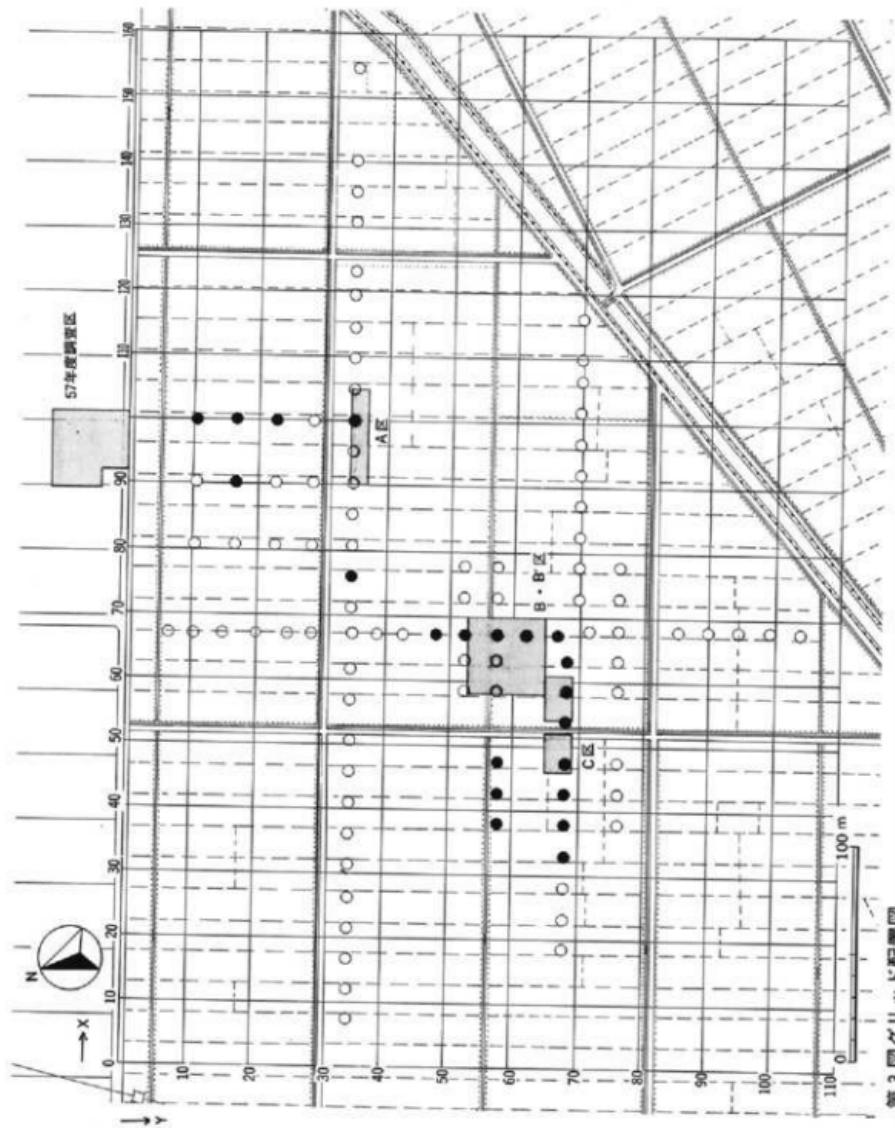
旧河道

河間底地

● 古代の遺跡

● 窯跡

第2図 地形分類図（土地分類基本調査 酒田 1979年による）



第3図グリッド配置図

城輪柵跡の位置する、北を日向川、南を最上川によって区切られた平野部では、約50箇所ほどの古代遺跡が確認されているが、これらは9世紀以降の所産と考えられ、7・8世紀代の遺跡、遺物の出土例はほとんど無かった。近年のは場整備事業に係る緊急発掘調査が増加しており、9世紀前後の庄内平野の歴史的環境が徐々に明らかにされてきている。

なかでも、国指定史跡「堂の前遺跡」は、約240m方形の区画の中に、礎石建物跡、八脚門、^{ひじき}長押・^{ひじき}肘木・^{ひじき}斗などの古建築部材を埋設した後地業などが検出されており、「出羽国分寺」の可能性が考えられている。

城輪柵跡東方3kmの段丘上にある八森遺跡は、一辺90m方形の囲み施設の中に礎石建物や八脚門など、城輪柵跡政庁域の建物配置と酷似した遺構が検出されており、『三代実録』仁和三年条(887年)にある「國府移転先高畠の地」と推測されている。

これらの官衙・寺院跡と考えられる遺跡の他に、古代律令体制下に置かれた村落の発掘例も増加している。村落内で祭祀にまつわった土器留め遺構を検出した後田・境興野遺跡、多量の墨書き土器が出土した上ノ田・北田・沼田遺跡、また古墳時代前期の古式土師器が採集された関B遺跡、製鉄遺構を検出した豊原遺跡などがある。

これらの集落跡は城輪柵跡を中心として東西、南北の直線上に並ぶ傾向が観られ、國府創建におもなう村落の地割配置、又は地理的環境による立地条件にも左右されていたのではないかと考えられる。

II 調査経緯

1. 調査に至る経過

新青渡遺跡は、山形県酒田市大字新青渡字家際に所在する。新青渡部落の西側水田に位置し、地元の人々の間では古くから土器や井戸枠などが出土することで知られている。

本遺跡が、県営は場整備事業北平田地区の昭和57・58年度施工予定区域に含まれることになり、破壊される恐れが生じてきた。県教育委員会では、昭和56年10月に現地において試掘を含む遺跡の確認調査を行なったところ、遺構や遺物の存在が確認され、平安時代の集落跡であることが推定された。

これにもとづき県農林水産部、酒田市教育委員会、日向川土地改良区などの関係機関と再度協議を行ない、その結果、県教育委員会が主となって緊急発掘調査を実施することになったものである。ほ場整備事業の地区割りにより、遺跡が南北に二分されるため、北半部については昭和57年度に、南半部については昭和58年度に調査を実施している。

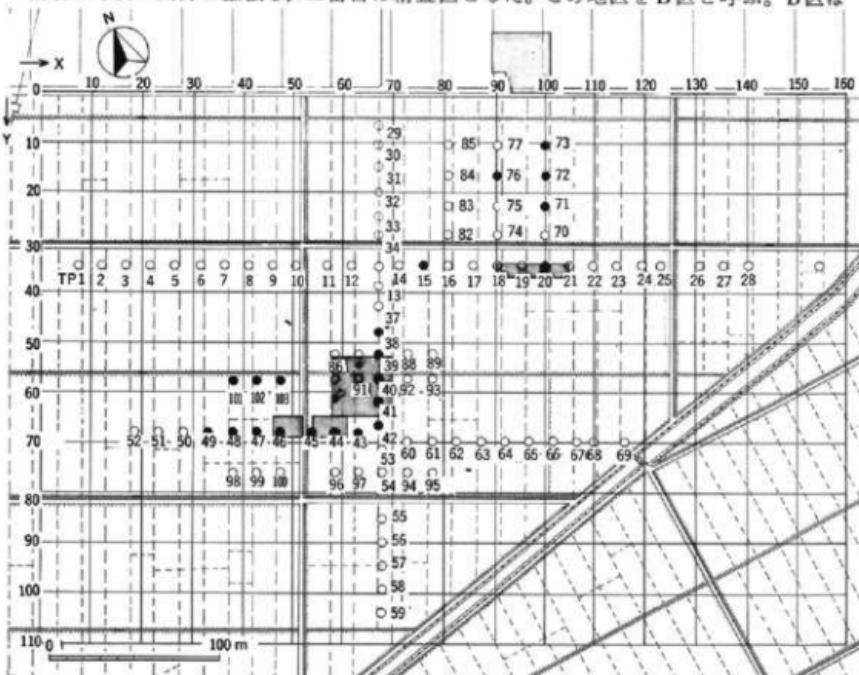
2. 調査の経過

発掘調査は、昭和58年7月4日に始まり、同年9月30日までの実質56日間行なった。

調査は始めに、分布調査による遺跡の推定範囲より一回り広げた地域に2m四方の坪掘りを行ない、遺構や遺物の検出内容による遺跡の範囲と遺構のあり方の確認に努めた。坪掘りの数は全部で103箇所に達し、この作業に7月5日から7月18日までの実質10日間を要している。なお坪掘りの場所は、は場整備事業における排水路や埋設パイプ管の設置予定場所を重点に行なった。またこれと平行してグリッド設定のための基準杭打ち作業も実施している。

つぎに調査対象地区の北端を東西に走る排水路予定地区のうち、TP20に柱穴等が検出されたため、これを中心に南北9m、東西45mの範囲を拡張し、最初の精査区とした。この地区を便宜的にA区と呼ぶことにする。A区は91~105-35~37Gにあたり、総面積は405m²である。A区からは掘立柱建物3棟や土壙などが検出され、この地区的遺構精査や遺構実測などの調査に7月11日から8月4日までの実質12日間を要している。

調査対象地区のほぼ中央部に遺構や遺物が集中して認められたため、この付近を東西・南北とも36m四方に拡張し、二番目の精査区とした。この地区をB区と呼ぶ。B区は



第4図 試掘場位置図

59~70—54~65Gにあたり、総面積は1296m²である。B区からは掘立柱建物跡3棟や井戸跡2基、土壙、溝状遺構などが密集して検出されており、今回の4つの精査の中ではもっとも遺構の数が多い地区である。また遺物の量も多く、とくにS E 250井戸跡やS K 311土壙からは祭祀に関連すると思われる斎串や「祁」と書かれた墨書き器が多数出土している。この地区的遺構精査や遺構実測および遺物取り上げには、7月19日から調査終了時の9月30日まで実質36日間を要している。

坪掘り段階でB区の南西部にも遺構や遺物の集中している箇所が認められたため、B'区と道路および水路をはさんで南西にあたる場所を東西18m、南北12mの範囲で拡張し、三番目の精査区とした。これをC区と呼ぶ。C区は47~52—66~69Gにあたり、総面積は216m²である。C区からは掘立柱建物跡1棟や製鉄遺構1基、土壙などが検出され、この地区的精査に、調査中盤の8月8日から9月9日まで実質13日間を要している。

C区と平行して、C区とは道路および水路をはさんで東側にあたる場所を東西21m、南北12mの範囲で拡張し、四番目の精査区とした。B区と接続しているためこれをB'区と呼ぶ。B'区は54~60—66~69Gにあたり、総面積は252m²である。B'区からは烟の歯とも思われる溝状遺構が全面に検出され、本区の精査に8月8日から9月21日まで要している。

調査期間中、9月22日には地元の北平田小学校と北平田中学校の児童・生徒および一般の方々約150名を対象にした調査説明会を現地で実施している。

III 調査結果

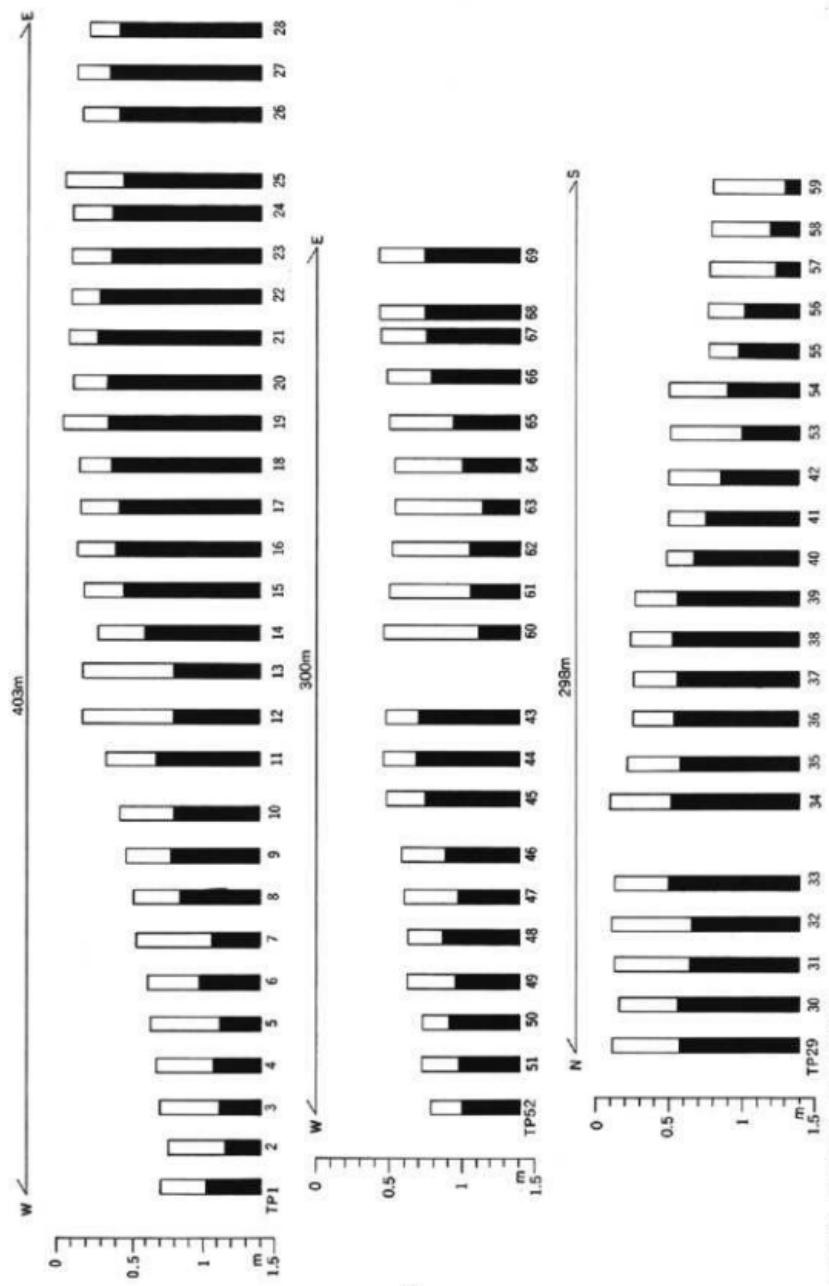
1. 調査の方法

発掘区の地区割りは、昭和56年度に実施し第1次調査と同様な基準線を用い、3m四方を1単位とするグリッドを組んだ。南北軸は現況の水田の区画に合わせたため、真北から東へ25度31分傾いている。第一次調査のグリッドは、対象地区的南西隅を原点とする第1象限の座標軸をとっているが、第2次調査の調査地区は、第1次調査対象地区的南側にあたるため、対象地区的北西隅を原点とする第4象限の座標軸をとった。

また第2次調査の対象地区は、第1次調査の対象地区よりも東西に範囲が拡大しているため、X軸の数値については第1次調査の南北方向56ラインを第2次調査の南北方向100ラインに対応させている。Y軸の数値については第1次調査と同様である。グリッドの名称は、X軸の数字を先に、例えば100~30グリッド(G)というように呼ぶ。

遺物のうち、包含層出土のものはグリッド毎に取りあげているが、調査の当初に行なった2m四方の坪掘り区のものについては、便宜上発掘順に番号を付しTP1~TP103として取りあげている。また遺構内出土の遺物については、第2次調査の遺構番号を130番から

第5図 試掘地山Ⅲ層柱状図



始め、その前に S B (建物跡), E B (建物跡を構成する柱穴), S K (土壤), S D (溝状遺構)などの遺構記号を付して各層毎に取りあげている。

発掘は原則として手掘りで行なっているが、A・B・B'・C区の4ヶ所の精査区については、拡張する際に表土のみ重機械を使用して除去している。

平面図は原則として簡易造り方を組んで20分の1縮尺で実測しているが、遺構の全体的な把握や日程上の都合から一部平板を用いて40分の1縮尺で実測している地区もある。

2. 遺跡の層序

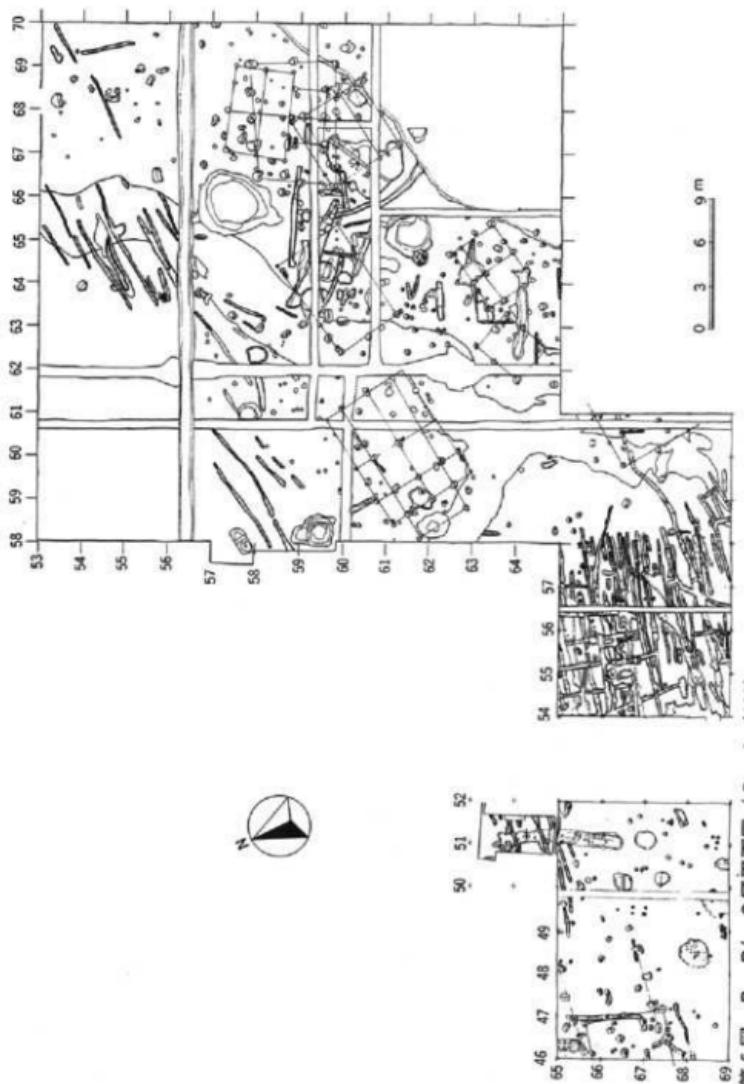
本遺跡は、酒田北部三角洲の東端に立地する。酒田北部三角洲は、海拔高度5~6m以下であり、いわゆる繩文海進期に海進を蒙ったと推定される。河間低地とした上位面との相違は、高度がより低いことのほか、自然堤防状の微高地がほとんどみられないことがあげられる。最上川の側方侵蝕を受けていることは、上位面と共に通する。

遺跡の南方約150mを寺田川が北東から南西に向って流れ、さらに南方約1kmを新井田川が西流している。遺跡を覆う表層の地質は、粗砂・シルトおよび粘土からなる沖積層で、かなりグライ化が進んでいる。これと関連し地下水位も高く、深井戸やさく井資料の分析からみた遺跡周辺の静水位等高線は約6mを測る。

本遺跡の基本的な層序は、各精査区ともほぼ共通する。つぎに各層について記述する。

第I層	茶褐色微砂質土	水田の耕作土で砂分を含み、10~20cmの厚さでほぼ均一に推進する。
第II a層	暗褐色粘質土	やや粘性があり、炭化粒子と遺物を微量含む。
第II b層	黒褐色粘質土	粘性が強く、炭化粒子と遺物を多く含む。
第II c層	暗青灰色粘土	第三層が落込んでいる場所にのみ存在し、炭化粒子と遺物を少量含む。
第III層	青灰色シルト	色調は全体的に青灰色を呈し、部分的に酸化作用により濁黄褐色を示したり、粗砂を含む。遺物はまったく含まず、各遺構の壁や底面をなす。

今回の調査対象地区の標高は3.6~4.5mでほぼ平坦であるが、巨視的には東方の出羽丘陵や河川の沖積作用に伴って、北東から東西にかけて緩やかな傾斜を示す。第2図に坪掘り区の土層観察による東西および南北方向の土層縦断面図を掲載した。白地の部分がI・II層、黒地の部分がIII層を表す。地表面の高さは現在の水田1枚毎にほぼ同じ高さであるが、III層の標高は場所によってかなりの差異があり、遺構検出地域は概してIII層が高い。



第6図 B・B'・C区画図 (S = 1 / 400)

3. A区検出遺構（第7図）

X軸35の東西ライン上に用水路が計画されていたため、この線上を29箇所試掘して遺構集中域を東西15m南北9mの範囲で拡張したのがA区である。掘立柱建物跡3棟、溝状遺構、落ち込みが検出された。

(1) S B142建物跡

精査区中南辺で検出された東西 2α 間(3.9m)×南北 2α 間(5.8m)、南北軸方向N7°Wの掘立柱建物跡である。南辺については未掘のため全体規模は不明である。柱間は東西が東から2.9+2.9m、南北が北から1.95+1.95mである。掘方は径22~44cmの楕円形である。E B144が、S B132(E B137)の柱穴と重複しておりこれより古い。

(2) S B132建物跡

精査区中央で検出した東西2間(4.8m)×南北3間(5.7m)、南北軸方向N4°30'Wの掘立柱建物跡である。

南西隅の柱は近年の暗渠によって消滅している。柱間は東西が東から2.4+2.4m、南北が北から2.4+2.4+0.9mである。最後の1間分は0.9と短く縁束の可能性がある。掘方は径24~60cmの楕円形である。E B141がS B150(E B156)の柱穴と重複しておりこれより古い。

(3) S B150建物跡

精査区東側で検出した東西2間(7.6m)×南北2間(5.6m)、南北軸方向N4°Eの掘立柱建物跡である。掘方は西辺と南辺中央が欠けている。E B157の上面はSX130によって一部掘り削られている。柱間は東西が東から3.6+4m、南北が北から2+3.6mである。柱穴は径24~80cmの楕円形である。

S B142・132・150建物跡の新旧は、掘方の新旧関係から(旧)S B142→S B132→S B150(新)といえる。又三棟がすべて重複している事より3時期に区分する



第7図 A区平面図 (S = 1/200)

事が出来る。各建物掘方内からの出土遺物は須恵器、赤焼土器の細片が微量であり、明確な時期決定資料となりえない。

(4) S D131溝状遺構

精査区中央を南北にゆるやかに蛇行している幅40cm、深さ7cmの浅い溝である。横断面はU字形を呈している。

(5) S X130落ち込み

精査区東側で検出された東西11.7m、南北検出長5m、検出面からの深さ16cmの隅が角張っている落ち込みである。底面は西側が1段下がっており平坦である。S B150(E B157)の柱穴を掘り込み、近年の暗渠が東辺を掘り込んでいる。底面から寛永通宝が1枚出土している事から近世以後の所産と考えられる。

4. B・B'区検出遺構（第8図）

B・B'区は、X軸68南北ライン上とY軸68東西ライン上に施工される埋設パイプ部分を試掘した際に、柱穴等の遺構が集中して検出された地域を拡張したところである。掘立柱建物跡が8棟、井戸跡2、土壤15、溝状遺構がB区で51条、B'区で60条、河川跡など各種遺構が集中している。

B区は、北辺隅と一段下る南辺隅には遺構がまったく検出されていない。北辺には溝状遺構が数条ずつのまとまりをなしている。南辺には建物跡が集中しており、その周囲に井戸、土壤がまとまっている。建物跡とした柱穴の他にも多数の柱穴が見つかっているが、現時点では8棟分の建物跡しか構成できなかった。S G460河川跡は精査区中央を北北東—南南西の向きであり南西隅で北北西へ分流している。

B'区は溝状遺構が集中して検出されている。東西に走る多数の溝に混って幾条かの南北に走るものがある。

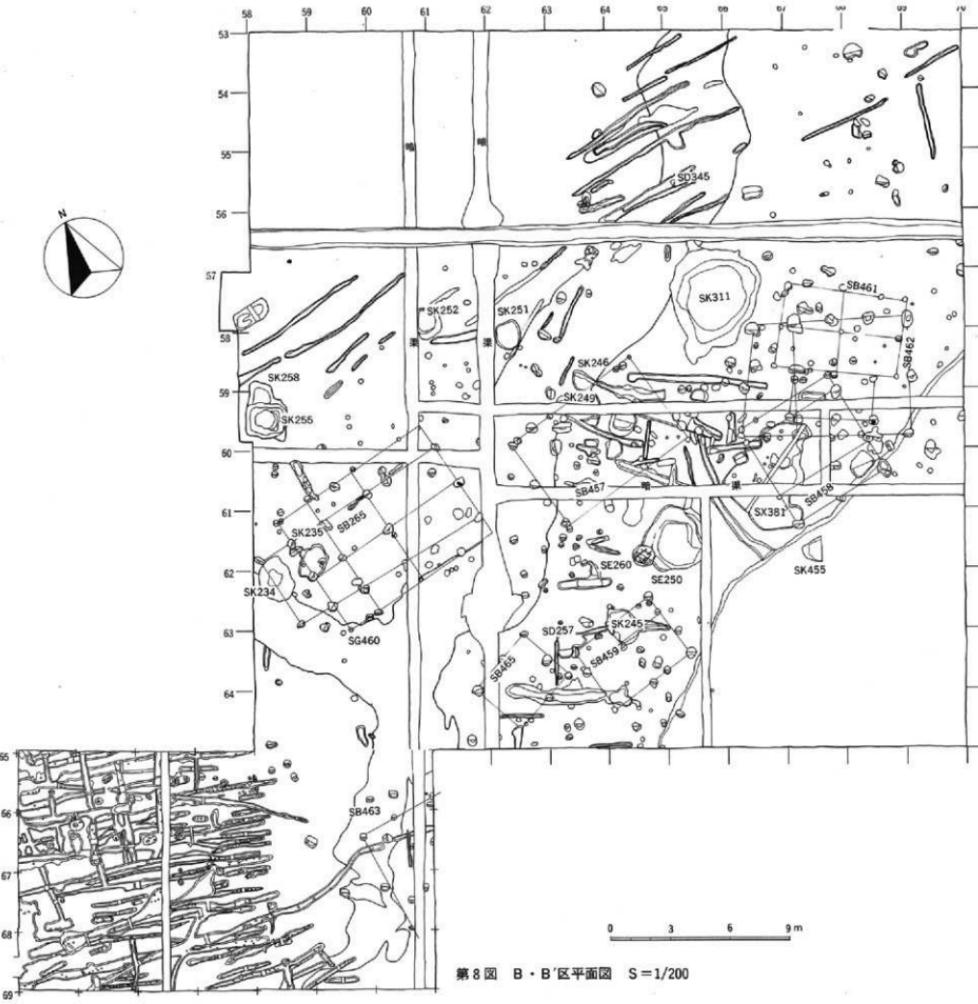
建物跡

(1) S B265建物跡

B精査区西辺で検出された東西4間(9m)×南北4間(6.6m)、南北軸方向N8°30'Wの南北棟の掘立柱建物跡である。西側に1間分の2本の掘方がある。柱間は東西が東から1.8+2.8+2.8+1.8+1.8m、南北が北から1.4+1.85+1.85+1.4mである。東側柱列2列目は身舎部分の柱が無い。掘方は径18~60cmの楕円形である。3本柱根が残存しているものがある。

建物跡内に、S K234、235土壤がある。S K235土壤西隅をS B265の柱穴が掘り込んでおり、(旧) S K235→S B265(新)の関係が言える。

(2) S B457建物跡



第8図 B-B'区平面図 S=1/200

B精査区中央で検出された東西3間(7.4m)×南北2間(4.6m), 南北軸方向N 8°30'Wの東西棟の掘立柱建物跡である。土壤, 暗渠によって一部分柱穴が消滅しているが総柱の建物跡(倉庫か)と考えられる。掘方は径10~50cmの橢円形である。

S B457建物跡の西方2.8m離れて S B265建物跡があり, 南東へ2.4m離れて S B458建物跡があり, いずれも南北軸が8°30'西へ傾いている。同時期の所産と考えられる。

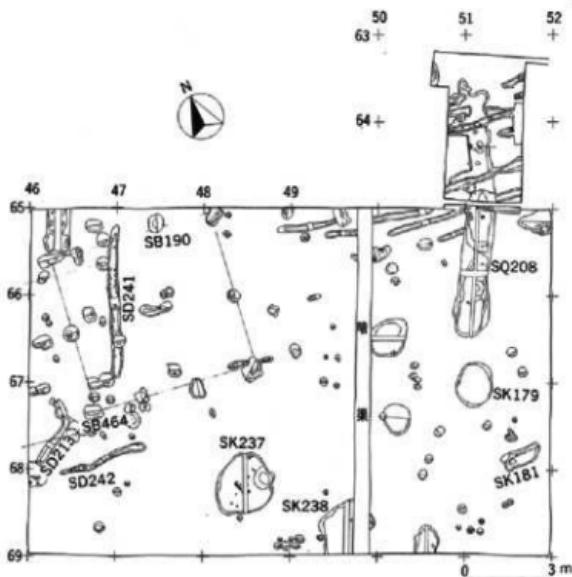
(3) S B458建物跡

B精査区中央東側で検出された東西2間(5.2m)×南北3間(5.6m), 南北軸方向N 5°Wの東西棟の掘立柱建物跡である。柱間は東西が東から2.6+2.6m, 南北が北から0.8+3.2+1.8mである。北面中央掘方は暗渠によって消滅したものと考えられる。北面柱列1間分が0.8と短く縁束的な施設の可能性がある。掘り方は径30~60cmの橢円形である。

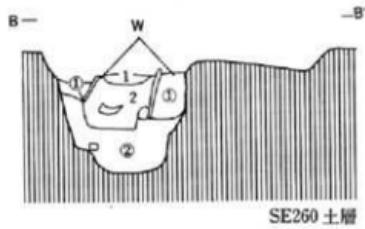
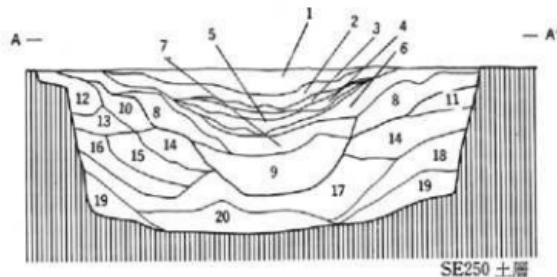
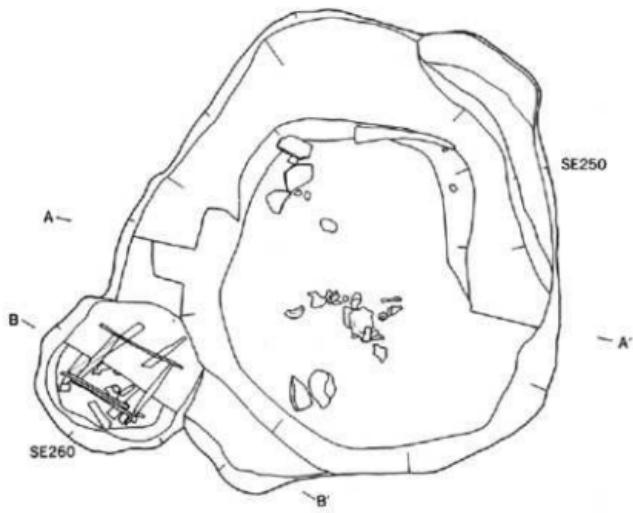
S B461・462建物跡と重複している。

(4) S B459建物跡

B精査区南辺中央で検出された東西2間(4.8m)×南北2間(3.6m), 南北軸方向N 8°Wの東西棟の建物跡である。柱間は東西が東から2.4+2.4m, 南北が北から0.8+2.8mで



第9図 C区平面図 (S=1/200)



0 1 2 m

第10図 SE250・260 井戸跡

ある。総柱の建物跡で、北面1間分が0.8mと短く廟の可能性がある。掘方は径30~50cmの円又は橢円形である。

(5) S B461建物跡

B精査区東辺中央で検出された東西4間(6.8m)×3間(6.2m)、南北軸N32°30'Eの掘立柱建物跡である。柱間は東西が東から1.2+1.8+1.8+1.2m、南北が北から2.2+2.2+2.2mである。南西面中央に1間×2間の張り出し部が付く。掘方は径20~80cmの円又は橢円形である。北側身舎部の柱が2本無く総柱となりえない。

(6) S B462建物跡

B精査区東辺中央で検出された東西4間(8.6m)×南北2間(6m)、南北軸N25°30'Eの掘立柱建物跡である。S B461・458建物跡と重複している。柱間は東西が東から2+2+2+2m、南北が北から2.9+2.9mである。東側身舎中央の柱が2本無い。西側の一間分が南西へ少しゆがんでいる。掘方は径30~90cmの橢円・不整形である。

(7) S B465建物跡

B精査区南辺中央で検出された東西2間(3.6m)×南北2間(3m)、南北軸N21°30'Wの掘立柱建物跡である。柱間は東西が東から1.6+2m、南北が北から1.6+1.4mである。西側中央の柱は暗渠で消滅したものと考えられる。小規模な建物跡である。

(8) S B463建物跡

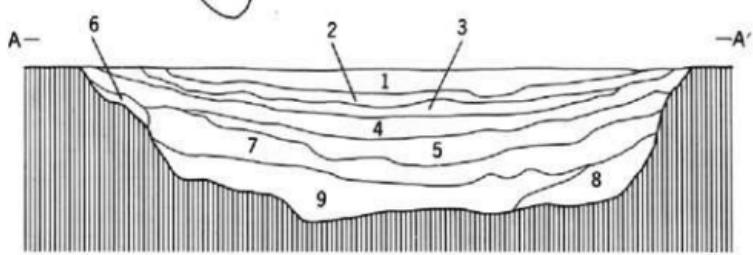
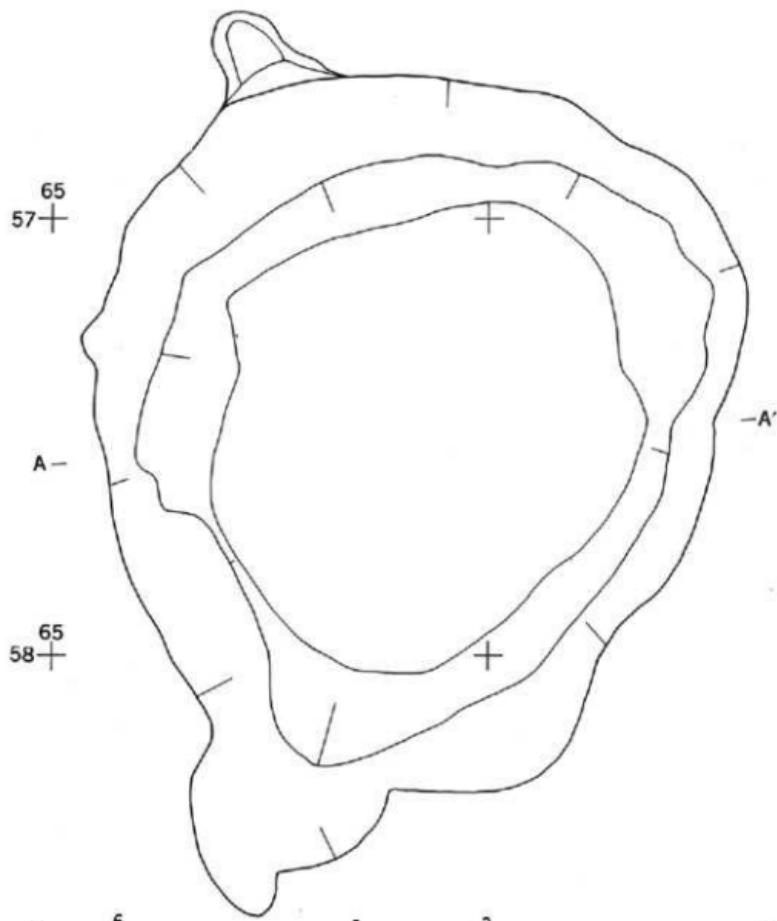
B'精査区東辺で検出されたものである。精査区域の都合上5個の掘方を検出したのみで、建物遺構とすべきか、にわかに断じ難い。検出段階では、東西2間(4m)×南北2間(5.2m)、南北軸N1°30'Wである。柱間は東西が東から2.2+1.8m、南北が2.7+2.5mである。掘り方は径30~45cmの円・橢円形である。

井戸跡

(9) S E250井戸跡(第10図)

B精査区中央南よりで検出した。掘方西部がS E260井戸跡に掘り込まれており、(旧)S E250→S E260(新)の関係がいえる。長径3.2m、短径2.9mの不整橢円形の掘方である。検出面からの深さは1.17mある。掘方の壁面は垂直に近く掘り込まれている。底は平坦になっている。井側の施設は検出されなかったが、矢板状木製品が出土している。

埋土は20層に分けられ、1層から9層までがレンズ状の自然堆積で、中央部が炭化物を多量に含んでおり中層の平面形が隅丸方形を呈している。この最下層より板状木製品や矢板が出土しており、井側埋設部分ではないかと考えられる。これらはいずれもヤクスギ級の大径のスギ材と鑑定されている。又上層からは径20cm大の焼礫が3個ほど出土している。1層は黒褐色微砂質土で炭化粒子を含んでいる。2層は黒褐色微砂質土に炭化粒子がブロッ



第11図 SK311土壤

ク状に混じり、黄褐色微砂がまだらに混じる。3層は黒色炭化物層で炭化物がブロック状に混じる。4層は灰黑色微砂質土で、灰がしま状に厚く混じっている。5層は暗茶褐色有機物層で、もさもさした草状物質がしま状に堆積している。6層は暗褐色粘質土で炭化粒子が混じる。7層は黒褐色粘質土で炭化粒子を含み軟弱である。8a層は暗褐色微砂質土である。8b層は明褐色シルトに炭化粒子が混じる。9層は黒褐色粘質土に炭化粒子、小礫、有機物を含んでいる。10層は黒灰褐粘質土に黄褐色粒子が混じる。11層は灰赤褐色粘質土である。12層は灰褐色粘質土である。13層は黒灰褐色粘質土に炭化粒子、黄褐色粒子が混じる。14層は灰茶褐色シルトに青灰色砂が混じる。15層は黒褐色粘質土に青灰色砂がしま状に混じる。16層は茶褐色微砂質土で、多量の板状木製品が出土した。18層は青灰色シルトである。19層は暗青灰色砂で有機物を含む。20層は黒色粘質土で有機物を含む。

(10) S E260井戸跡（第10図）

B精査区中央南より、S E250井戸跡西辺を掘り込んでいる。掘方は径1.1mの円形で検出面からの深さは85cmある。掘方中央に木組方形の井側を掘えている。井側は各辺1段で幅36cmの横板を使用しており、内寸は一辺40cmを測る小規模なものである。掘方埋土の土圧によったものか、井側は南東へ傾斜している。井側内の埋土は上下2層に分けられる。1層は灰褐色粘質土に黒色土が混じる。2層は茶褐色粘質土である。掘方埋土も上下2層に分けられる。①層は灰茶褐色粘質土、②層は青灰色シルトと灰茶褐色粘質土が混じるカクラン土で、鋸による切断痕がある板片が出土している。

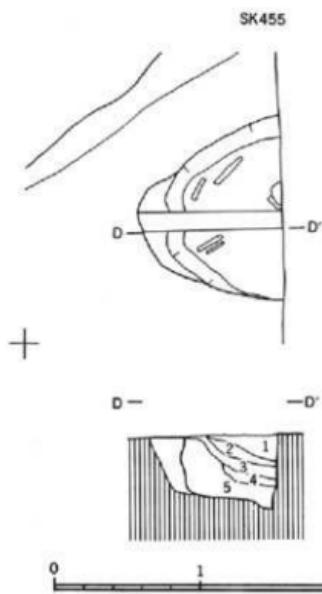
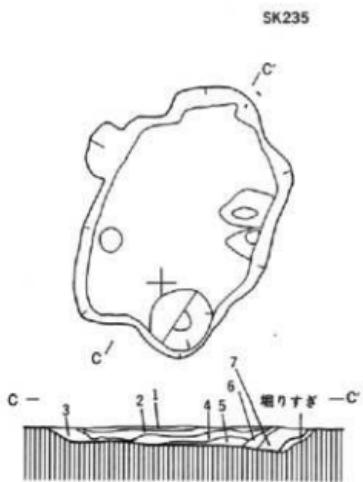
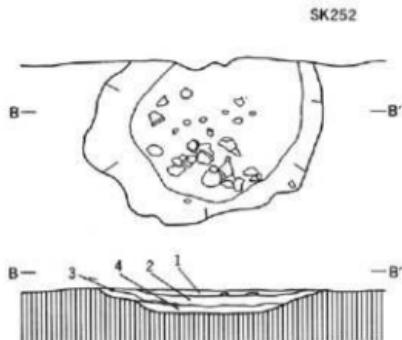
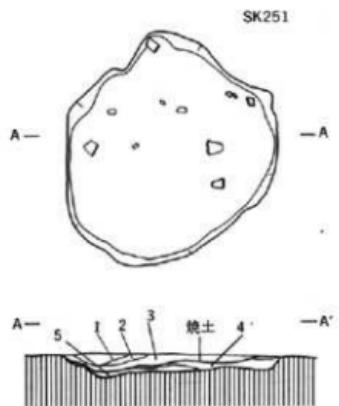
土壤

(11) S K311土壤（第11図）

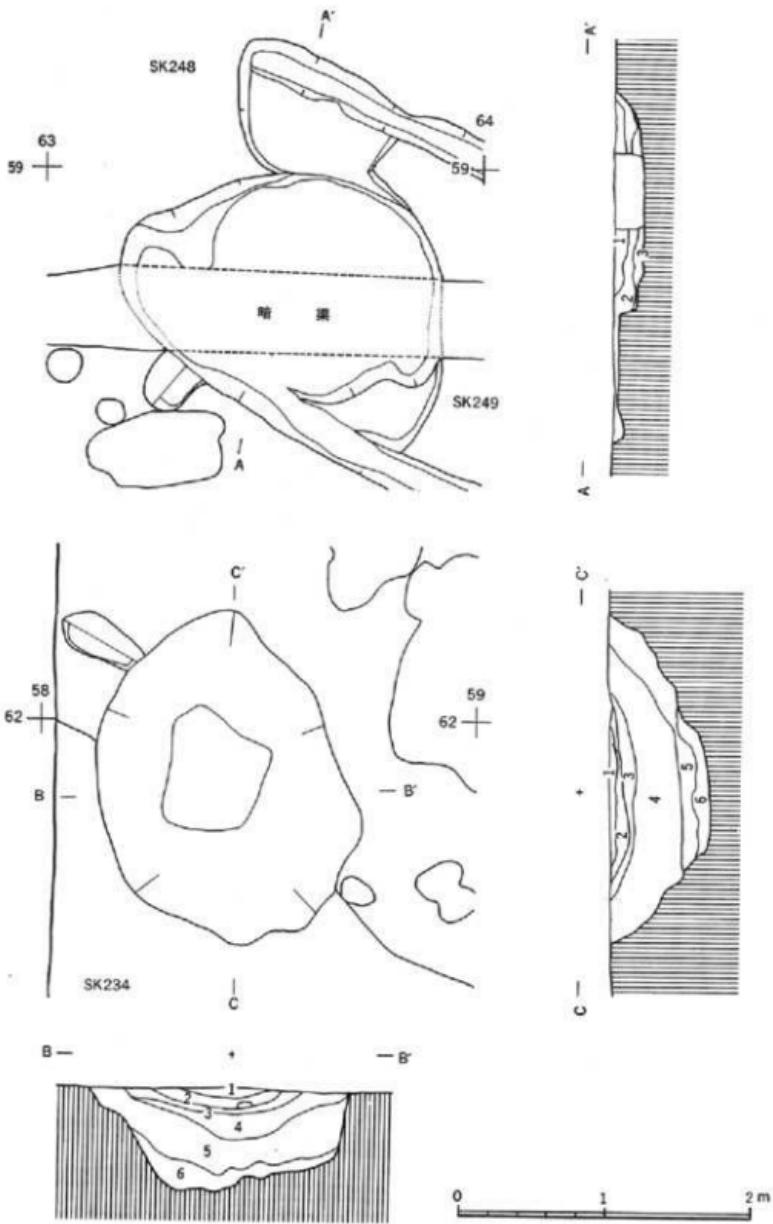
B精査区中央東より検出された。平面プランは不整の梢円形で西側が少し舌状に張り出している。規模は長径6m、短径4.3mを測る大きなもので、検出面からの深さは1.5mを測る。基底部は平坦で、掘り込み壁は傾斜している。埋土は8層に分けられ、レンズ状の自然堆積である。1層は黒褐色微砂質土で炭化粒子を多量に含む。2層は黒褐色微砂質土で草状有機物がしま状に堆積している。3層は黒褐色微砂質土で炭化粒子を含む。4層は暗褐色粘質土で炭化粒子を含む。5層は暗褐色微砂に青灰色砂が少量混じり、炭化粒子がしま状に入る。6層は暗褐色粘質土に青灰色砂がまだらに混じる。7層は潤青灰色粘質土で炭化粒子が混じる。8層は暗青灰色粘質土である。

(12) S K234土壤（第13図）

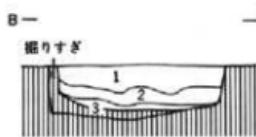
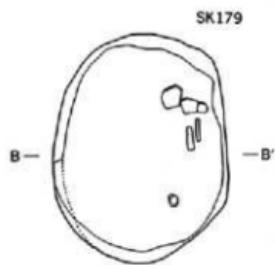
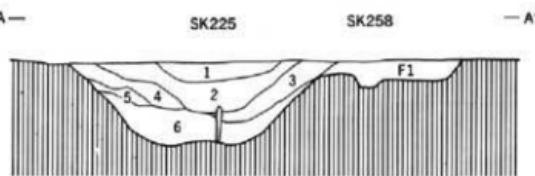
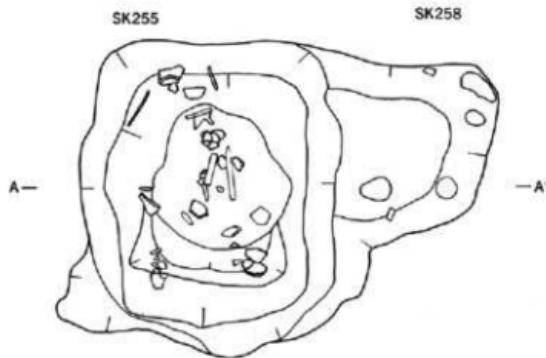
B精査区南西辺で検出された。平面プランは不整の梢円形で、規模は長径2.3m、短径1.8m、深さ70cmを測る。基底部は丸味をおびてゆるやかに傾斜している。埋土は6層に分けられる自然堆積である。1層は暗褐色微砂質土で炭化粒子を含む。2層は灰褐色微砂質土



第12図 SK251・252・235・455 土壌

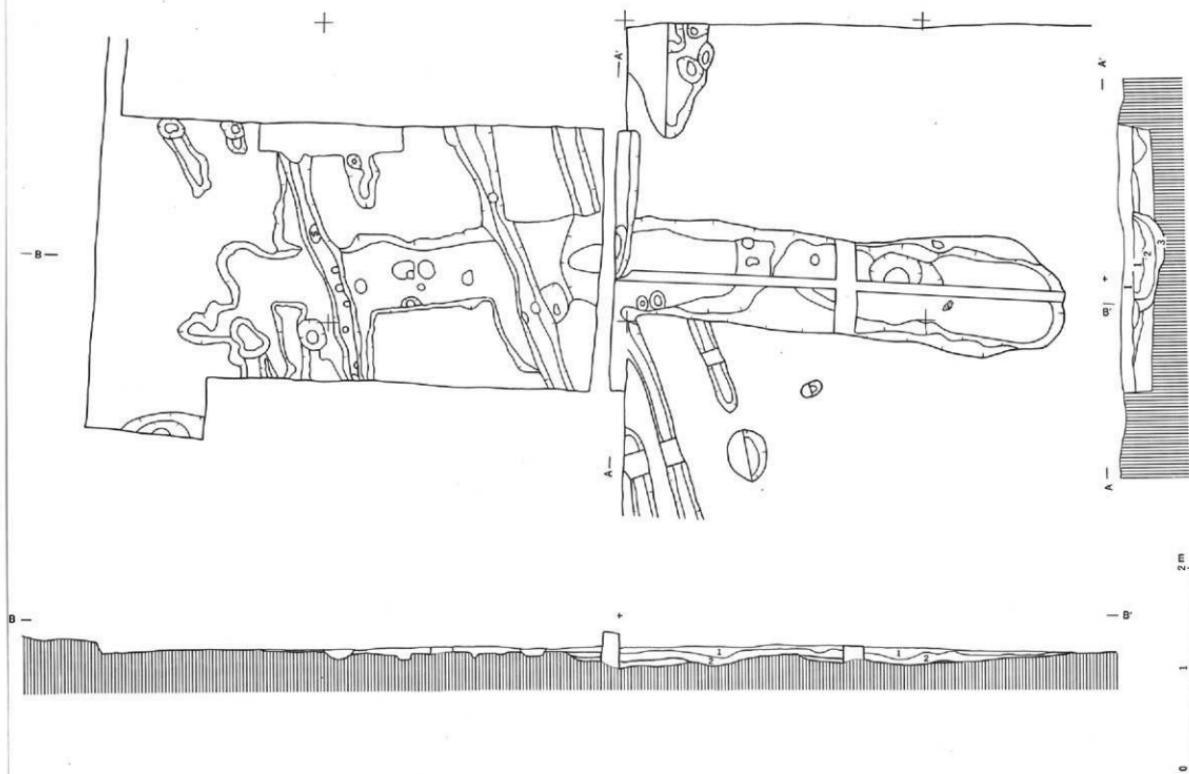


第13図 SK248・249・234 土壌



0 1 2m

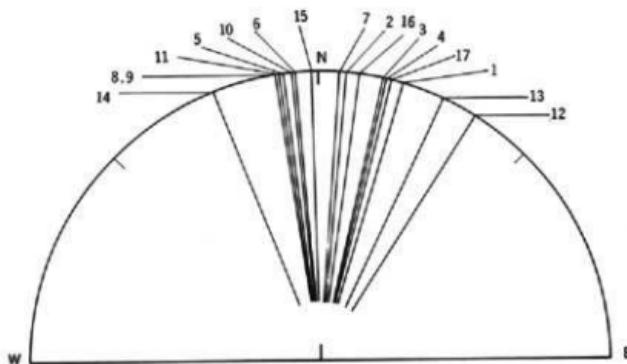
第14図 SK255・258・179 土壌



第15圖 SQ208 製鉛邊槽

表1 新青渡遺跡建物跡一覧

遺構番号	建物規模		底線東 面行 - 晴行	柱間寸法(m)	建物方向	南北軸方向	時期	備考
	間×間	m×m						
1 SB30	2×2	8.9×6.6	北西	3.1~3.3-2.2~2.4	東西棟	N16°50'E	9~11C	1次調査
2 SB40	4×2	10.85×5.2		2.6~3.0-2.58~2.62	南北棟	N 5°31'E	#	#
3 SB50	3×2	6.8×6.7	西	2~2.4-2.4~3.1	#	N13°01'E	#	#
4 SB80	2×2	5.6×4.6		2.8-2.3	#	N13°31'E	#	#
5 SB142	2α×2α	(3.9×5.8)		1.95-2.9	南北棟?	N 7°00'W	#	2次調査A区
6 SB132	2×3	4.8×5.7	南	2.4-0.9~2.4	南北棟	N 4°30'W	#	#
7 SB150	2×2	5.6×7.6		2~3.5-3.6~4	南北棟?	N 4°00'E	#	#
8 SB265	5×4	11×6.6	東・西	1.2~1.85-1.8~2.8	南北棟	N 8°30'W	10世紀末葉	# B区
9 SB457	3×2	7.4×4.6		2.4-2.3	東西棟	N 8°30'W	#	#
10 SB458	3×3	5.2×5.6	北・南	2.6-0.8~3.2	東西棟	N 5°00'W	10世紀中葉	#
11 SB459	2×2	4.8×3.6	北	2.4-0.8~2.8	東西棟	N 8°00'W	10世紀~11世紀前半	#
12 SB461	4×3	6.0×6.8	東・西・南	2.2~1~2.2		N 32°30'E	10~11世紀	#
13 SB462	4×2	8.6×5.8	西	2~2.9	東西棟	N 25°30'E	#	#
14 SB465	2×2	3.6×3		1.6~2-1.4~1.6	東西棟	N 21°30'W	不明	#
15 SB463	2α×2α	(5.2×4)		2~2.6		N 1°30'W	不明	# B'区
16 SB190	3×2	5.9×5.4		1.96~2.7	東西棟	N 8°00'E	9世紀後半	# C区
17 SB464	1α×2	(2.2)×5.4		2.2~2.7	#	N 14°30'E	9世紀後半	#



- | | | | | | | | |
|----|-------|----|-------|----|-------|----|-------|
| 1 | SB30 | 2 | SB40 | 3 | SB50 | 4 | SB80 |
| 5 | SB142 | 6 | SB132 | 7 | SB150 | 8 | SB265 |
| 9 | SB457 | 10 | SB458 | 11 | SB459 | 12 | SB461 |
| 13 | SB462 | 14 | SB465 | 15 | SB463 | 16 | SB190 |
| 17 | SB464 | | | | | | |

第16図 建物跡南北軸方位

でブロック状に灰が混じる。3層は暗褐色微砂質土で炭化物がしま状に入っている。4層は灰褐色微砂質土で少量の炭化粒子を含む。5層は灰褐色微砂質土で多量の炭化粒子を含む。6層は黒青灰色細砂質土で炭化粒子、有機物を含む。

(13) SK235土壤 (第12図)

B精査区南西辺でSK234土壤の東わきで検出された。平面プランは不整の楕円形で、長径1.8m、短径1.3m、検出面からの深さ18cmを測る。基底部は平坦である。埋土は6層に分けられる自然堆積である。1層は黒褐色微砂質土に炭化粒子がブロック状に混じる。2層は黒色炭化物層に灰がブロック状に、炭化物がしま状に堆積している。3層は暗灰色砂がしま状に堆積し、炭がブロック状に混じっている。4層は暗灰色微砂質土である。5層は黄灰色微砂質土である。6層は暗灰色微砂質土に炭化物が少量混じる。

(14) SK249土壤 (第13図)

B精査区中央で検出された。中央部を暗渠によって掘り込まれている。平面プランは不整の楕円形で、長径2.2m、短径1.7m、検出面から深さ20cmを測る基底部は平坦である。埋土は4層に分けられる自然堆積である。1層は暗灰褐白微砂質土に炭化物を少量含んでいる。2層は灰褐色微砂に灰色砂と炭化物が混じる。3層は黒色炭化物層でしま状に堆積している。4層は暗灰褐色微砂質土に炭が混じる。

(15) SK252土壤 (第12図)

B精査区北辺中央で検出された。西側の一部を暗渠によって掘り込まれている。平面プランは不整の楕円形である。平面プランは長径1.2m、短径は残長で1m、検出面からの深さは14cmを測る。基底部は平坦で、掘り込み壁はゆるく傾斜している。埋土は4層に分けられる自然堆積である。1層は黒色炭化物層でもさもさしている。2層は黒褐色微砂質土で多量の炭化粒子を含む。3層は灰褐色粘質土である。4層は暗褐色粘質土である。2層からは赤焼土器が多く出土している。

(16) SK255土壤 (第14図)

B精査区西辺中央で検出された。SK258土壤と重複しており、(旧)SK258→SK255(新)の関係がいえる。平面プランは不整の隅丸方形で、長径2.15m、短径1.8m、検出面からの深さ55cmを測る。基底部の平面プランも隅丸方形でわりと平坦である。掘り込み壁は45°ほど急な傾斜角を持つ。埋土は5層に分けられる自然堆積土である。1層は黒色炭化物微砂質土で、しま状に炭化物が堆積している。2層は暗褐色粘質土で炭化粒子、灰が多く混じっている。3層は暗褐色粘質土で炭化粒子、灰の混入は2層より少い。4層は暗褐色微砂質土で炭化粒子を含む。5層は黒褐色粘質土に灰褐色砂がブロック状に混じる。

(17) SK258土壤 (第14図)

B精査区西辺中央でSK255土壤と重複して検出された。残存状況下での平面プランは隅丸方形で、長径2.3m、短径は残長で2.2m、検出面からの深さは25cmを測る浅い掘り込みの土壤である。基底部は5箇所の小ピットがあり、それをのぞけば平坦である。埋土は1層で暗褐色微砂質土である。

(18) SK455土壤

B精査区南東辺で検出された。東側を暗渠によって掘り込まれている。平面プランは不整の楕円形らしい。短径120cm、長径は残長で63cm、検出面からの深さは54cmを測る。基底部は平坦で、掘り込み壁は垂直に近い。埋土は5層に分けられる。1層は黒褐色微砂質土で炭化粒子を含む。2層は灰褐色微砂質土で灰、炭化粒子をブロック状に含む。3層は黑色炭化物層で多量の炭化粒子を含む。4層は灰褐色粘質土で炭化粒子を含む。5層は暗灰褐色粘質土で炭化粒子を含む。

溝状遺構

(19) SG460河川跡

B・B'精査区をゆるやかに蛇行しながら貫流している。B区南西辺で分流していく。平面プランの検出に終ったが、上面で幅3~4.5mを測る。埋土は赤褐色の粗砂である。諸遺構がSG460を掘り込んでいる所から、今次調査では最も古い時期の所産といえる。1次調査においてもSG460同様な河川跡が検出されており、本河川跡との関連性がうかがえる。

(20) B区検出の溝状遺構

B区では北辺に溝状遺構がまとまっている。幅20~30cm、長さ3~9.6m、深さ7cmほどのものが東・西方向に帯状に並んでいる。溝と溝との間隔は不揃いである。この他にSB457とSB458の間にも溝状遺構が集中している。

(21) B'区検出の溝状遺構

B'区西側半分以上が溝状遺構であり密集している。東西方向に長軸が向くものが大部分で幅15~50cm、検出面からの深さは10cm内外を測る。長軸方向はN75°W付近に集中している。溝と溝との間隔は、重複している所や接している所が多い。この東西に長軸方向が来ている溝に直交する形で、6条の長短とり混った溝があり、約3mほどの間隔で並んでいる。

5. C区検出遺構（第9図）

C区は、Y軸68東西ライン上に施設される埋設パイプ部分を試掘した際に、B'区同様に遺構が集中して検出された地域を拡張したところである。掘立柱建物跡2棟、土壤5、製鉄遺構1、溝状遺構が検出された。

建物跡

(1) S B190建物跡

精査区北辺で検出された東西3間(5.9m)×南北2間(5.4m), 南北軸N 8°Eの東西棟の掘立柱建物跡である。柱間は東西が東から1.96+1.96+1.96m, 南北が北から2.7+2.7mである。掘方は径40~100cmの梢円・隅丸方形である。S B464建物跡と重複している。

(2) S B464建物跡

精査区北辺で検出されたものである。精査区域の都合上6個の掘方を検出したのみで、建物跡遺構とすべきかにわかに断じ難い。検出段階では東西1間(2.2m)×南北2間(5.4m), 南北軸方位N 14°30' Eである。柱間は東西が2.2m, 南北が北から2.7+2.7mである。掘方は径30~60cmの不整梢円形である。

土壤

(3) S K179土壤(第14図)

精査区東辺中央で検出された。平面プランは梢円形で、規模は長径1.57m, 短径1.14m 検出面からの深さ37cmを測る。基底部は平坦で、掘り込み壁は垂直に近い。埋土は3層に分けられる自然堆積土である。1層は茶褐色微砂質土でしま状に炭化物が堆積している。2層は暗褐色微砂質土でしま状に灰が堆積している。3層は暗褐色粘質土で上面に焼成炭化物層が薄く入っている。

(4) S K237土壤

精査区南辺中央西よりで検出された。平面プランは不整の梢円形で、規模は長径2.2m短径1.9m, 検出面からの深さは9cmを測る。掘り込みは浅く底は平坦である。東側の落ち込みは掘方の可能性がある。埋土は1層で、茶褐色微砂質土と黄褐色シルトがにじんだように混っている。

(5) S K238土壤

精査区南辺中央で検出された。東側を暗渠によって掘り込まれている。平面プランは不整形で検出長は、東西・南北とも1.9m, 検出面からの深さは15cmを測る。

製鉄遺構

(6) S Q208製鉄遺構(第15図)

精査区北東隅で検出された。平面プランは細長く葉巻状である。規模は長さ8.9m, 幅0.7~1.2m, 検出面からの深さは30cmを測る。長軸方向はN 28°Eを向く。基底部はゆるやかに湾曲しており、北東辺と南西辺の掘り込みは浅く入っている。埋土は3層に分けられる自然堆積である。1層は黒褐色粘質土で炭化物・鉄滓を含み、フイグ羽口が出土している。2層は暗褐色粘質土で炭化物を少量含んでいる。3層は明褐色砂質土である。

同様な平面プランを持つ製鉄遺構は豊原遺跡でも検出されている。2基検出されており、内S Q20は、長さ5.0m、幅98~120cm、深さ26cmを測る。S Q208と幅は同様のようであるが、長さが4mほど短いものである。

6. 出土遺物

新青渡遺跡の2次調査で出土した土器は、整理箱にして約55箱分である。このほかにS E250井戸跡などから斎串・箸などの木製品、S Q208製鉄跡からフイゴの羽口・鉄滓なども出土している。本節では遺構内出土の遺物を中心に記述するが、墨書き器については後節で詳述する。

(1) 建物跡出土の遺物

13棟の建物跡のうち、9棟の建物跡の柱穴掘り方から土器が出土している。また土器以外の遺物として、柱根や添木、根固め石などもある。土器はほとんどが細片で実測し得たものはない。つぎに各建物跡について出土した遺物の概要と時期について述べる。

A区のS B132・142・150建物跡の各柱穴のうち、遺物はS B132建物跡E B134・139から須恵器壺や赤焼土器壺・同甕の細片が微量出土しているだけで、時期は平安時代9~11世紀と概括するしかない。

C区の建物跡のうち、S B190建物跡から6個の柱穴より遺物が少量ずつ出土している。土品は須恵器壺、赤焼土器壺、甕の器種があり、須恵器壺の底部切り離しがヘラ切りであることや黒色化処理された土師器壺がみられないことなどから、時期は9世紀後半頃と推定される。またS B464建物跡からは3個の柱穴より遺物が少量出土している。土器は須恵器壺、赤焼土器壺・甕の器種があり、時期は前者と同じ9世紀後半頃と推定される。

B区の7棟の建物跡のうち、S B465を除く各建物跡の柱穴から遺物が少量ずつ出土している。S B265建物跡からは8個の柱穴より、内黒土師器壺、須恵器壺・同甕、赤焼土器壺・同甕が出土している。須恵器壺が回転糸切り技法によることや赤焼土器壺・甕の形態などから、時期は10世紀末葉頃と推定される。S B457建物跡からはE B441柱穴より須恵器壺が1片出土しているだけであるが、南北軸をSB265建物跡と同じくすることなどからこれとほぼ同時期と思われる。S B458建物跡からは6個の柱穴より、内黒土師器壺、須恵器壺・同甕、赤焼土器壺・同甕が出土している。須恵器壺の底部切り離しがヘラ切りと回転糸切りが共存することや赤焼土器の形態などから、時期は10世紀中頃に推定される。S B459建物跡からは5個の柱穴より、内黒土師器壺・須恵器壺・同甕、赤焼土器壺・同甕が出土している。須恵器壺の底部切り離しが回転糸切りであることや内黒土師器壺に低い台が付くことなどから、時期は10世紀末葉から11世紀前半頃と推定される。S B461・462建物跡か

表2 遺物観察表

擇因	遺物番号	器種	計測値 (m/m)			色調	胎土	焼成	底部切離	調整技法・備考	出土地点・層位	
			口径	底径	器高							
第17回	1	土師器	高台1号		57	赤褐色	緻密	良	圓余	内面ミガキ・炭素吸着	SE250 F2	
	2			(111)	(45)	48	白褐色	粗砂混	〃	〃	〃	F1
	3			(137)	80	33	灰色	緻密	〃	ヘラ切		F1
	4				63	暗灰色	粗砂混	〃	〃		F4	
	5			(120)		灰 色	緻密	〃	?		F	
	6			(128)	(65)	32	〃	粗砂混	〃	ヘラ切	F	
	7			(130)	(65)	35	〃	緻密	〃	〃	F2	
	8			(134)	(50)	43	〃	〃	〃	圓余	F2	
	9				50	43	〃	〃	〃	〃	F3	
	10				50	43	〃	粗砂混	〃	〃	F1	
第18回	11		高台1号		50	43	暗灰色	緻密	〃	〃	体部外面墨書「原」	F4
	12				52	明灰色	粗砂混	〃	ヘラ切	底部墨書「郷」	F	
	13	器		台付皿	(127)	(1.4)	31	灰色	緻密	〃	標準線	F1
	14			蓋	(200)		暗灰色	〃	〃	強度叩き	F	
	15			蓋			〃	粗砂混	〃	外縁縦状叩き・内背溝波文	F1	
	16						灰色	緻密	〃		F	
	17				127	55	47	棕褐色	粗砂混	〃	圓余	F3
	18				125	50	47	〃	緻密	〃	〃	F3
	19				128	52	50	赤褐色	粗砂混	〃	〃	F1
	20				(129)	44	47	灰褐色	〃	〃	〃	F4
第19回	21		燒	(138)	49	44	〃	〃	〃	〃		F3
	22			(152)	55	60	褐色	粗砂混	〃	〃		F4
	23				45		明褐色	粗砂混	〃	〃	体部墨書「千」	F2
	24				44		褐色	緻密	〃	〃	底部墨書「宣」	F3
	25			(140)			暗褐色	粗砂混	〃			F5
	26			(160)			灰褐色	〃	〃			F2
	27			(247)			赤褐色	粗砂混	〃			F2
	28			(248)			〃	〃	〃			F2
	29	土		(249)			〃	〃	〃			F1
第20回	30		燒	(248)			〃	粗砂混	〃			F3
	31			(200)			〃	粗砂混	〃			F2
	32			(200)			灰褐色	細砂混	〃			F1
	33			(190)			〃	粗砂混	〃			F4
	34	器		(412)			赤褐色	細砂混	〃			F4
	35			(324)			〃	〃	〃	外側叩き		F4
	36	漆器		(127)	70	30	素灰色	粗砂混	〃	ヘラ切		SE260 F2
	37			(145)	80	35	灰褐色	緻密	〃	〃		F2
	38	蓋					〃	粗砂混	〃	外縁縦状叩き・内アマ痕		F4
	39	土師器		(108)	57	51	黑色	粗砂混	〃	圓余	内外炭素吸着	SK311 F1
	40			16	124	54	暗褐色	粗砂混	〃	〃	内側皮剥離吸着	F

らは合せて7個の柱穴より、内黒土師器壺・須恵器蓋・赤焼土器壺・同甕が出土しているが、すべて細片であるため時期は10~11世紀と概括するしかない。

B'区のS B463建物跡の柱穴からは遺物が出土しておらず、時期は不明である。

(2) 井戸跡出土の遺物

今次の調査では、B区中央南よりで重複して2基の井戸跡が検出されている。

S E250井戸跡出土遺物（第17~19・32・33図、図版32・33・34）本井戸跡の埋土は20層に分けられ、上層の1~5層から土師器・須恵器・赤焼土器、中層の9層から斎串などの木製品と種子類、下層の17番から板状木製品と矢板が出土している。

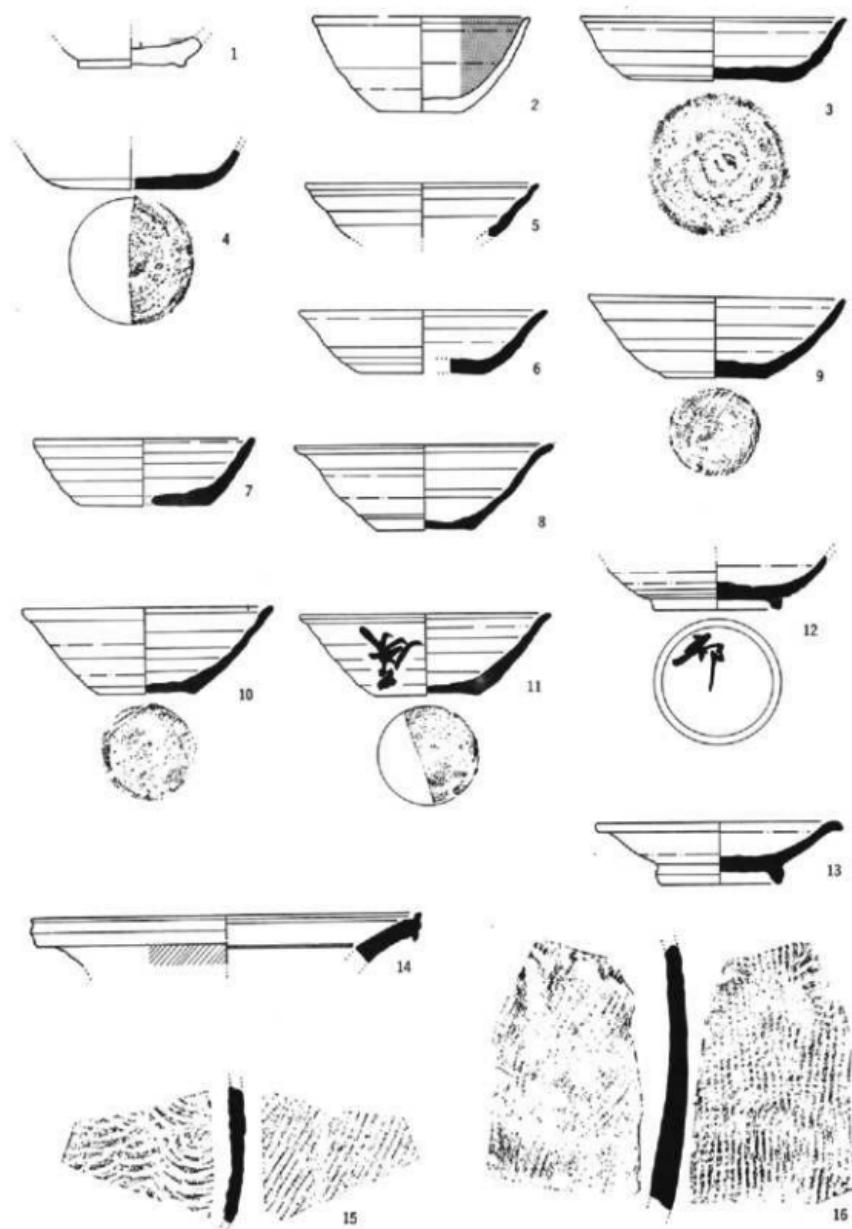
土師器は、器種が内面黒色化処理された壺が2点出土しており、高台の付くもの（第17図1）と平底のもの（同図2）がある。底部の切り離しはすべて回転糸切りによる。

須恵器は、壺・皿・壺・甕の器種がある。壺類の底部の切り離しはヘラ切りと回転糸切りの二者があり、量的には後者がやや多い。皿は高台が付くもの（第17図B）で、切り離しは回転糸切りによる。壺や甕は小片なため全体の器形は不明である。

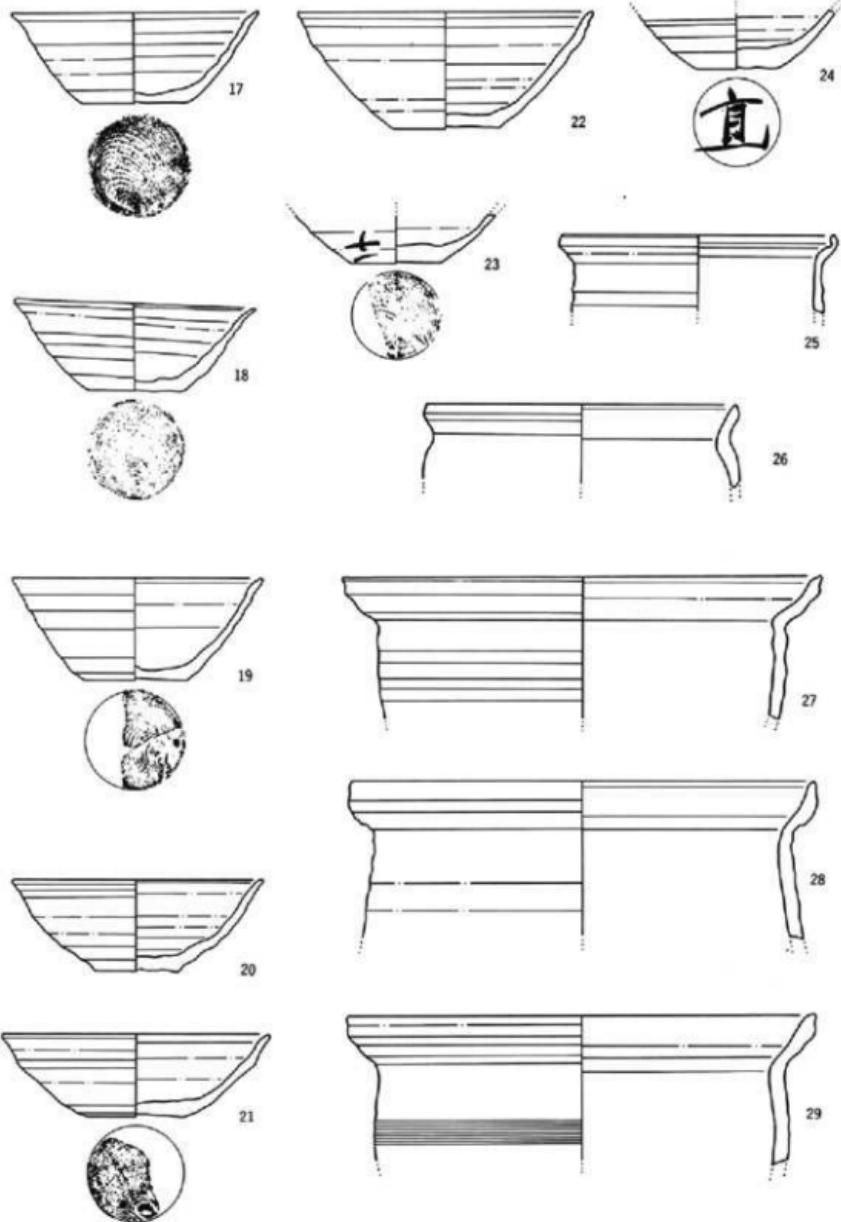
赤焼土器は、壺・甕・壺などの器種がある。壺はすべて平底で、切り離しが回転糸切りされているもので、ケズリやミガキなどの再調整は認められない（第18図17~24）。底径に

表6 遺物観察表

探查 番号	遺物 番号	器 種	計 測 値 (m/m)			色 調	胎 土	燒 成	底 部 切 離	調整技法・備 考	出土地点・層位	
			口 徑	底 径	器 高							
31 回	162	土師器	16		45	33	暗灰色	粗砂混	良	回 条	内面ミガキ・炭素吸着	SQ208 F1
	163	須 恵 器	皿	124	65	26	#	緻密	#	#		F2
	164			139			#	#	#			F1
	165	高 台 付		68	30	#	#	#				F1
	166		甕				灰 色	#	#			F1
	167						#	#	#			F1
	168	赤 焼 土 器	16	(133)	63	69	明褐色	粗砂混	#			F1
	169		皿	(154)	50	28	赤褐色	#	#	回 条		F2
	170				50		灰褐色	#	#	#		F1
	171	須恵器	甕	(480)			白色	緻密	#		彫刻波状文	F1

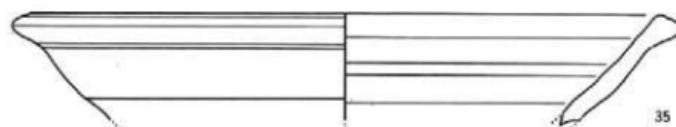
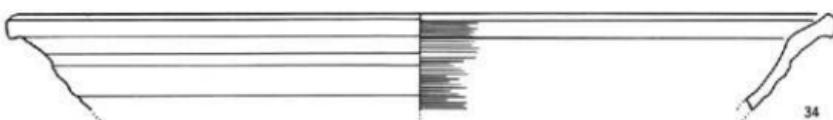
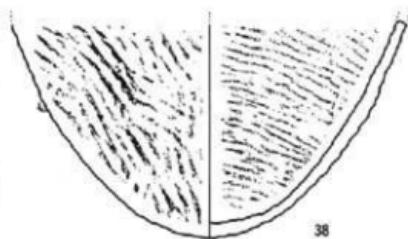
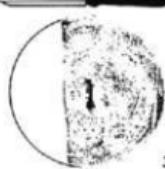
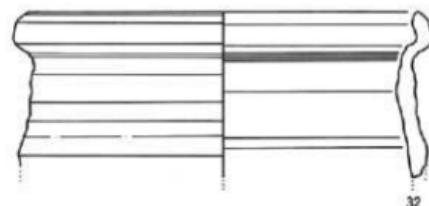
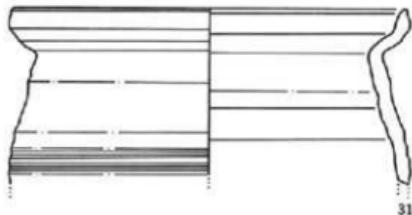
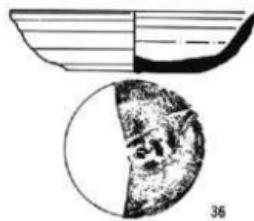
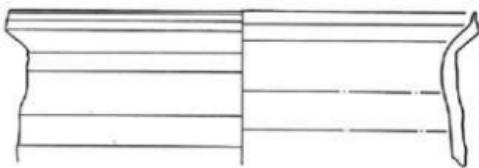


第17図 出土遺物 (1) SE250 井戸跡 (1)



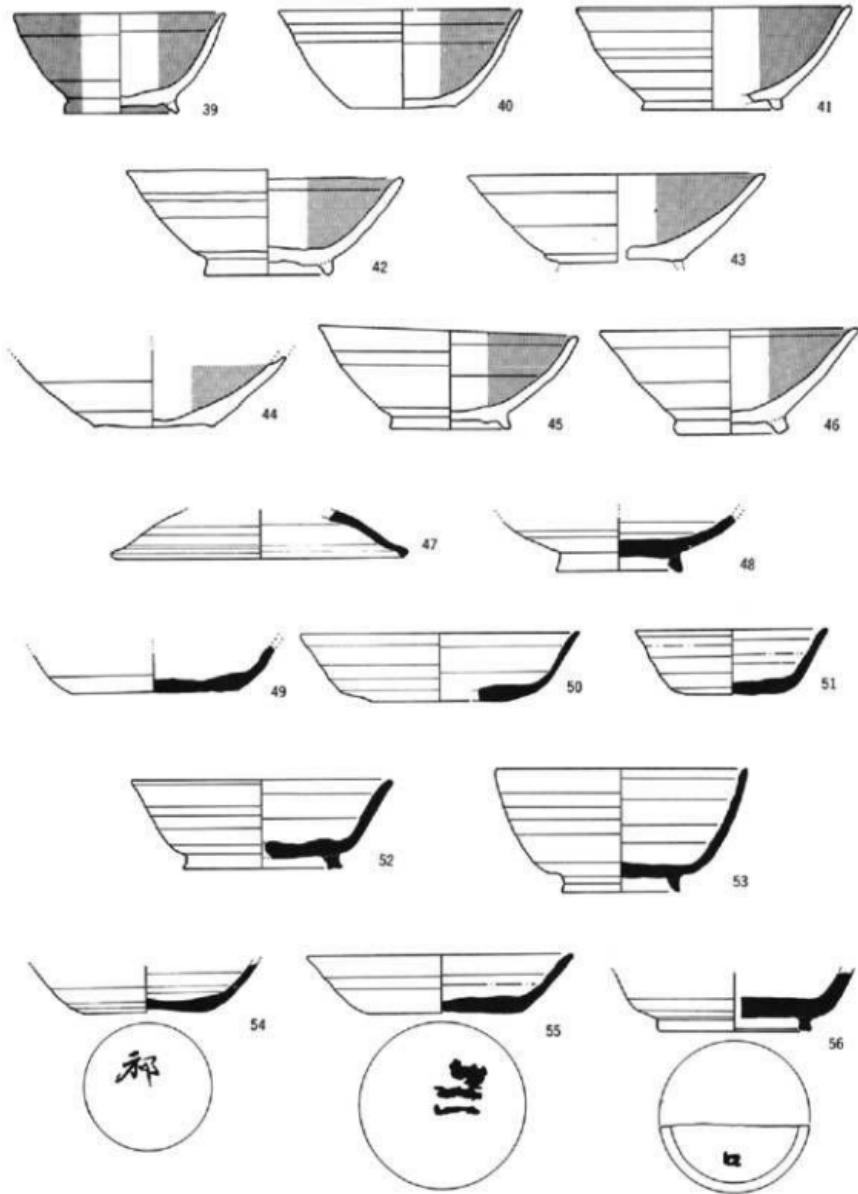
第18図 出土遺物（2）SE250 井戸跡（2）

0 10cm



第19図 出土遺物（3） SE250・260 井戸跡

0 10cm

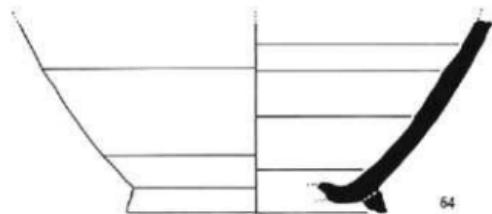


第20図 出土遺物 (4) SK311 土壙 (1)

0 10cm



弐

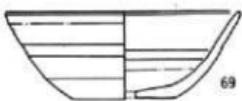


第21図 出土遺物（5） SK311 土壌（2）

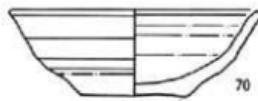
0 10cm



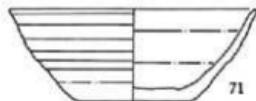
68



69



70



71



72



73



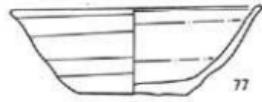
74



75



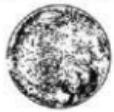
76



77



78



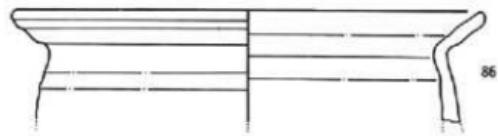
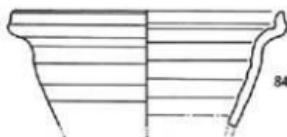
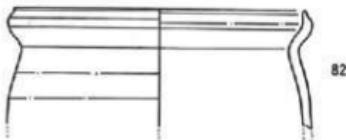
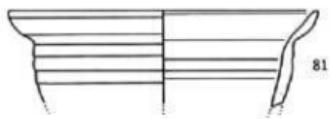
79



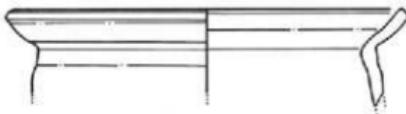
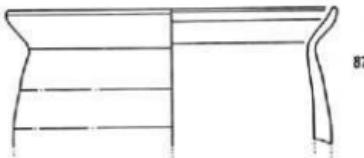
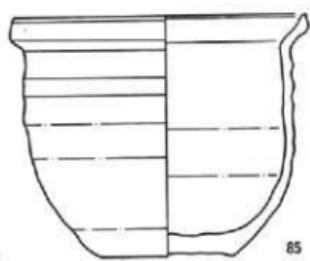
80

第22図 出土遺物（6） SK311 土壙（3）



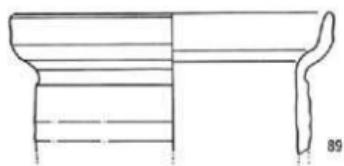


86

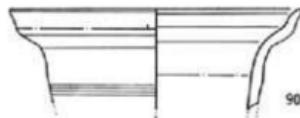


第23図 出土遺物（7） SK311 土壙（4）

0 10cm



89



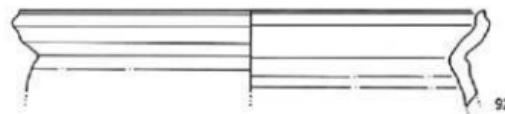
90



91



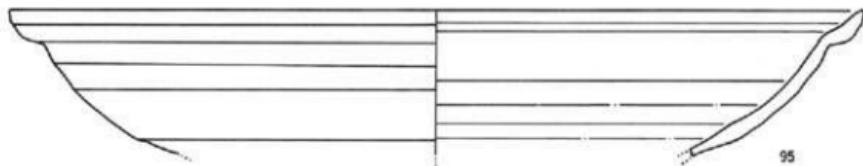
93



92



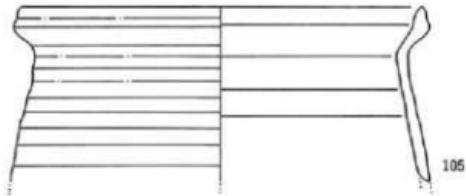
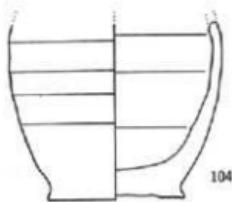
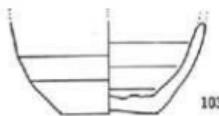
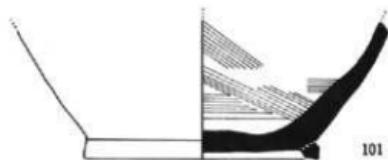
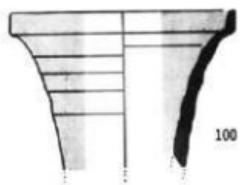
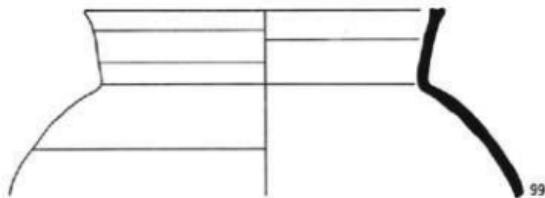
94



95

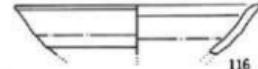
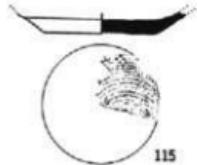
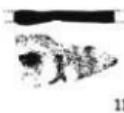
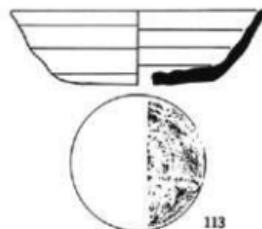
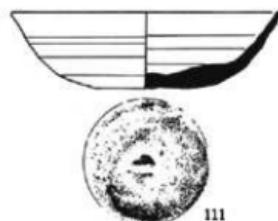
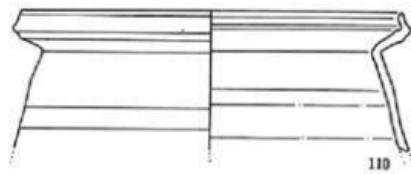
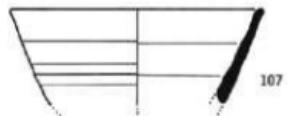
第24図 出土遺物（8） SK311 土壙（5）

0 10cm



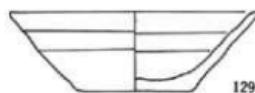
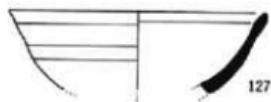
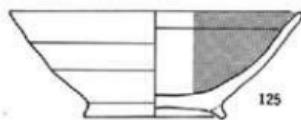
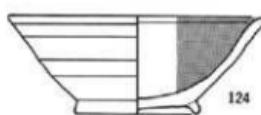
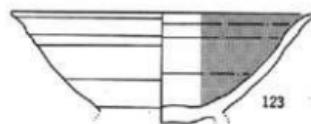
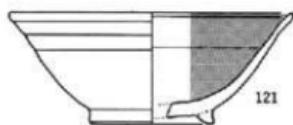
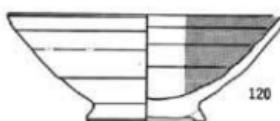
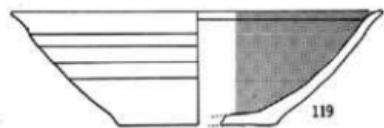
第25図 出土遺物（9） SK234 土壙

0 10cm



第26図 出土遺物 (10) SK235・249・257・258 土壌
SD345 溝状遺構

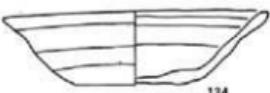
0 10cm



第27図 出土遺物 (11) SK252 土壌 (1)



133



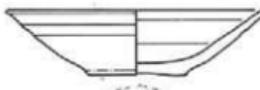
134



135



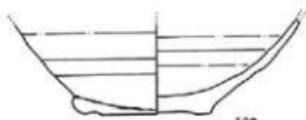
136



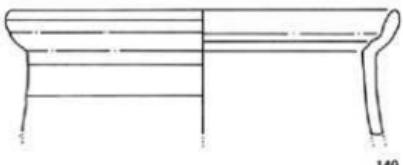
137



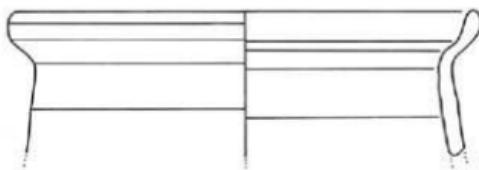
138



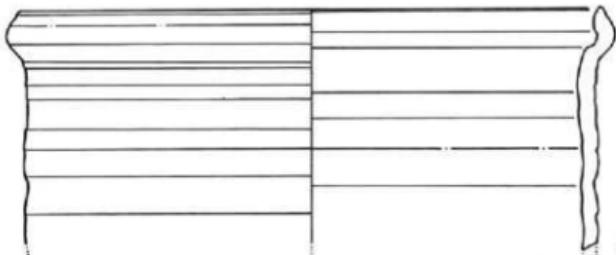
139



140



141



142

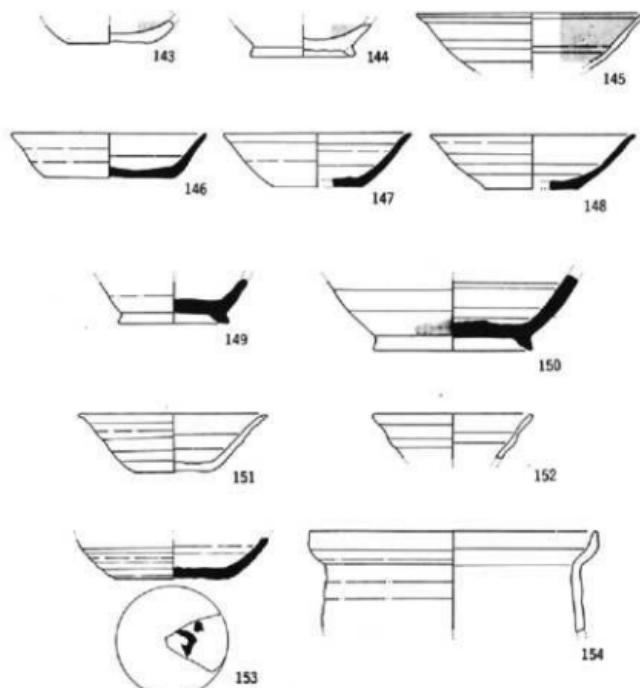
第28図 出土遺物 (12) SK252 土壙 (2)



比して口径がやや小さく、器高の高いものが主体を占める。甕は小形のもの（第18図25・26）と、やや大形で丸底を呈すると思われる長胴甕（第18図27～29、第19図30～33）の二者がある。両者とも口縁部が「く」字状に外反しており、やや膨みを有する。場は図示し得たものは口縁部付近の2点（第19図34・35）のみであるが、体部の内外面には条線状の叩き目や同心円状のアテ痕を有すると思われる。

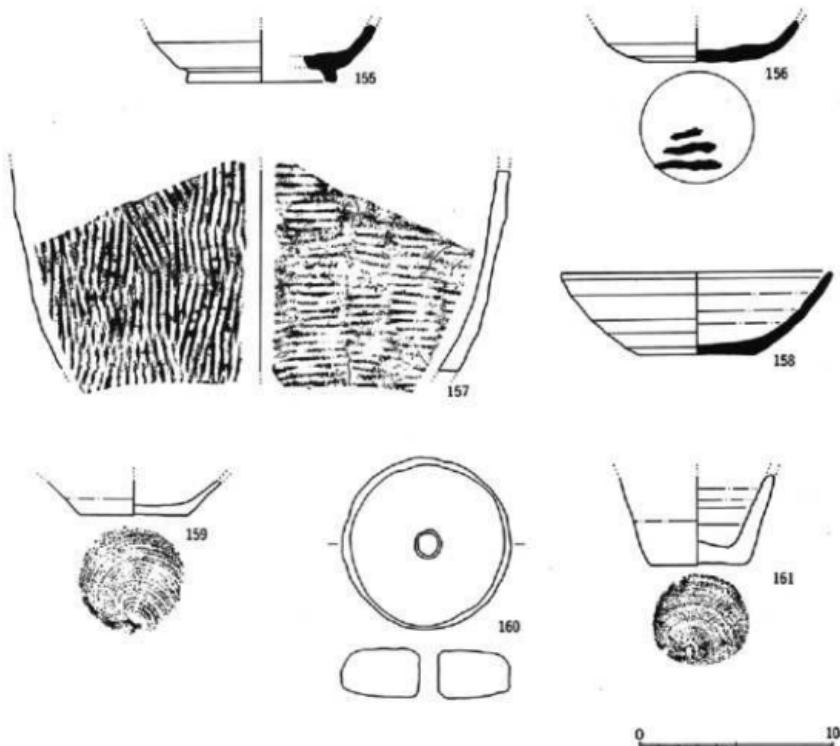
これらの土器群は、全体として庄内地方の平安時代土器編年の第IV期および第V期に比定されるものであり、時期は10世紀中葉から末葉頃と推定される。ただしこれらの土器は井戸跡埋土の上層から出土したものであることから、本井戸跡のいわば廃棄時期を示唆するもので、井戸の作られた時期はさらに古く考える必要がある。

S E 250井戸跡の中層にあたる9層からは、斎串（第32図172～134・180～184）や瓢箪に棒状の木製品をきし込んだもの（第33図193）および箸（同図195～197）・棒状ないし籠状の木製品（同図210・250）・ブナの実などの種子（図版51）も出土している。斎串は八幡町



第29図 出土遺物 (13) SK255 土壌

0 10cm



第30図 出土遺物 (14) SK179・237・238 土壙



162



163



164



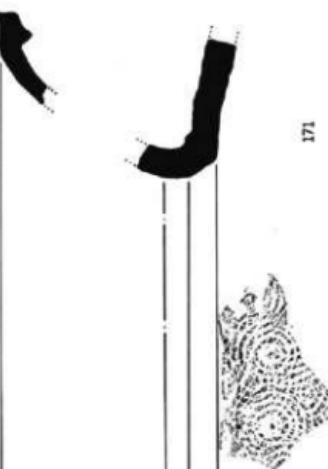
165



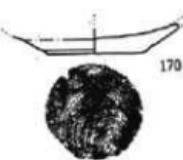
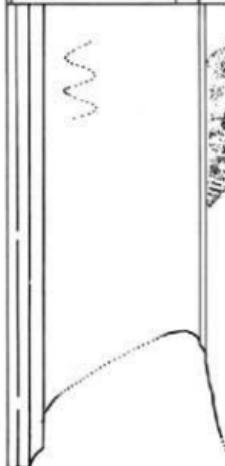
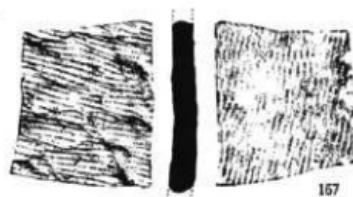
166



167



168



170



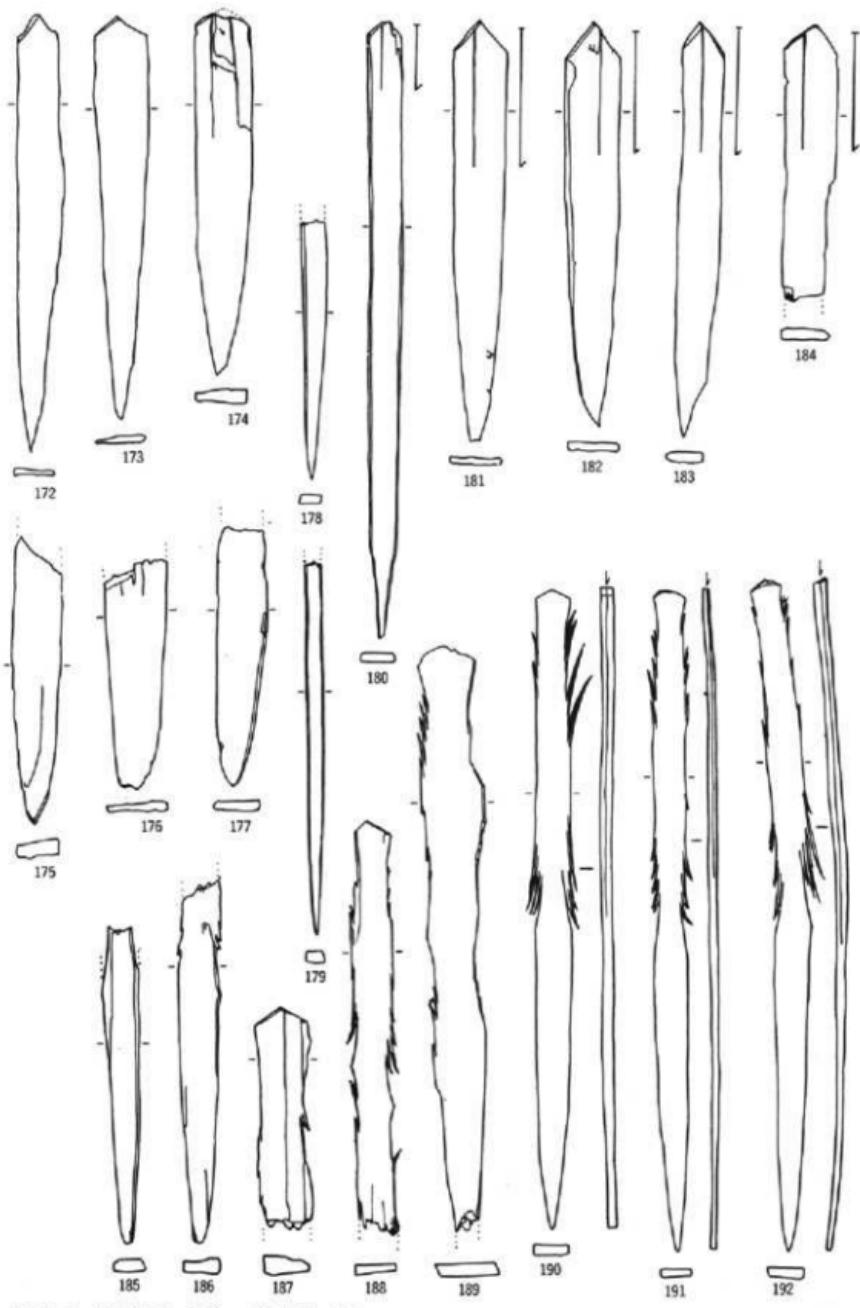
169

第31図 出土遺物 (15) Q S 208製鉄跡

0 10cm

表7 木製品観察表

排 国	遺 物 番 号	種 別 分 類	計 測 値 (%)	整 形 手 法 の 特 徴	出 土 地 点
			長さ×幅×厚さ・径		
第32回	172	A	148×14×2	圭頭状で劍先状である	S K250 F 9
	173		137×17×2.5	# #	#
	174		123×18×4.5	# ? #	#
	175	A又はB	〈98〉×15×5.5	上部がなく劍先状である	S K234 F 3
	176		〈77〉×21×3	# #	S K311 F 1
	177		〈89〉×16×4	# #	#
	178		〈90〉×8×3	# #	#
	179	D	〈128〉×7×4	# #	#
	180		211×12×3	圭頭状で劍先状である	#
第189回	181	B	143×18×2	圭頭状で切り込み47%があり劍先状である	S K250 F 9
	182		139×18×3	# 切り込み41%	#
	183		142×13×3.5	# 切り込み43%	#
	184		〈94〉×16.5×4	# 切り込み40%があり先端がなし	#
	185		〈109〉×11×4	上部がなく、劍先状である。折れ様に左右に削切れがある	S K311 F 7
	186	C	〈124〉×13×5	# # #	S K311 F 1
	187		〈76〉×16×6	圭頭状で先端がなし	#
	188		〈142〉×14×3	# #	S K311 F 7
	189	C ₂	〈201〉×22×4	# #	S K311
	190		220×11×3.5	割り切り10%圭頭状で、劍先状であり、	#
	191		228×11×3	# 10% 中程より上部、左右に削切	#
	192		232×12.5×3.5	# 15% れがある	#
第33回	193	棒	113 - 62	上下端に194を差し込む穴有り	S E250 F 9
	194		〈389〉×12×7	先端を35%一段細く尖らす。断面は橢円形	#
	195	箸	283×5×4	上下端を細く尖らす	#
	196		〈147〉 - 4	外面を多面形に面取り	#
	197		227×8.5×6	外面を多面形に面取り	S K311 F 6
	198		〈92〉 - 4	外面多面形。断面橢円形	S E260 F 3 → F 2 ?
	199		〈110〉 7 × 6	断面六角形に面取り	# #
	200		〈132〉×7.5×5.5	断面四角形、先端細る	S K255 F 4
	201	棒	〈165〉 - 11	断面円形	S E250 F 9
	202		〈238〉×15×12	断面橢円形	S K311
	203		218×44×42	自然木の下端に階段状に乾痕、上端欠損	S K179 F 3
第34回	204	籠	180×27×6.5	上端山形、下端先へりを斜めに鋸く削ぐ。下端に径2%の穿孔	S E250 Y
	205		178×21×7.3	曲面底版に刃物整形底。墨書き「大戸廿ヶ西川」	試掘場TP30
	206	板	6 - 144	曲物底版、径3%の木釘付縫	S K255 F 4
	207		135×125×32	外周が腐敗。曲物底版か	S K237



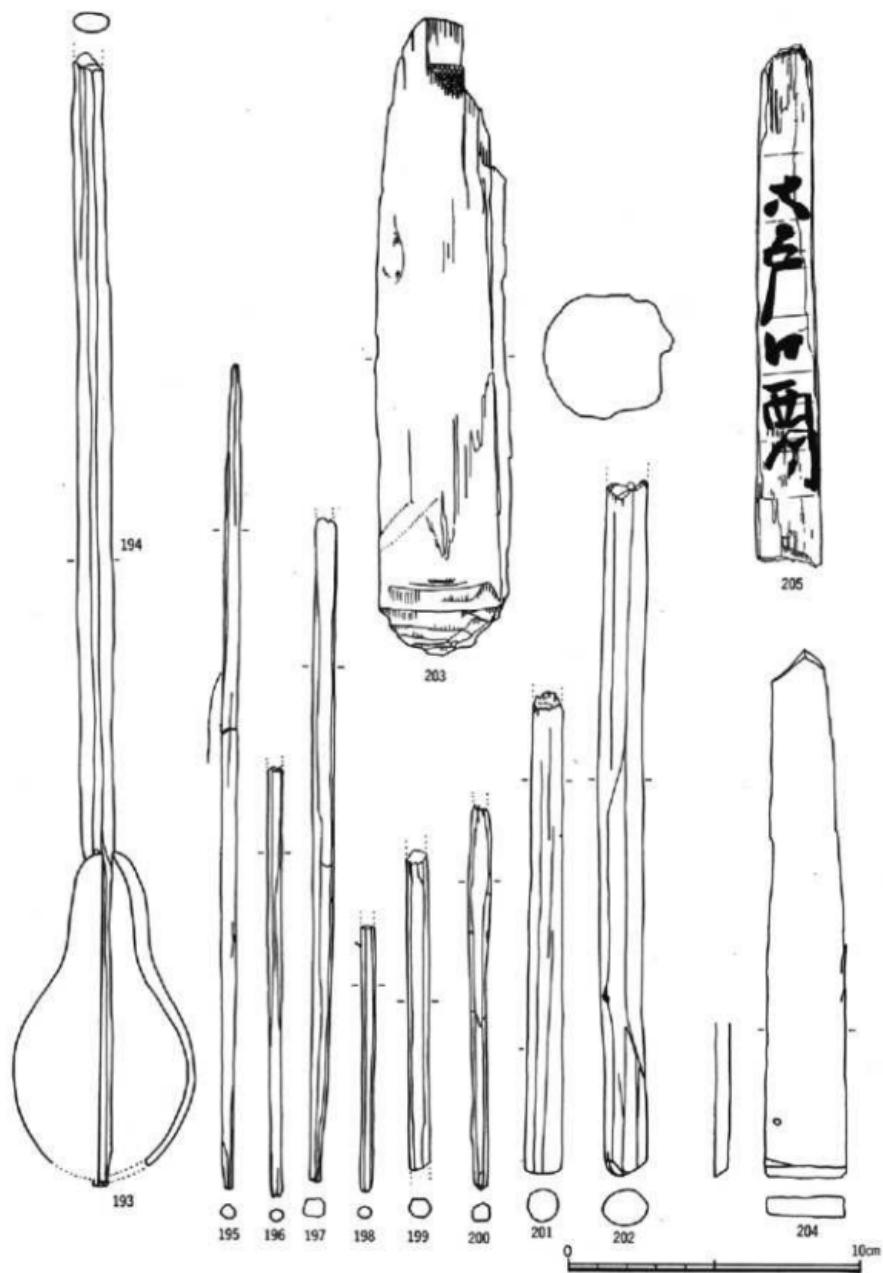
第32図 出土遺物 (16)

斎串 S = $\frac{1}{2}$

-51-

0

10cm



第33図 出土遺物 (17) 棒・籠・木筒・ひょうたん $S = \frac{1}{2}$

俵田遺跡 S M60祭祀遺構の分類でA類とした頂部が圭頭状で先端が劍先状を呈するものと、B類としたそれに切り込みを有するものの二者がある。井戸を祭祀の場とした貴重な類例で、庄内地方では八幡町後田遺跡 S E18井戸跡に次く二番目の検出例である。

S E260井戸跡（第19・33図、図版34）本井戸跡の埋土は掘り方部も入れて4層に分けられ、井側の下層（2層）と掘り方から遺物が少量出土している。

土器は、須恵器壺（第19図36・37）と赤焼土器甕（同図38）などがある。須恵器壺は底部の切り離しがヘラ切りによるもので、体部下端から底部にかけてやや丸味を有するものである。赤焼器甕は、長胴甕の底部付近にあたる丸底のもので、内外部に条線状の叩きおよびアテ痕が施されている。

これらの土器群は、庄内地方の平安時代の土器編年の第IV期に比定できるもので、時期は10世紀中葉頃と推定される。S E260井戸跡はS E250井戸跡の西辺を掘り込んで作られていることから、S E260井戸跡の時期を10世紀中葉とした場合、S E250井戸跡の創設時期はこれよりやや古くなることが考えられる。

本井戸からはさらに木製の箸が2点（第33図198・199）と、イネ科に属すると思われる種子が4点（図版51）出土している。

（3）土壤出土の遺物

新青渡遺跡の2次調査では20基の土壤を検出した。各土壤からは多少を問わなければすべて、土器・木製品・石製品・種子類などの遺物が出土している。ここではそのうち主たる土壤13基について記述する。

S K311土壤出土の遺物（第20～24図、図版35～39）B区中央東寄りで検出された長径6mの大きな土壤で、遺物が多量に出土している。埋土は8層に分けられ、遺物は各層に認められるが、とくに下層の5～7層に多く含まれている。実測なし得た土器は57点であるが、全体としての量は赤焼土器が半数以上を占め、次いで須恵器・土師器の順による。

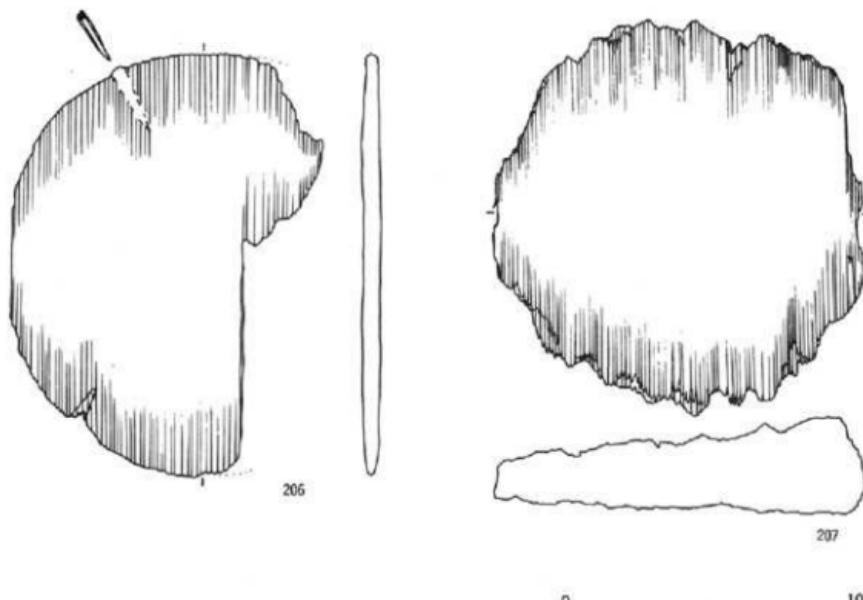
土師器は、器種が内面ないし内外面が黒色化処理された壺類だけである。低い高台の付くものがほとんどであるが、1点だけ平底のもの（第20図40）もある。底部の切り離しはすべて回転糸切りによる。器形は体部下端から口縁部にかけて直線的に開くものが多い。

須恵器は、蓋・壺・壺・甕の器種がある。壺類の底部の切り離しはヘラ切りと回転糸切りの二者があり、量的にはほぼ半ばする。壺の底部には「祁」や「三」、「字」などの墨書が認められる。蓋は口縁端が「く」字状に屈折するもので、天井部の切り離し法は不明である（同図47）。壺類は小形の長頸壺と思われるものが2点（第21図62・63）と中形の壺の体部下半部が1点（同図64）出土している。62・63の底部切り離しはヘラ切りである。甕は外面に条線状の叩き、内面に青海波文のアテ痕を有するものが数点出土している。

赤焼土器は、壺・甕・堀などの器種がある。壺類は平底のものがほとんどであるが、1点高台が付くもの（第22図80）もある。底部の切り離しはすべて回転糸切りによるもので、ケズリやミガキなどの再調整は認められない。底部に1点「千」の墨書がある壺（同図68）も出土している。器形は底径が小さく、体部から口縁部にかけて直線的に開くものが多い。甕は小形のもの（第23図81～85・89・90・93）と、やや大形で丸底を呈すると思われる長胴甕（第23図86～88、第24図91・92）の二者がある。両者とも口縁部は「く」字状に外反するか、やや丸みを有している。堀は図示し得たものは口縁部付近の2点（同図94・95）のみである。これらの土器群は、全体として庄内地方の平安時代土器編年の第VI期に比定され、時期は11世紀前半頃と推定される。

本土壤からは、このほか斎車が13点（第32図）と箸（第33図197）、棒状の木製品（同図202）、クルミ・トチ・ブナ・イネ科仲間の種子（図版50・51・52）などが出土している。斎車はC類とした左右に切り込みのあるものが多く、S E250井戸跡の斎車とは違いをもつ。

S K234土壤出土の遺物（第25・32図、図版40） B区南西辺で検出された長径2.3mの土壤で、遺物がややまとまって出土している。埋土は6層に分けられ、そのうち1～3層に遺物が含まれる。土師器は認められず、須恵器と土師器がほぼ1：2の割合で出土して



第34図 出土遺物 (18) S = 1/2

いる。須恵器は、蓋・壺・壺・甕の器種がある。蓋は紐部が凹面になるので、口縁部の返しはあまり顕著でない（第25図96・97）。壺は底部の切り離しがヘラ切りによるものが1点出土している（98）。甕は口縁部がほぼ直立するもので、外面に条線状の叩き目、内面に青海波文のアテ痕が認められる（99）。赤焼土器は、壺・甕・壠の器種がある。壺は平底で、回転糸切り離しのものが数点出土している（102）。甕のうち103は、口縁部が肥厚して外反するものである。壠は口縁部が直角に曲り、口縁端がやや立ち上る（106）。

これらの土器群は、全体として庄内地方の平安時代土器編年の第IV期に比定され、時期は10世紀中葉頃と推定される。また本土壙の3層から斎串も1点（第32図98）出土している。

S K252土壤出土の遺物（第27・28図、図版42・43） B区北辺中央で検出された土壤で埋土は4層に分けられる。遺物は各層から出土するが、2層にもっとも多い。赤焼土器が大半を占め、次いで土師器が多く、須恵器はごく少ない。土師器は、器種が内面黒色化処理された壺類のみで、すべて低い台を有するものと思われる（第27図119～126）。須恵器は、壺と甕の小片が各1点ずつ出土している（同図127・128）。赤焼土器は、壺・甕などの器種がある。壺はすべて平底で回転糸切り離しによるものである。ロクロ目が顕著である（第27図129～132、第28図133～139）。器形は底径が小さく、体部が直線的立ち上る。甕は口縁部がやや丸味をもつて丸底の長胴甕の器形をなすものと思われる。

これらの土器群は、全体として庄内地方の平安時代土器編年の第VI期に比定され、時期は11世紀前半頃と推定される。

S K255・258土壤出土の遺物（第26・29・33・34図、図版41・44） B区西辺中央で重複して検出された二つの土壤で、重複関係からみてS K255土壤が新しい。埋土はS K255土壤が4層に分けられ、S K258土壤は単一層である。S K255土壤から出土した土器には、土師器・須恵器・赤焼土器の三種類がある（第29図143～154）。赤焼土器が主体を占めるが、須恵器もやや多く出土している。またS K258土壤からは須恵器壺と赤焼土器壺の細片が少量出土している（第26図114～116）。

S K255土壤の土器群は、全体として庄内地方の平安時代土器編年の第V期から第VI期に比定され、時期は10世紀末葉から11世紀前半頃と推定される。S K258土壤の時期については資料が少ないので明らかでないが重複関係などからみて10世紀末葉頃と考えられる。S K255土壤からは、このほか最下層の4層から箸（第32図200）や曲物底板（第33図206）などの木製品も出土している。

その他の土壤出土の遺物（第26・30・33・34図、図版41・45・50）これまで述べた5基の土壤のほかにも、6基の土壤から土器や土製品、曲物底板などの木製品が少量ずつ出土

している。S K235土壌から須恵器坏・赤焼土器甕などが出土しており（第26図107～110）時期は10世紀中葉前後頃と推定される。S K249土壌からはヘラ切り離しの須恵器坏が3点出土しており（同図114～116），時期は9世紀後半頃と推定される。S K257土壌からはヘラ切り離しの高台付坏が1点出土しており（同図117），時期は9世紀後半から10世紀中葉にかけての頃と思われる。S K179土壌からは須恵器坏と赤焼土器甕（第30図155～157）および棒状の木製品（第33図203）が出土しており，時期は9世紀後半頃と推定される。S K237土壌からは須恵器坏と赤焼土器坏，紡錘車（第30図158～160）および曲物底板（第34図207），木製漆器（図版50）が出土しており，時期は10世紀中頃と思われる。

（4） S Q208製鉄遺構出土の遺物（第31図，図版46）

C区北東隅で検出された長径8.9mの遺構で，埋土は3層に分けられる。1層からは鉄滓・炭化物・フイゴの羽口などが出土している。土器は1層と2層から土師器・須恵器・赤焼土器が整理箱に1箱分出土している。土師器は，器種が内面黒色化処理された坏のみである。平底で底部の切り離しは回転糸切りによる。須恵器は，坏・皿・甕などの器種がある。171は大形の須恵器甕で，頸部に篦描きの波状文が施されている。これらの土器群は，全体として庄内地方の平安時代の土器編年の第IV期に比定され，時期は10世紀中頃にあたる。

（5） 溝状遺構出土の遺物（第26図，図版50）

溝状遺構の大半を占めるのは畑の畝と考えられる同一方向の連続した溝跡であるが，これらからは遺物の出土は認められない。その他の溝状遺構としては，B区のS D345溝状遺構から体部に「印木子□」と篦描きされた須恵器坏（第26図118），同じB区のS D443溝状遺構から木製漆器（図版50）が1点出土している。

（6） 包含層出土の遺物（第33図，図版49・50）

遺構以外の遺物包含層から出土したもので特記するような遺物はあまりないが，発掘調査初めのテストピット30から木簡が出土しているので紹介する（第33図205）。木簡は幅21mmの短冊型を呈し，両端が欠損している。片側の墨書面に刃物による整形痕が認められ，赤外線カメラによる解読の結果「大戸廿西川」との5文字が認められた。伴出遺物がなく時期は不明であるが，平安時代の生活面の直上から出土していることから，平安時代に属するものと考えられる。このほかT P78から下駄が1点出土している（図版50）。

7. 墨書き土器

本遺跡出土の墨書き土器は判読不能なものも含めて125点ある。ヘラ書きを有する土器は9点あり、うち2点に墨書きがある。ほとんどの墨書き土器が、B・B'・C精査区の遺物包含層II・III層から出土している。遺構内出土のものは37点(29.6%)ある。

器種別の内訳は須恵器壺99点(79.2%)、須恵器高台付壺15点(12%)、須恵器蓋2点(1.6%)、赤焼土器壺9点(7.2%)である。

墨書き部位は、壺・高台付壺については底部外面117点、体部外面5点、体部内面2点、蓋・抓上面1点である。

墨書き銘は漢字一字のものがすべてである。「祁」(=祈)が38点(30.4%)、「三」が34点(27.2%)、「十」が4点、「連」が4点、「否」が4点、「千」が2点ある。他に1点ずつものに、「直」、「尿」、「字」、「口」、「考」、「二」、「右」がある。他は判断不能であったり、破片で文字の一部しか残っていないものである。

ヘラ書きを有する土器はすべて須恵器壺である。ヘラ書きの部位は118(第26図)を除き底部にあり、「×」、「|」、「—」がある。S D345出土の118(第26図)は須恵器壺の破片で、見込み部に「臼水子□」という明瞭なヘラ書き文字がある。破片の一辺には、人為的と考えられる凹凸のある打ち欠きによる剥離が観察される。

墨書き土器にも人為的な打ち欠きが観られるものがあり、明瞭なもので50点を数える。形状は、規則的に波状をなすもの(278)、不規則に打ち欠いたものに分けられる。これまで庄内における発掘調査でも、人為的な打ち欠きが認められる墨書き土器は散見されていたが、本遺跡のように多量に出土した例は無い。

墨書き土器の出土地点の分布状況は、第35図の通りである。精査区全域で出土しているわけでは無く、大きく三つの地域に分けられる。一つはC区で精査区内で散乱している。墨書き銘は「三」が18点と多く、「連」の4点がこの地区に限って出土している。二つ目はB区のSK311土壤の北側であり、この地点は地山、III層上面に炭化物層が薄く堆積していた。「祁」が11点と集中しており、他に11点出土している。SK311からは「祁」、「三」、「干」、「字」、「口」の銘が出土している。三つ目は同じB区のSE250井戸跡の南側落ち込み部周辺である。「祁」が22点と三地区では最も多く出土している。「三」が5点、「十」が3点出土している。SE250からは、「祁」、「直」、「千」、「尿」の銘が出土している。

SE250・SK311からは斎串も出土しており、墨書き土器と合わせての祭祀がとりおこなわれたことが伺われる。

墨書き器分布図

第35図

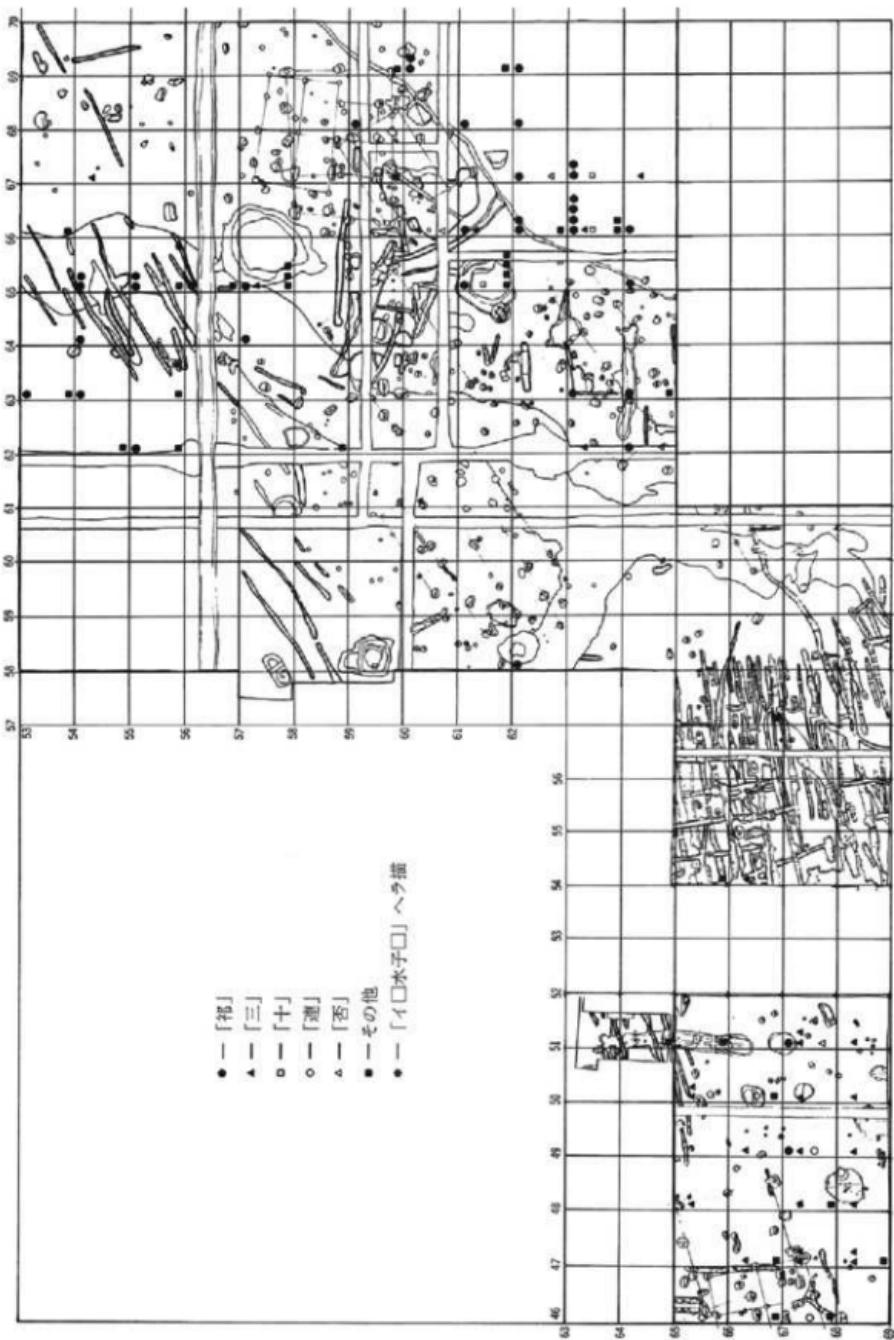


表8 墓書・ヘラ描き土器観察表(1)

遺物 番号	器 種	色調	胎 土	燒成 度	部 切 離	部 位		銘	備 考	出 土 地 点
						外・内面	位 置			
12	須恵器	高台付盆	明灰色	緻 密	良	へら切	外 面	底 部	「祁」	人為的打ち欠き S E250
208	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	「祁」カ		S D177
209	ノ	ノ	白灰色	石英・砂混	ノ	ノ	ノ	「祁」		S D284
210	ノ	ノ	ノ	粗 砂	ノ	へら切	ノ	ノ	「祁」?	
54	ノ	ノ	明灰色	緻 密	ノ	ノ	ノ	「祁」	人為的打ち欠き	S K311 F 7
211	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ		T P42
212	ノ	ノ	白灰色	石英・砂混	ノ	ノ	ノ	「祁」?		50-68II
213	ノ	ノ	明灰色	緻 密	ノ	圓 余	ノ	「祁」		52-68III
214	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	「祁」?		59-63II
215	ノ	ノ	白灰色	石英・砂混	ノ	ノ	ノ	「祁」		63-56II
216	ノ	ノ	明灰色	緻 密	ノ	へら切	ノ	ノ	ノ	64-54II
217	ノ	ノ	白灰色	石英・砂混	ノ	圓 余	ノ	「祁」?		64-55II
218	ノ	ノ	明灰色	石英・砂混	ノ	へら切	ノ	「祁」	人為的打ち欠き	65-55II
219	赤燒土器	ノ	明褐色	緻 密	ノ	圓 余	ノ	「祁」カ		65-58II
220	須恵器	ノ	明灰色	ノ	ノ	へら切	ノ	「祁」	人為的打ち欠き	66-55
221	ノ	高台付盆	ノ	ノ	ノ	圓 余	ノ	ノ	ノ	66-56
222	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	へら切	ノ	ノ	ノ	66-56
223	ノ	高台付盆	ノ	石英・砂混	ノ	ノ	ノ	ノ	人為的打ち欠き	66-65II
224	ノ	ノ	灰褐色	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	67-62III
225	ノ	ノ	白灰色	ノ	ノ	圓余切	ノ	「祁」カ		67-63
226	赤燒土器	ノ	明褐色	緻 密	ノ	ノ	ノ	「祁」	人為的打ち欠き	67-63
227	須恵器	ノ	明灰色	ノ	ノ	ノ	ノ	「祁」カ	ノ	67-64
228	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	「祁」		67-64
229	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	人為的打ち欠き	67-64II
230	ノ	ノ	ノ	石英・砂混	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	67-64II-68-65II
231	ノ	ノ	暗灰色	粗砂混	ノ	ノ	ノ	ノ	人為的打ち欠き	68-63II
232	ノ	ノ	白灰色	石英・細砂	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	68-64II
233	ノ	ノ	明灰色	緻 密	ノ	ノ	ノ	「祁」?		68-64II
234	ノ	ノ	黄灰色	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	人為的打ち欠き	69-62II
235	ノ	高台付盆	明灰色	ノ	ノ	へら切	ノ	ノ	人為的打ち欠き	69-63II

表9 墓書・ヘラ描き土器観察表(2)

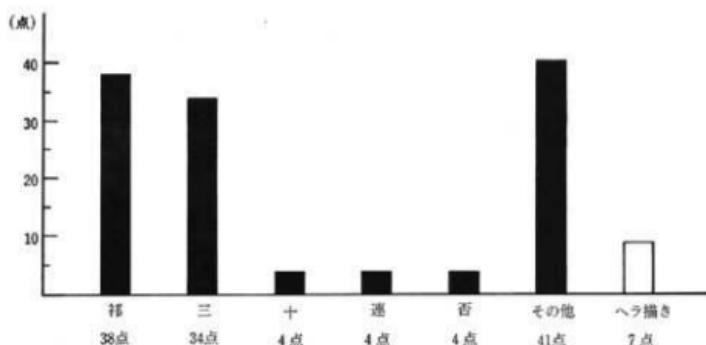
遺物番号	器種	色調	胎土	焼成	底部切離	部位			銘	備考	出土地点
						外・内面	位置				
236	須恵器	べ	黄灰色	緻密	良	へら切	外面	底部	「祁」		67-65II
237	〃	〃	白灰色	石英・砂混	〃	回糸	〃	〃	〃	人為的打ち欠き	70-61
238	〃	〃	暗灰色	緻密	〃	〃	〃	〃	〃		70-63II
239	〃	高台付环	〃	〃	〃	〃	〃	〃	「祁」?		EP389F1
240	〃		明灰色	〃	〃	〃	〃	〃	「祁」カ		SD-355
241	〃	高台付环	暗灰色	石英・砂混	〃	へら切	〃	〃	「祁」?	人為的打ち欠き	64-64
242	〃	べ	明灰色	石英・砂混	〃	〃	〃	〃	〃		66-55
243	〃	〃	白灰色	〃	〃	回糸	〃	〃	〃		70-61
244	〃	〃	暗灰色	緻密	〃	へら切	〃	〃	「三」	人為的打ち欠き	EB191
245	〃	蓋	暗灰色	〃	〃	—	〃	つまみ	〃	〃	EB272
156	〃	べ	明灰色	〃	〃	へら切	〃	底部	〃	〃	SK179F2
246	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	「三」カ		SK256F2
247	〃	〃	細砂	〃	〃	〃	〃	〃	「三」	ヘラ描き 人為的打ち欠き	SK256F2
55	〃	〃	明灰色	緻密	〃	〃	〃	〃	〃		SK311F5
248	〃	〃	石英・砂混	〃	〃	〃	〃	〃	〃		SK381F1
249	〃	〃	緻密	〃	回糸	〃	〃	〃	〃		SD239
250	〃	〃	白灰色	〃	〃	へら切	〃	〃	〃		46-66II
251	〃	〃	暗灰色	〃	〃	〃	〃	〃	〃		48-67II
252	〃	〃	明灰勘	石英・砂混	〃	〃	〃	〃	〃	人為的打ち欠き	48-69II
253	〃	〃	白灰色	緻密	〃	〃	〃	〃	「三」カ	人為的打ち欠き	49-68III
254	〃	〃	明灰色	石英・砂混	〃	〃	〃	〃	〃	〃	50-67III
255	〃	〃	暗灰色	緻密	〃	〃	〃	〃	「三」	〃	50-68II
256	〃	〃	暗灰色	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	50-69II~III
257	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	「三」カ	〃	51-66III
258	〃	〃	細砂	〃	〃	〃	〃	〃	「三」	ヘラ描き 人為的打ち欠き	51-68II
259	〃	〃	暗灰色	石英・砂混	〃	〃	〃	〃	〃	人為的打ち欠き	51-69III
260	〃	〃	白灰色	緻密	〃	回糸	〃	〃	〃	〃	52-68III
261	〃	〃	石英・砂混	〃	へら切	〃	〃	〃	「三」		55-67II
262	〃	〃	灰褐色	緻密	〃	〃	〃	〃	〃		67-62III
263	〃	〃	暗灰色	石英・砂混	〃	回糸	〃	〃	〃		67-64II

表10 墨書・ヘラ描き土器観察表(3)

遺物 番号	器 種	色 調	新 土	焼成 度	底 部 切 離	部 位		銘	備 考	出 土 地 点	
						外 ・内 面	位 置				
66 須恵器	环	黄灰色	緻密	良	へら切	外勢	底部	「三」カ		68-55II	
265	II	白灰色	II	II	回条	II	II	「三」		68-64II	
266	II	暗灰色	細砂	II	へら切	II	II	「三」?		E B199	
267	II	高台付环	明灰色	緻密	II	II	II	II	人為的打ち欠き	S K237	
268	II	II	石英・砂混	II	II	II	II	II		48-68III	
269	II	II	石英・砂混	II	II	II	II	II	人為的打ち欠き	48-68II	
270	II	II	II	II	II	II	II	II		48-69II	
271	赤燒土器	茶褐色	石英・砂混	II	回条	II	II	II		49-69II	
272	須恵器	II	暗褐色	緻密	II	へら切	II	II		51-66III	
273	II	II	明灰色	細砂	II	回条	II	II	人為的打ち欠き	52-68II	
274	II	II	灰褐色	緻密	II	II	II	II		52-69II	
275	II	II	暗灰色	細砂	II	II	II	II	「三」	63-64	
153	II	II	明灰色	緻密	II	II	II	II	「十」	S K255 F 2	
276	II	II	II	II	II	へら切	II	II		66-62II	
277	II	II	II	II	II	回条	II	II	人為的打ち欠き	67-64II	
278	II	II	暗灰色	II	II	へら切	II	体部	「十」	II	68-64II
279	赤燒土器	赤褐色	細砂	II	不明	II	II	「連」		E B185	
280	II	II	暗灰色	緻密	II	II	II	II	「連」?	E B187	
281	II	II	白灰色	石英・砂混	II	回条	II	II	人為的打ち欠き	50-68II	
282	II	II	暗灰色	緻密	II	不明	II	II	「連」カ	51-67III	
283	II	II	白灰色	石英・砂混	II	回条	II	底部	「否」	S K381	
284	II	II	明灰色	緻密	II	へら切	II	II	「亞」カ	52-68III	
285	II	II	II	II	II	II	II	「否」		63-65II	
286	II	II	II	石英・砂混	II	余切	II	II		68-13	
23	赤燒土器	II	II	II	II	回条	II	II	「千」	S E250 F 2	
68	II	II	赤褐色	II	II	II	II	底部	II	S K311	
24	II	II	II	石英・砂混	II	II	II	II	「直」	人為的打ち欠き	S E250 F 3
11 須恵器	II	暗灰色	緻密	II	回条	II	体部	「眾」		S E250 F 4	
287	II	II	明灰色	緻密	II	回条	II	底部	「字」		S D284
61	II	II	II	II	II	II	II	II		S K311 F 2・3	

表12 墓書・へら書き土器観察表(5)

遺物 番号	器 種	色 調	胎 土	焼成 度	底 部 切 離	部 位		跡	備 考	出 土 地 点
						外・内面	位 置			
317	須恵器	白灰色	緻密	良	回条	外面	底部			67-64
318	II	明灰色	石英・砂混	II	へら切	II	II			70-60
II	II	鐵密	II	余切	内面	II	II	「印」 水子口	へら書き文字・ 人為的打ち欠き	S D345
319	II	暗灰色	石英・細砂	II	II		II	メ	へら書き・ 人為的打ち欠き	47-67 II
320	II	朱顔塗料	細砂	II	II		II	△	へら書き	51-68 II
321	II	暗灰色	石英・砂混	II	II		II	-	へら書き	64-54 II
322	II	暗灰色	細砂	II	II		II	-	へら書き	TP 37
323	II	白灰色	緻密	II	回条		II	×	へら書き	TP 49
324	II	明灰色	緻密	II	II		II	-	へら書き・ 人為的打ち欠き	TP 101
325	II	高台付II	白灰色	緻密	へら切	外面	II		軸用観	47-68 III
326	II	II	石英・砂混	II	回条	II	II			E B 337
13	II	暗灰色	緻密	II	II	II	II			S E 250 F 1



第36図 墓書土器出土点数グラフ

IV まとめ

1. 遺構の配置と変遷

新青渡遺跡の2次調査で検出された遺構には、掘立柱建物跡13棟（A区で3棟、B・B'区で8棟、C区で2棟）、井戸跡2（B区）、土壙18（B区15、C区5）、製鉄遺構1（C区）溝状遺構101（B区51、B'区60）、河川跡などがある。

これら遺構の検出状況を1次調査も加味して考えるに、（1）1次調査区、（2）2次調査A区、（3）2次調査B・B'・C区の三郡に分けることができ、いずれも建物跡を伴った構成内容を示している。第5図試掘 sondage III層柱状図で明らかのように、地山層が高くなっている地域をえらんで村落が営まれていた事がわかる。

掘立柱建物跡はその規模によって三つに分けられる。一辺が10m内外を測る規模の大きいものSB40・265建物跡と、一辺が6～9m内外のSB30・50・150・457・461・462建物跡と、それよりも小規模なSB80・132・458・459・190・465建物跡である。

建物跡の時期については、掘方内の出土遺物が微量のものが多く連続はできないが、平安時代9～11世紀代と概括される。なお、SB265・457・459建物跡三棟については、出土遺物、建物南北軸方位、配置関係などから同時期の所産の可能性が強い。

これら建物跡の閑地にSE250・260井戸跡・土壙がある。土壙については建物跡内に重複しているものもあるが、建物内の一施設としての役割があるものもあるかもしれない。古代村落内で建物跡と井戸跡が重複しあう例は無く、井戸としての機能の時間的経過・役割を考える上での重要な点と考えられる。

SE250井戸跡、SK311土壙の两者より、墨書き土器、斎串が出土しており、古代人の信仰形態を知る貴重な資料といえる。出土土器からSE250井戸跡は10世紀中葉から末葉頃（井戸の廃棄時期）、SK311土壙は11世紀前半頃と推定したが、斎串の編年から見ても、（旧）SE250→SK311（新）が言える。墨書き土器の出土量といい、又それがSE250井戸跡周辺とSK311土壙周辺に集中している事から、時期的に二度に渡る大々的な祭祀がとり行なわれた事が推察される。

B'区では、溝状遺構が建物跡・土壙などの生活遺構と重複なく単独で集中してある。遺構の性格は不明であるが、いずれにしても建物がある居住区域とは離れてある点に注目しておきたい。

精査区全域を概観するに、村落内における居住区地域内の建物の配置、井戸跡の位置、溝状遺構の集中域、又製鉄遺構の存在など、古代村落の全容とまではいかないが、その形態の一部を本調査では知る事ができた。尚総括的に遺跡は9～11世紀の所産といえる。



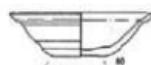
酒田市飛島 テキ穴



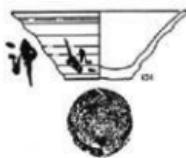
遊佐町 地正面遺跡



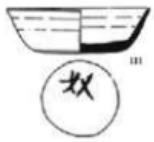
八幡町 堂の前遺跡



八幡町 後田遺跡



酒田市 上ノ田遺跡



八幡町 後田遺跡



14



22



酒田市 北田遺跡

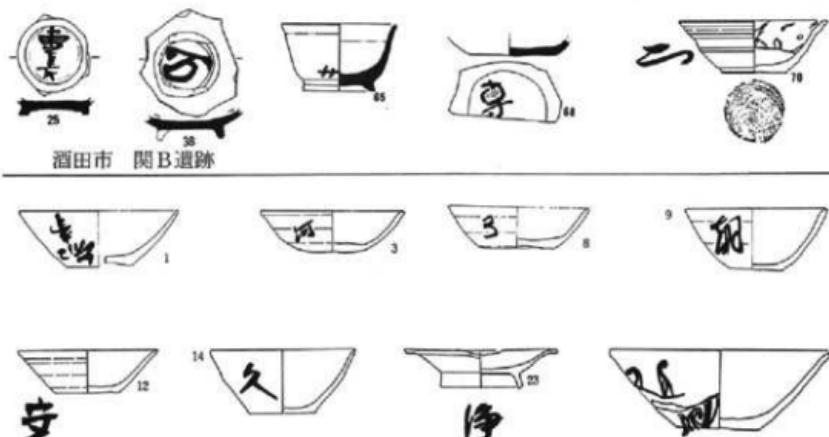
第37図 庄内地方出土墨書き器 (1)

2. 庄内地方出土の墨書き土器

近年の発掘調査により、庄内地方における墨書き土器の出土量も増加している。出土点数の多い遺跡には、酒田市の上ノ田・北田・関B遺跡、八幡町の後田遺跡、遊佐町の地正面遺跡、藤島町の平形遺跡があげられる。又、今年度の調査による八幡町の沼田遺跡と本遺跡をさらに加える事ができる。遺跡の性格は早急には断定できないが、公的な官衙・官舎と考えられる上ノ田遺跡、古代村落と考えられる北田・関B・後田・地正面・平形遺跡（庄園・庄家の可能性もある）・新青渡遺跡の二つに分ける事が出来る。

墨書き土器をその器種別に観るに、壺類でしかも須恵器が頻繁に使用されている。上ノ田遺跡では34点出土しておりすべて須恵器で壺・皿・蓋が使用されている。北田遺跡では1・2次合わせて34点出土しており、赤焼土器への墨書きは二点だけである。関B遺跡では1・2次合わせて31点出土しており、内須恵器が20点である。後田遺跡では26点出土しており、内須恵器は21点である。地正面遺跡では22点出土してすべて須恵器である。平形遺跡では29点出土しており、内須恵器では27点である。新青渡遺跡では125点出土しており、内須恵器が99点である時期的に9世紀代とされる上ノ田・地正面遺跡で須恵器の使用率が高く、時代が登るにつれて、赤焼土器の使用が増加している事がわかる。

墨書き部位については、壺については底部が大半をしめている。文字の別により底部、体部と書き分けた形跡は無いようである。



第38図 庄内地方出土墨書き土器（2）

一つの遺跡で同一文字が多数出土したのには、後田遺跡の「中」16点、地正面遺跡の「上」15点、新青渡遺跡の「祁」38点、「三」34点がある。特に新青渡遺跡では点数も多く、出土地点も集中した地域に限定されており、祭祀的内容を色濃く反映している。

墨書銘は一字のみを書く例が多く、言葉が簡略化あるいは省略されている場合もあると考えられ、その意味と解釈についても諸説ありまだ不鮮明といえる。北田遺跡の「靈長」や新青渡遺跡の「祁」については文字の通りとすれば嘉字・呪字の分類に入る。

墨書土器の出土例は、発掘調査の増加に伴ってさらに多くなる事と思われるが、遺跡の性格と墨書土器の関わり、又文字の使用と普及の問題、墨書土器がもっている古代に限定されるその性格についてが今後の課題といえる。

註

- 註1 小野 忍 「城跡柵跡」『月刊考古学ジャーナル』119号 1982年
註2 川崎利夫 「出羽國分寺はどこにあったか」『羽陽文化』114 1982年
註3 佐藤裕宏 「仁和三年条の國府移転に関する覚書」『庄内考古学』16号 1979年
註4 米地文夫『土地分類基本調査』酒田 5万分の1 地形分類』山形県 1978年
註5 安部 実他 「豊原遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書 第66集 1983年
註6 安部 実他 「新青渡遺跡第1次発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第67集 1983年
註7 佐藤庄一・安部 実 「後田遺跡第2次発掘報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第77集 1984年
註8 佐藤庄一・安部 実「後田遺跡」『農林事業関係遺跡(2) 発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書 第64集 1983年
註9 註6に同じ
註10 註6に同じ
註11 川崎利夫他 「関B遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書 第47集 1981年
川崎利夫他 「北田遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書 第48集 1981年
註12 金子裕之 「古代の木製模造品」『研究論集VI』奈良国立文化財研究所学報第38冊 1983年
註13 佐藤庄一他 「上ノ田遺跡」『農林・土木事業関係遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第52集 1982年
註14 註11に同じ
佐藤庄一他 「北田遺跡第2次発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第53集 1982年
註15 註11に同じ
佐藤庄一他 「関B遺跡第2次発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第68集 1982年
註16 註8に同じ
註17 佐藤庄一他 「農林事業関係遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第51集 1982年
註18 川崎利夫他 「平形遺跡・周辺遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第26集 1980年
註19 野尻 侃他 「沼田遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第78集 1983年

図 版



図版 1 ▲遺跡周辺航空写真（酒田市教育委員会提供）
▼遺跡近景（北西から）



図版2 ▲南北パイプ埋設箇所試掘状況（北から）

▼東西排水路試掘状況（東から）

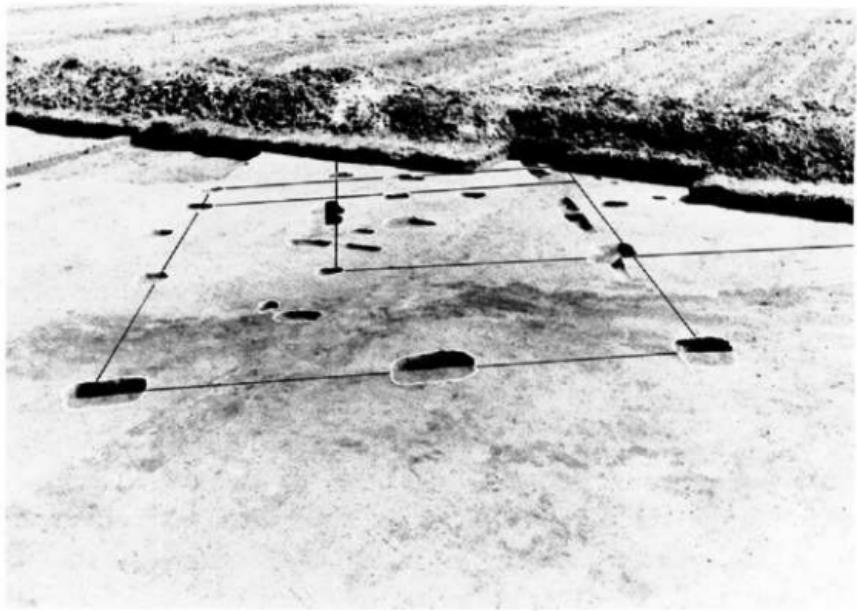


図版3 A区 ▲調査状況

▼造構検出状況（東から）

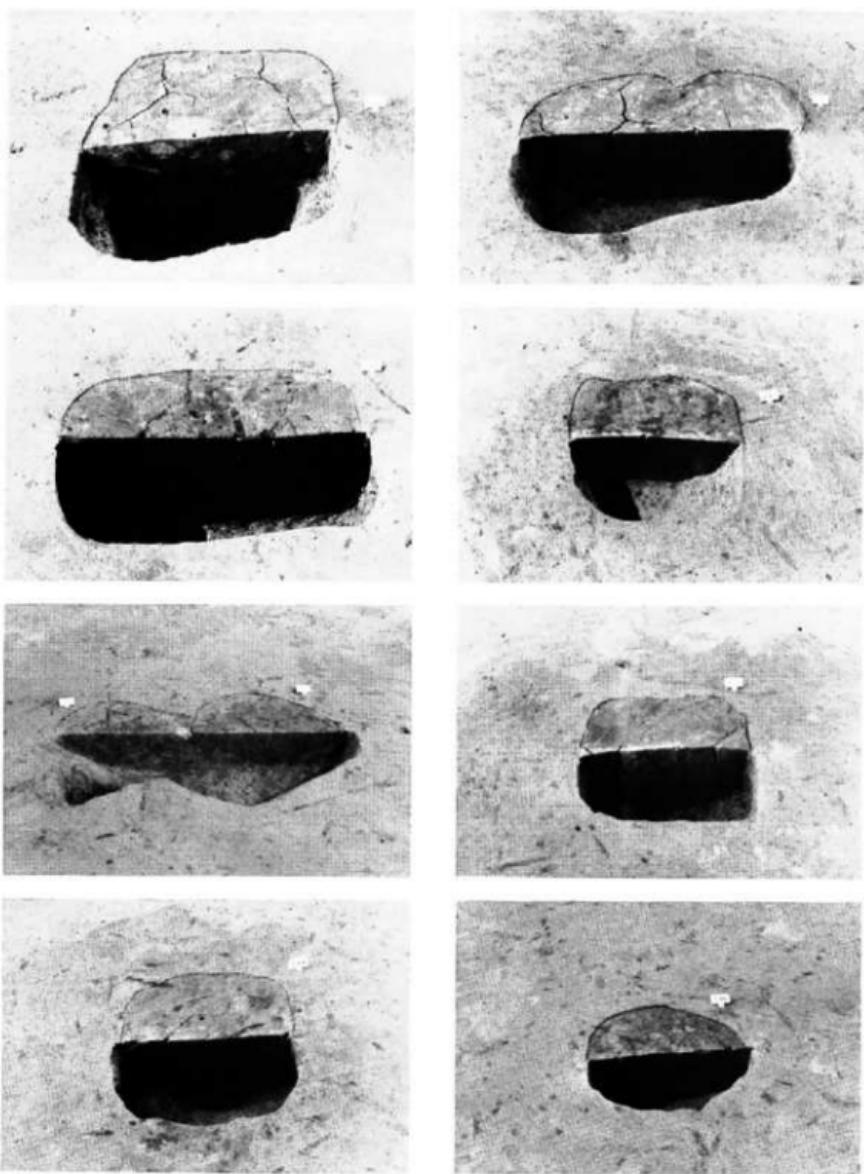


図版4 A区 ▲ S B132・142・150建物跡・S X130落ち込み（西から）
▼ S B150建物跡（南から）



図版5 A区 ▲ S B 132・142建物跡（北から）

▼ S B 142建物跡（南から）



図版 6 A 区 S B 132 建物跡

- | | |
|-----------|-----------|
| E B 135柱穴 | E B 134柱穴 |
| E B 133柱穴 | E B 136柱穴 |
| E B 137柱穴 | E B 138柱穴 |
| E B 139柱穴 | E B 140柱穴 |



図版7 B区 ▲南側遺構検出状況（西から）

▼北側遺構検出状況（西から）



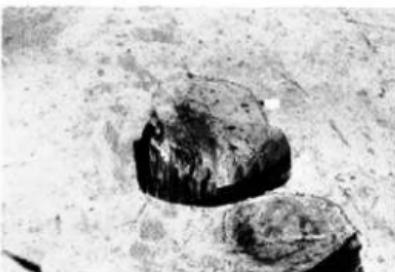
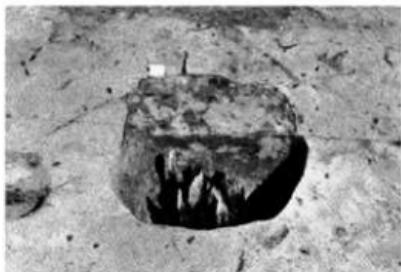
図版8 ▲B区西侧遺構検出状況（南から）

▼B'区 SG460河川跡（北西から）



図版9 ▲B区東側遺構検出状況（南から）

▼B'・C区近影（東から）

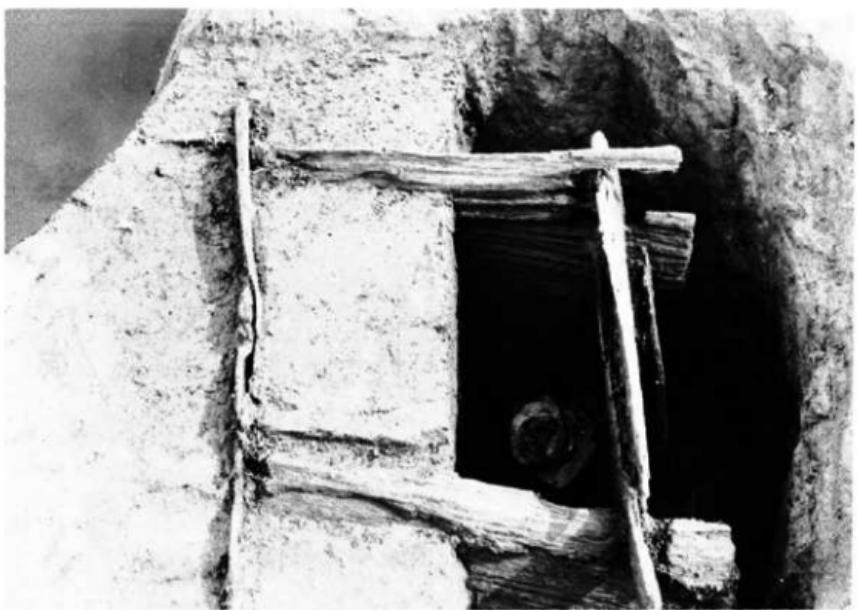


图版10 B区柱根残存柱穴

- | | |
|-----------|-----------|
| E B 279柱穴 | E B 272柱穴 |
| E B 452柱穴 | E B 454柱穴 |
| E B 451柱穴 | E B 453柱穴 |



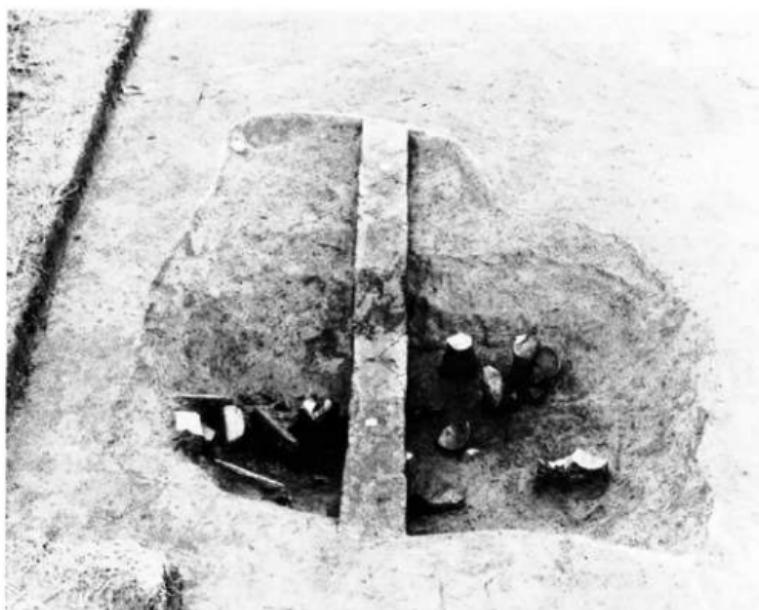
図版11 B区 ▲ S E 250・260上層遺物出土状況（南から）
▼ S E 260井土跡（東から）



図版12 B区 ▲SE250土層（南から）
▼SE260遺物出土状況（西から）



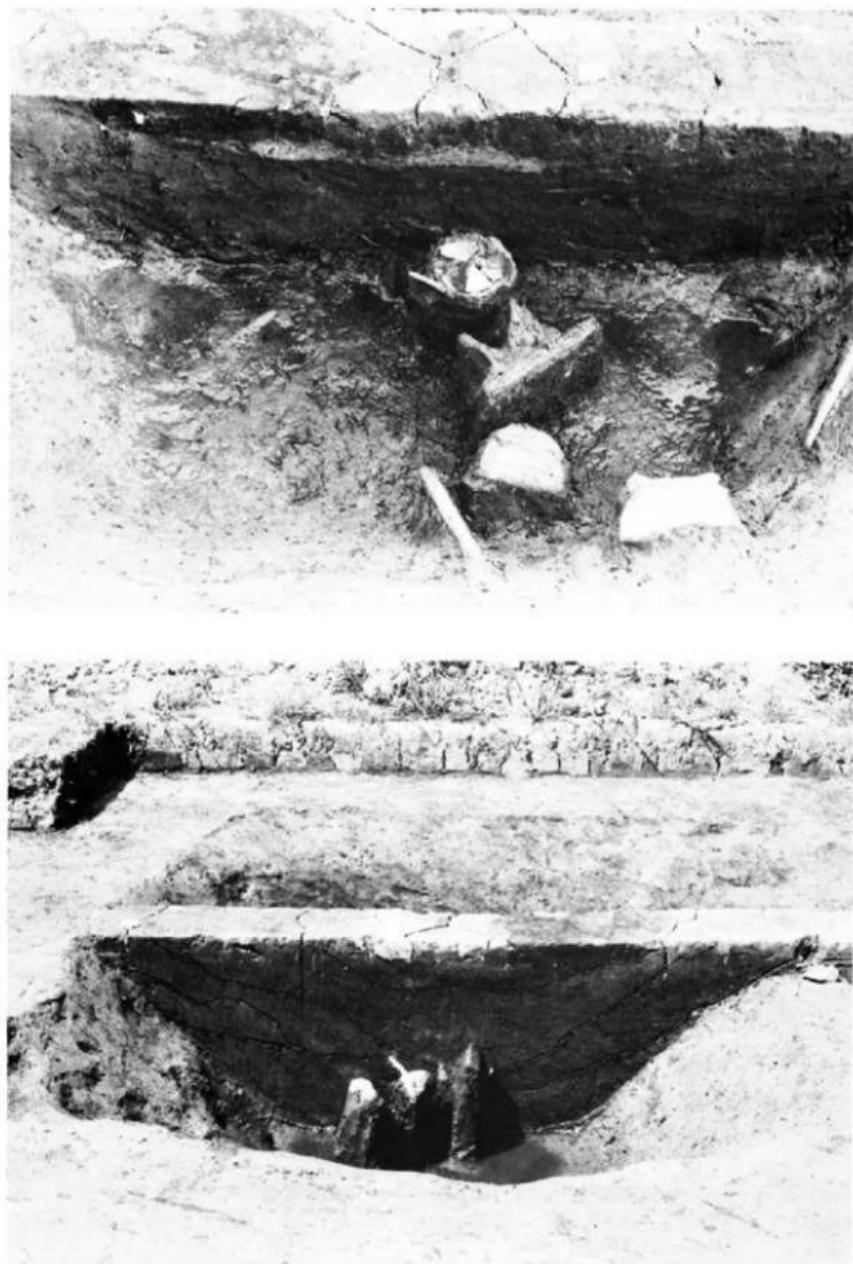
図版13 B区 ▲ S E 250土層（南から）
▼ S K 311遺物出土状況（南から）



図版14 B区 ▲SK311ひょうたん出土状況（南から）
▼SK255・258上層遺物出土状況（南から）



図版15 B区 ▲ S K 255上層東側遺物出土状況（東から）
▼ S K 255・258土層（東から）



図版16 B区 ▲SK255上層西側遺物出土状況（西から）

▼SK255土層堆積状況（東から）



図版17 B区 ▲ SK255下層遺物出土状況（東から）
▼ SK255完掘状況（東から）



図版18 B区 ▲SK255完掘状況（北から）

▼SK311土壤土層（南から）

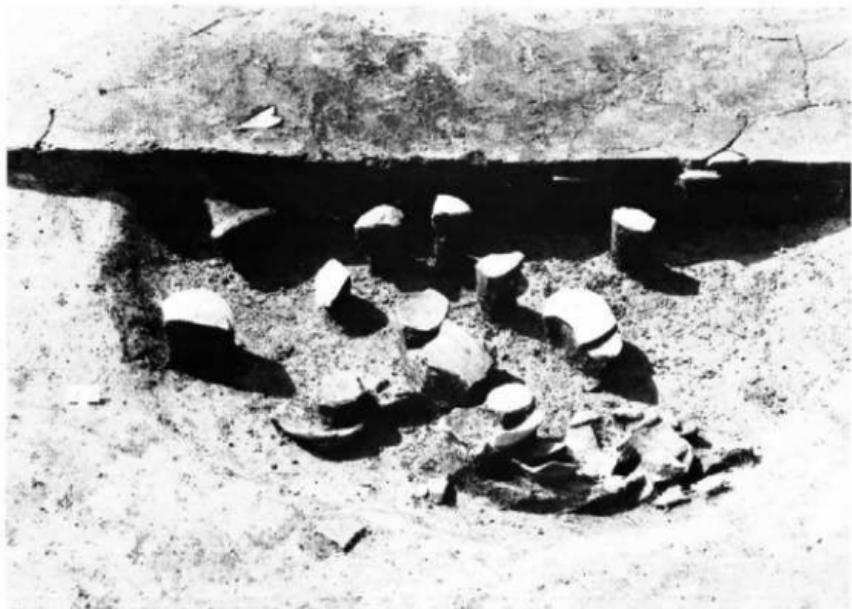


図版19 B区 ▲SK311土層近景（南東から）

▼SK235土壤（北西から）



図版20 B区 ▲SK249土壤（西から）
▼SK251土壤（南東から）



図版21 B区 ▲ S K 252土壤 (南から)

▼同 遺物出土状況 (東から)



図版22 ▲ B区 S D433漆器出土状況（南から）

▼ B'区 造構検出状況（東から）



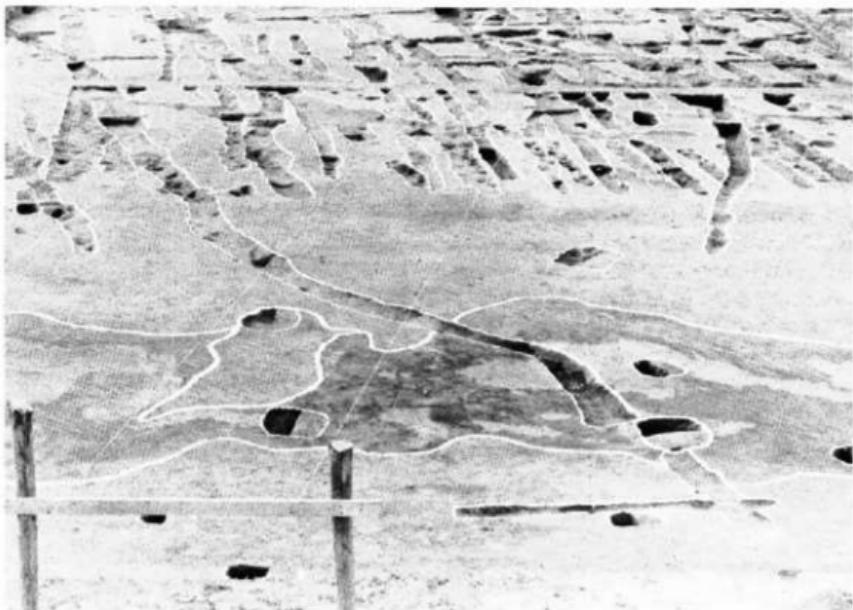
図版23 B'区 ▲溝状遺構検出状況（南から）

▼西側完掘状況（北から）



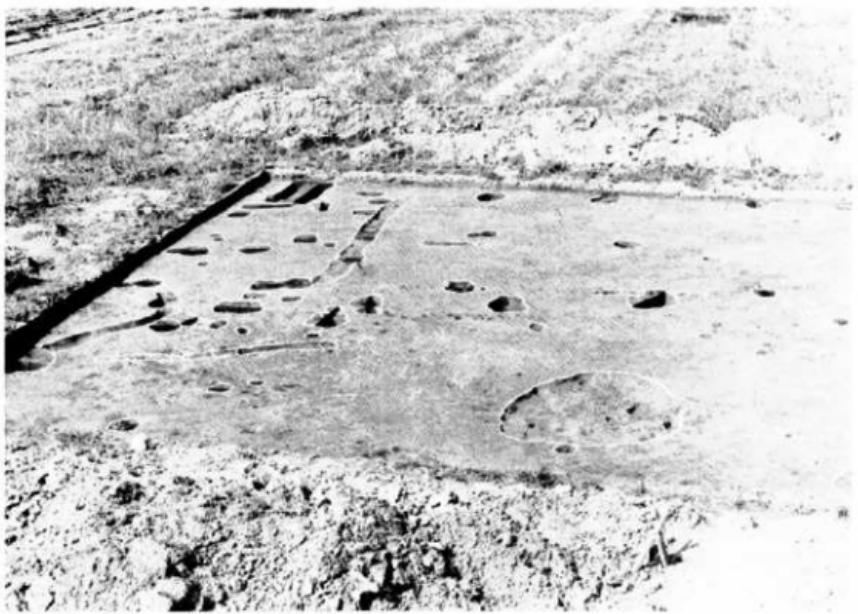
図版24 B'区 ▲東側完掘状況（北から）

▼調査状況（東から）



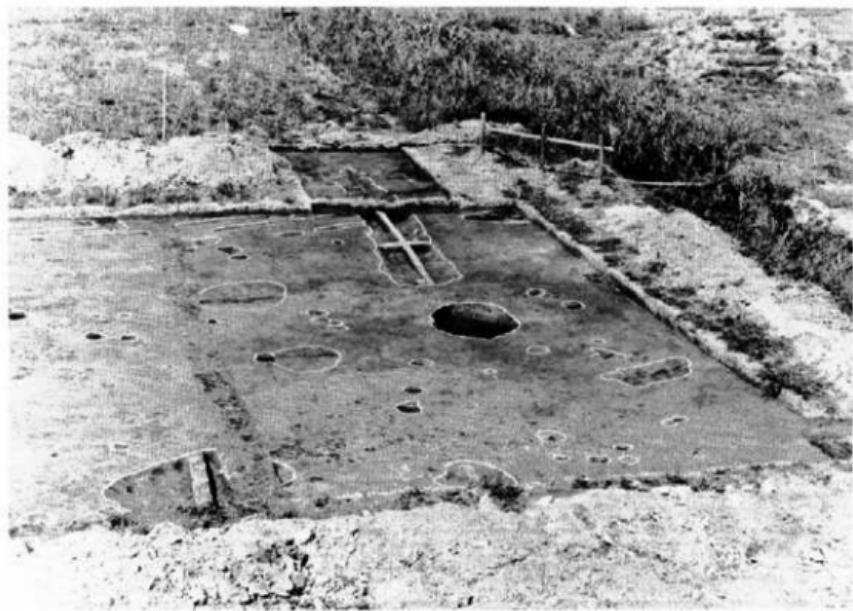
図版25 ▲B'区 SG460溝状遺構（東から）

▼C区 遺構検出状況（北東から）

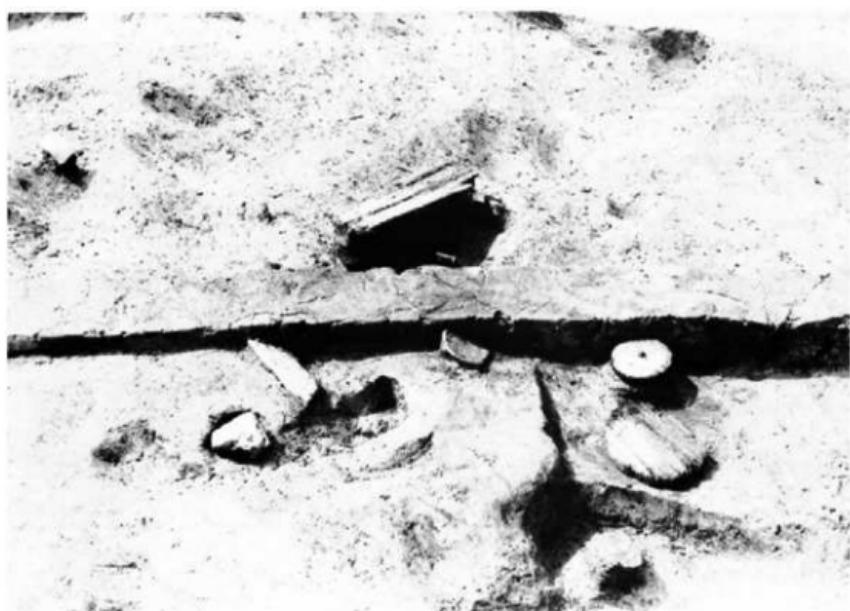


図版26 C区 ▲完掘状況全景（南から）

▼同 西側（南から）

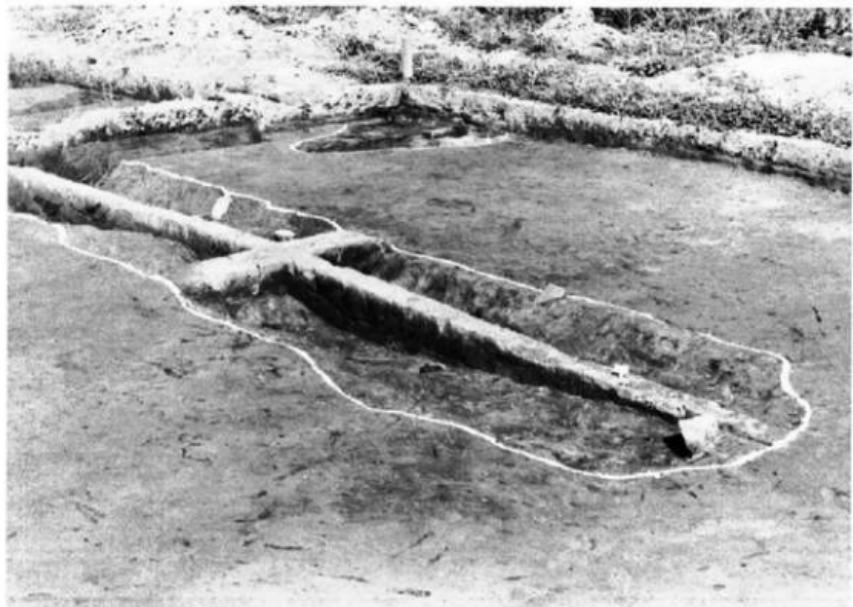
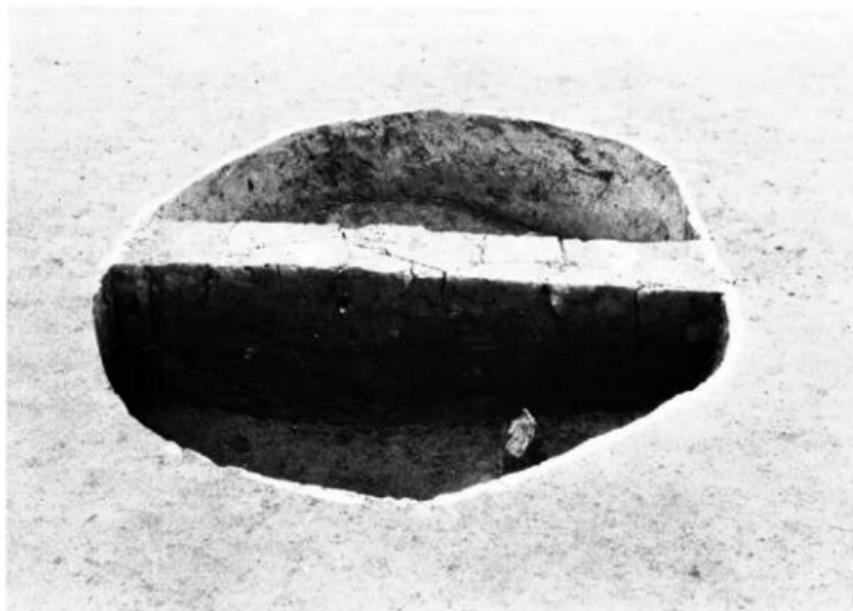


図版27 C区 ▲ S K 237遺物出土状況（南から）
▼発掘状況東側（南から）



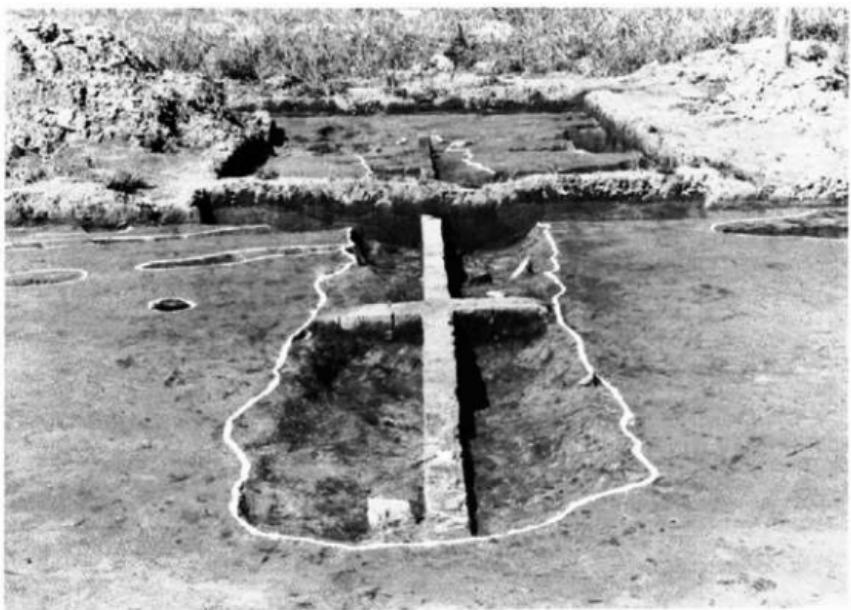
図版28 C区 ▲SK237遺物出土状況（東から）

▼SK179遺物出土状況（西から）



図版29 C区 ▲ S K 179土層（南から）

▼ S Q 208南側（南西から）

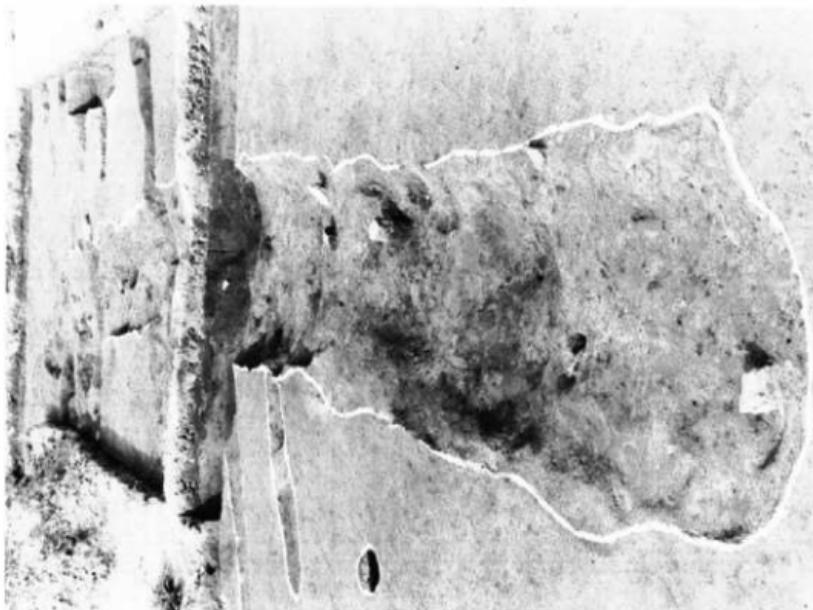


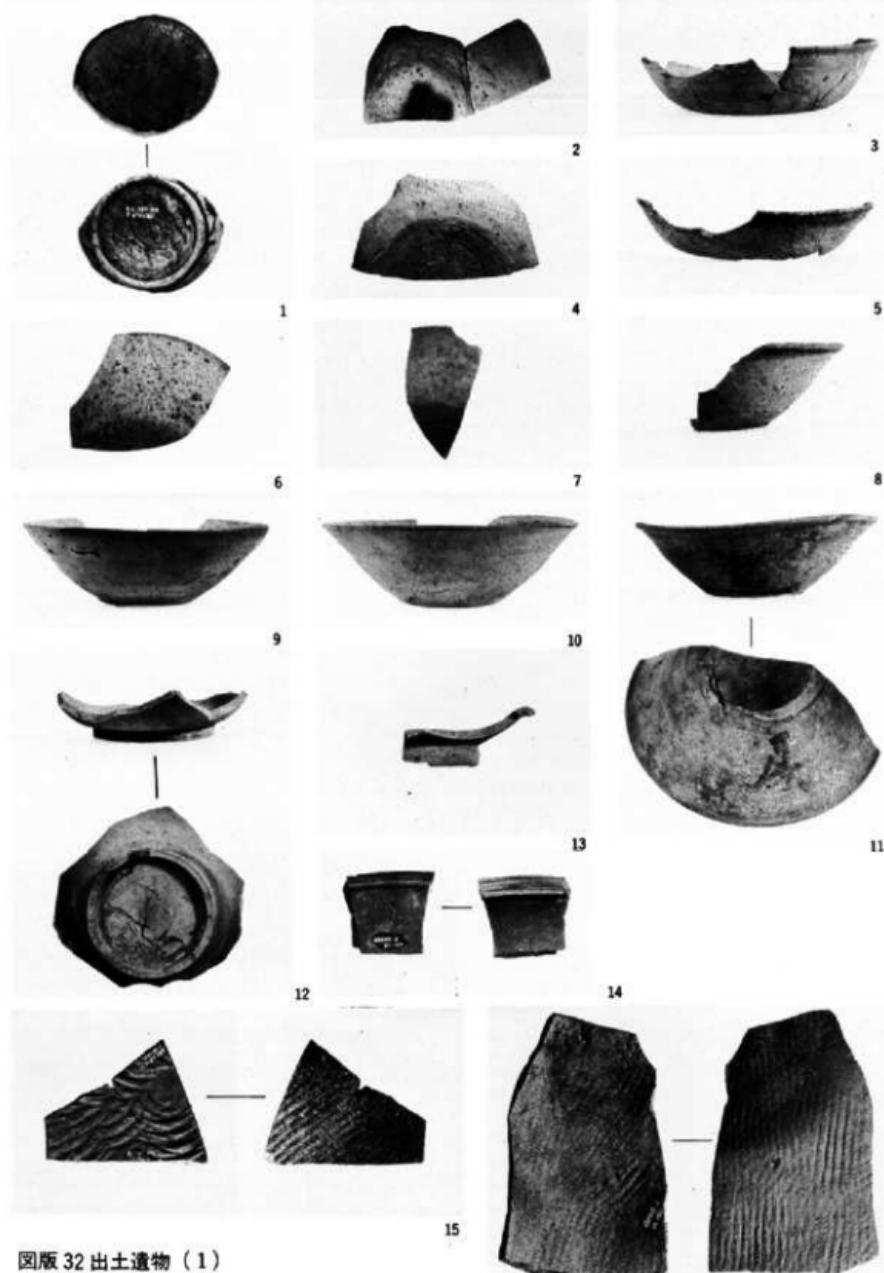
図版30 C区 ▲ S Q208製鉄跡 (南から)

▼同 土層 (南から)

▶ 同 左 (北から)

图版31 C区 ◀ S Q 208完掘状况 (南から)





図版 32 出土遺物（1）
SE250井戸跡



17



20



22



18



21



23



19



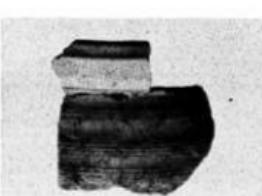
25



26



24



27



28



29

図版33 出土遺物（2）
SE250井戸跡



30



31



32



33

36



34



37



35



38

図版34 出土遺物（3）

SE250・260井戸跡, SK311土壤(1)-104-



39



40



41



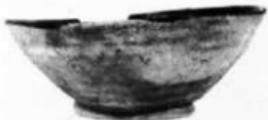
42



43



44



45



46



47



48



49



50



51



52



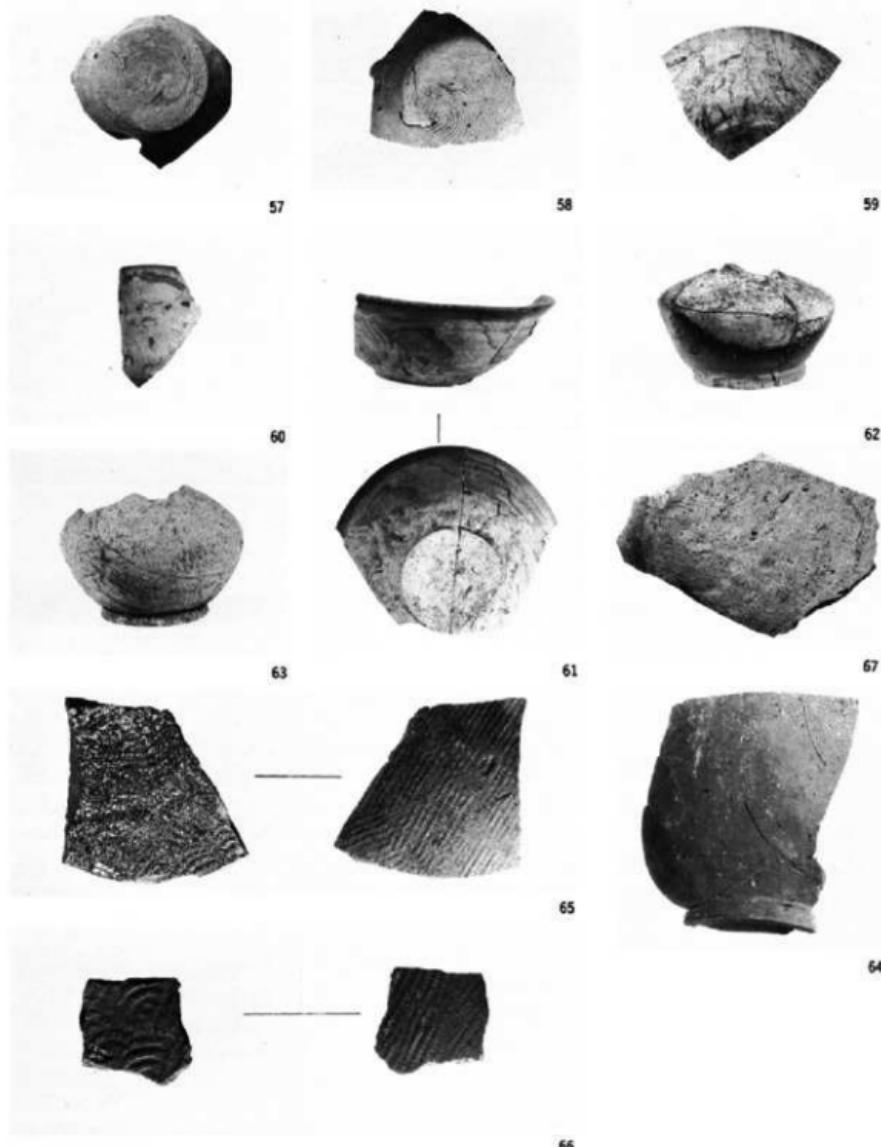
53



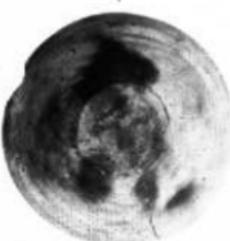
54



圖版35 出土遺物（4）
SK311墳（2）



图版36 出土遗物 (5)
SK311土壤 (3)



68



71



72



73



74



75



76



77



78



79



80

圖版37 出土遺物（6）
SK311土壤（4）



81



82



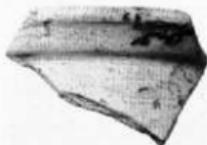
83



84



85



86



87



88

圖版38 出土遺物（7）
SK311土壤（5）



88



90



91



92



93



95



94

图版39 出土遗物 (8)
SK311土壤 (6)



97

96



98



99



100



101



102



103



104



105



106

図版40 出土遺物（9）
SK234土壤



107



108



109



110



111



112



113



114



115



116



117



—



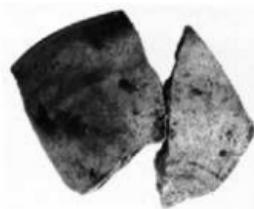
118

圖版41 出土遺物 (10)

SK235, 249, 257, 258土壤

—111—

SD345溝狀遺構



119



120



121



122



123



124



125



126



127



—



128



129



130



131



132

图版42 出土遗物（11）
SK252土壤（1）



133



134



135



136



137



138



139



140



141



142

图版43 出土遗物(12)
SK252土壤(2)



143



144



145



146



147



148



149



150



151



152



153

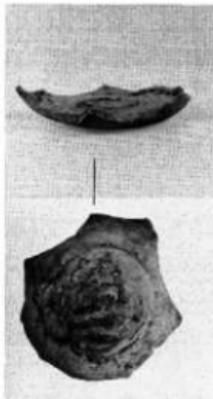


154

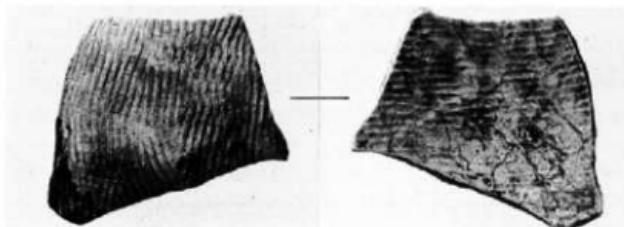
図版44 出土遺物（13）
SK255土壤



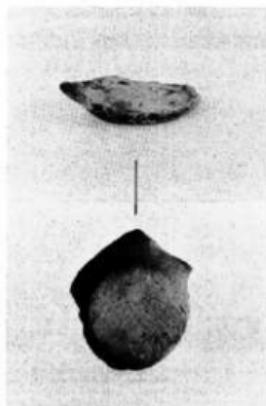
155



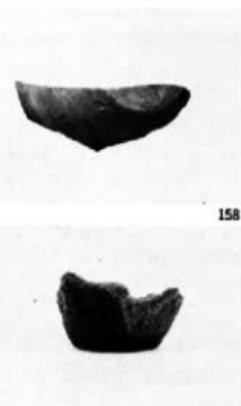
156



157



159



158



160

161

図版45 出土遺物 (14)
SK179, 237, 238土壤



162



163



164



165



166



167



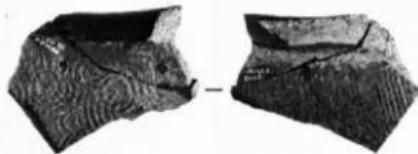
168



169



170

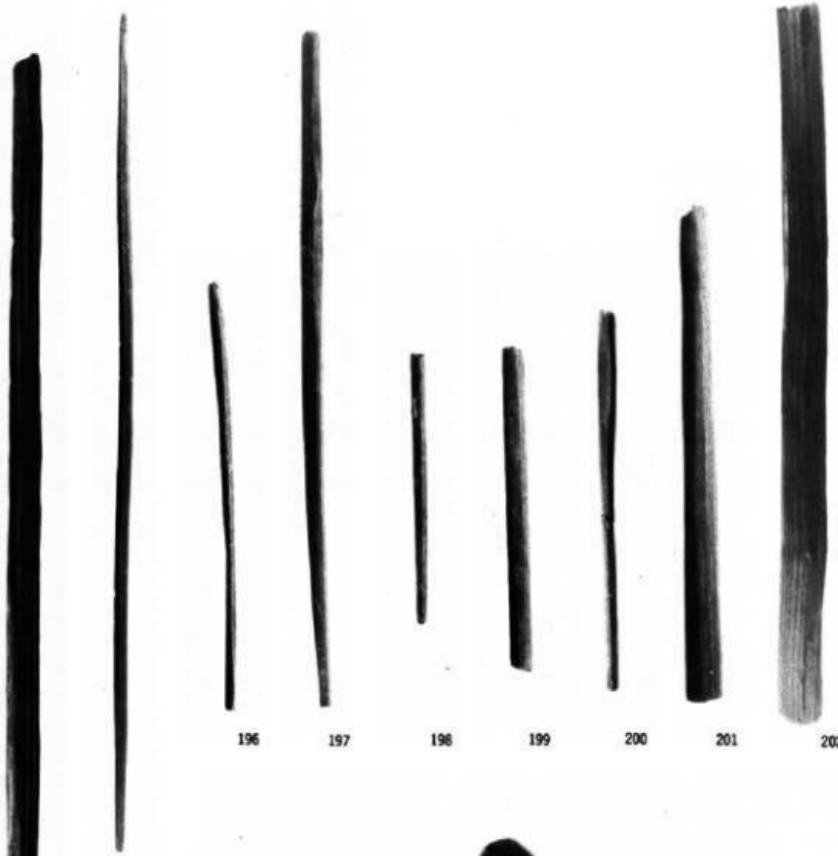


171.

図版46 出土遺物 (15)
SQ208



图版47 出土遗物 (16)
亥串



194
圖版48 出土遺物 (17)
木製品

193



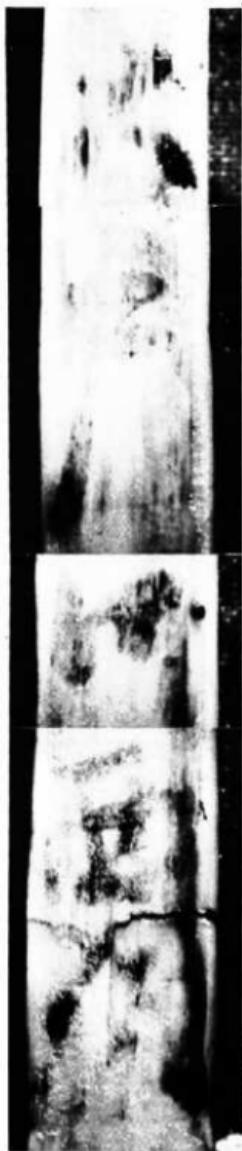
203



204



205



(赤外線テレビ)

図版49 出土遺物 (18)
木製品・木簡

206

207



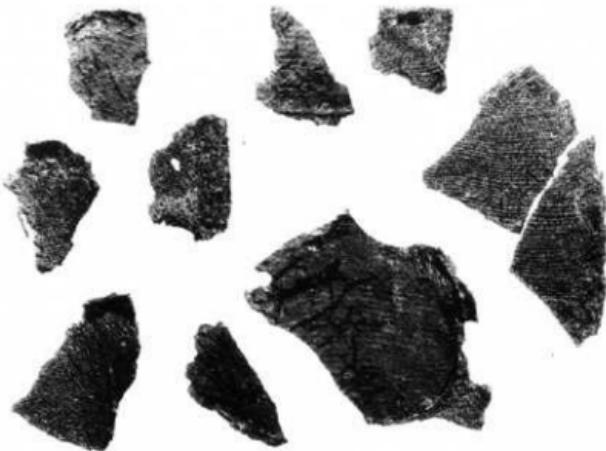
TP78 下耽



SK311 種子

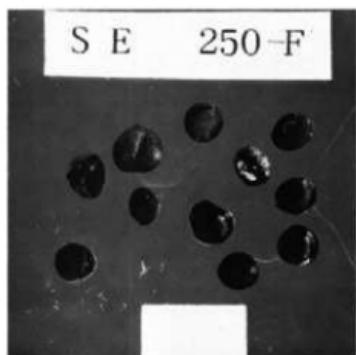
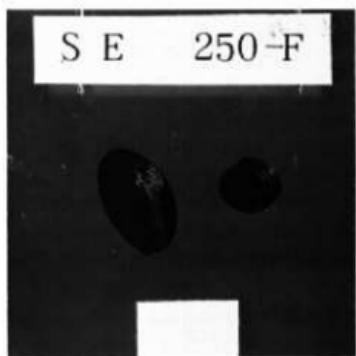
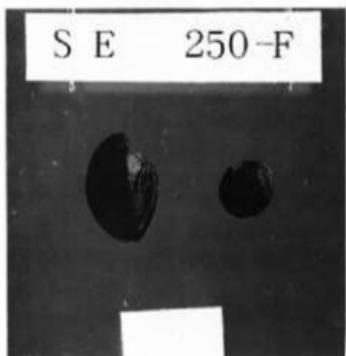
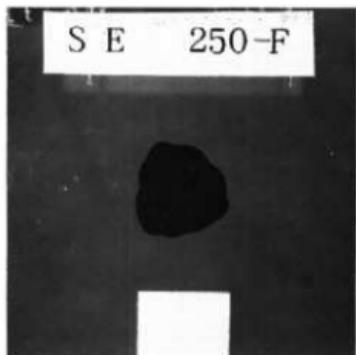


SD433 漆器

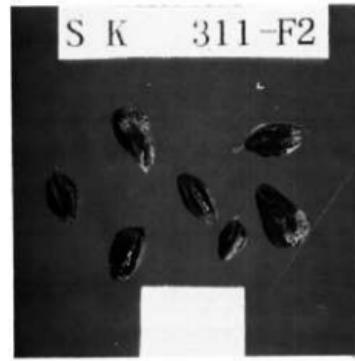
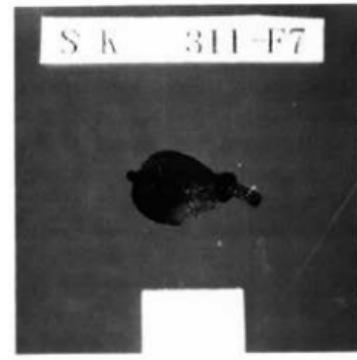
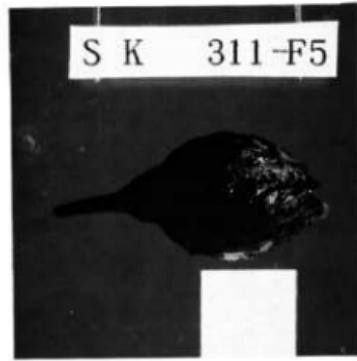


SK237 漆器

図版50 出土遺物 (19)



図版51 S E 250出土種子



図版52 SK 311出土種子



12
「弐」



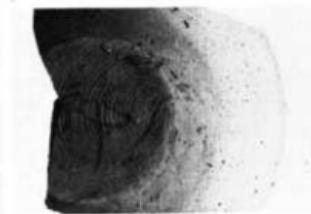
212
「弐」?



208
「弐」?



203
「弐」?



209
「弐」?



214
「弐」?



210
「弐」?



215
「弐」?



54
「弐」



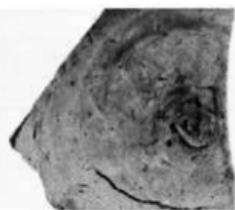
216
「弐」?



211
「弐」



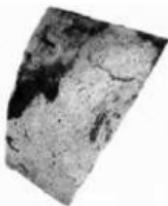
217
「弐」?



218
「弐」



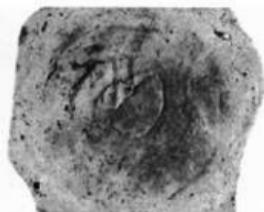
224
「弐」



219
「弐」力



225
「弐」力



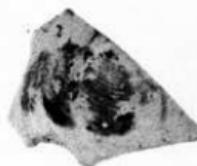
220
「弐」



226



221
「弐」



227
「弐」力



222
「弐」



223
「弐」



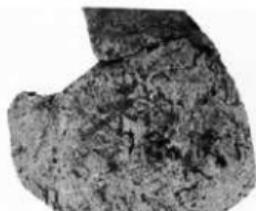
229
「弐」



230
「弔」?



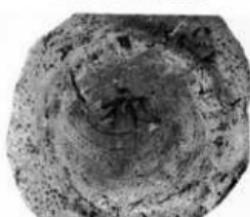
236
「弔」



231
「弔」



237
「弔」



232
「弔」



238
「弔」



233
「弔」?



239
「弔」?



234
「弔」



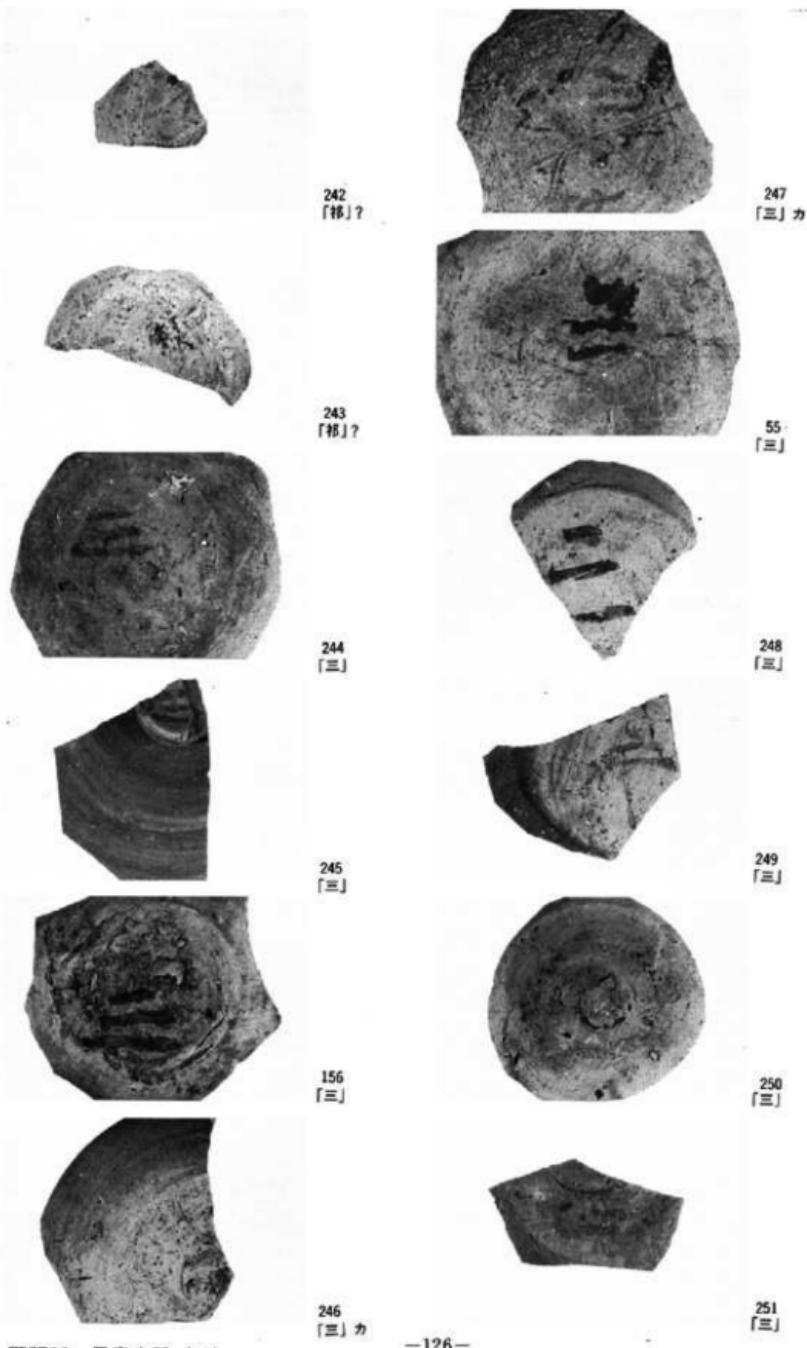
240
「弔」力



235
「弔」



241
「弔」?



図版56 墨書土器 (4)



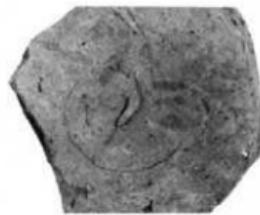
252
「三」
カ



258
「三」



253
「三」
カ



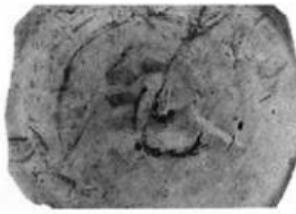
259
「三」



254
「三」
カ



260.
「三」



255
「三」



261
「三」



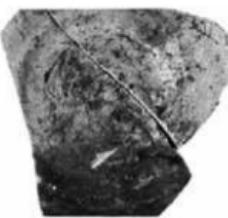
256
「三」
カ



262
「三」



257
「三」
カ



263
「三」



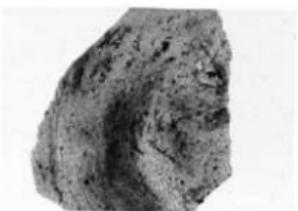
264
「三」カ



270
「三」?



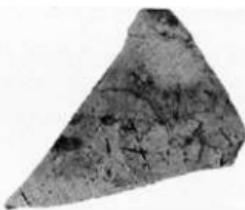
265
「三」



271
「三」?



266
「三」?



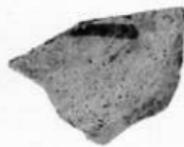
272
「三」?



267
「三」?



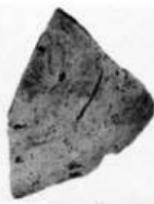
273
「三」?



268
「三」?



274
「三」?



269
「三」?



275
「三」



275
「十」



281
「通」?



276
「十」



282
「通」カ



277
「十」



283
「否」



278
「十」



284
「否」カ



279
「通」?



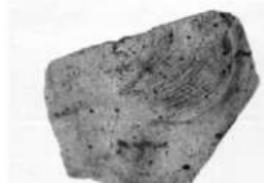
285
「否」



280
「通」?



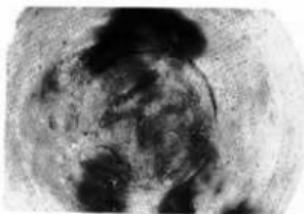
286
「否」



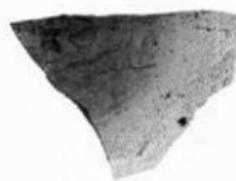
23
「干」



56
「口」



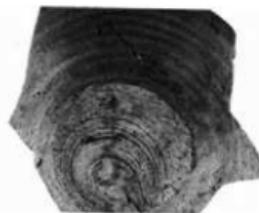
68
「干」



288



24
「宜」



289
「考」



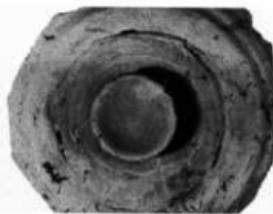
11
「居」



290
「石」?



287



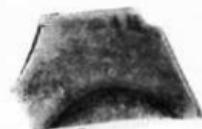
291



61



292



293



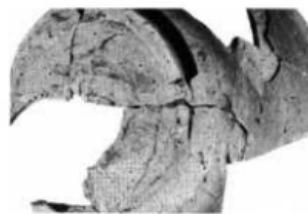
299

294
〔二〕

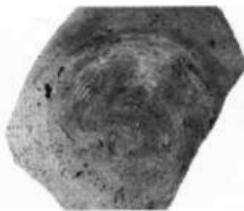
300



295



301



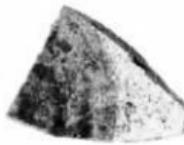
296



302



297



303



298



304



305



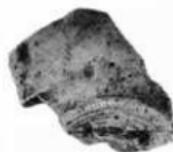
311



306



312



307



313



308



314



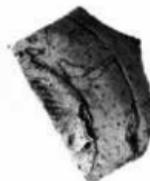
309



315



310



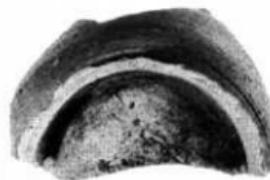
316



317

322
「—」

318

323
「×」118
「口子口」324
「—」319
「×」

325

320
「×」

326

321
「—」

13

山形県埋蔵文化財調査報告書第79集

にい あお ど
新 青 渡 遺 跡

発掘調査報告書

昭和59年3月24日 印刷

昭和59年3月30日 発行

発行 山形県教育委員会

印刷 横大風印刷
